Sibelius® First

チュートリアル

7.1.1 版
2012 年 2 月

チュートリアル著作：Tom Clarke

ソフトウェア開発チーム全員のリストおよび謝辞については、**[バージョン情報]** ダイアログをご覧ください。

開発に際して Sibelius とそのマニュアルについてさまざまな貴重なご意見をいただいた多くの方々に、ここであらためてお礼を申し上げます。

法律に基づく通告

この製品はソフトウェア使用許諾契約の条件に従います。

©2012 このガイドの著作権は Avid Technology, Inc.（以下 "Avid"）に帰属します。不許複製。著作権法に基づき、Avid の書面による同意なくして本書の一部または全部を複製することはできません。

Avid、Sibelius、Scorch は、USA、UK、その他の国において Avid Technology, Inc. の登録商標です。ReWire は Propellerhead Software の商標であり、許可を得て使用しなければなりません。VST は Steinberg Soft- und Hardware GmbH の商標です。その他すべての商標はそれぞれの所有者に帰属します。

製品の機能、仕様、システム要件、可用性は予告なく変更されることがあります。

取扱説明書に対するご意見

弊社は常に取扱説明書の改善に努めています。説明書に関するご意見、訂正、またはご提案がありましたら、**docs@sibelius.com** まで E メールをお送りください。

目次

はじめに 5
プロジェクトについて 8

プロジェクト1 9
1.1 スコアを開く 11
1.2 音符の入力と編集 17
1.3 楽譜の選択とコピー 23
1.4 フレキシタイム入力 27
1.5 アルファベット入力とステップ入力 30
1.6 再生 35
1.7 テキストと強弱記号 38

プロジェクト2 43
2.1 新規スコアの作成 45
2.2 スキャニング 51
2.3 音部記号、調号、連音符 54
2.4 スコアへの記号の追加 56
2.5 レイアウトとフォーマット 60
2.6 エクスポート 64

プロジェクト3 67
3.1 キーボードの楽譜 69
3.2 ギターの楽譜 71
3.3 アイデアとドラムの楽譜 73
3.4 コード記号 78
3.5 リピートとコーダ 83
3.6 サウンドと再生 86

索引 89

目次

はじめに

注意！

Sibelius プログラムの使用を開始する前に、必ずこのセクションを通してお読みください。

Sibelius First を使って独自の楽譜作成を始める前に、3つのチュートリアルプロジェクトすべてに目を通すことを強くおすすめします。Sibelius First は、分かりやすく、ほとんどの操作について説明を要しませんが、これらのプロジェクトに目を通さないで作業を進めると、いくつかの基本的な機能を理解することのないまま使用することになる危険があります。特に、これまで別の楽譜作成ソフトウェアを使用していた場合は、Sibelius First とは動作が異なることがあるため、その可能性が高まります。プロジェクトの所要時間は数時間です。プロジェクトに目を通せば、一般的な楽譜の入力、編集、再生、印刷の操作を理解することができ、より複雑な楽譜の扱いについても学ぶことができます。

これらのチュートルアルは、コンピューターの基本操作（マウスやキーボード、メニュー、ファイルなどについて）をご理解いただいていることを前提として説明しています。

オンスクリーンリファレンスガイド

より高度なトピックについては、『Sibelius First リファレンスガイド』で個別に説明しています。このガイドでは、各機能を詳しく（専門用語について説明した**用語集**とともに）説明しています。画面上に『リファレンスガイド』を開くには、ツールバーのボタン（右図）をクリックするか、**［ファイル］▸［ヘルプ］**を選択し、**［Sibelius 7 First リファレンスガイド］**ボタン（ショートカットは **F1** または **⌘?**）をクリックします。

リファレンスガイドは、最初から最後まで通してお読みいただく必要はありません。多くのユーザーにとって、実際に必要となるのは記譜法のほんの一部だけである場合が多いからです。時間があるときに、『Sibelius First リファレンスガイド』の関心のある部分に目を通してください。

『リファレンスガイド』の囲み記事
『リファレンスガイド』の随所に置かれているこのようなコラムは、さまざまな記譜ルールについて説明しています。

タイポグラフィーと相互参照

コンピューターのキーの名前、メニュー、ダイアログなどは**このように表記**されます。

Sibelius First のコマンドは、コマンドボタンの帯であるリボンから実行します。リボンは、**［ファイル］**や**［ホーム］**をクリックしたときに画面の一番上に表示されます。各タブにはコマンドの種類（**［音符の入力］**、**［記譜］**、**［テキスト］**、**［レイアウト］**など）が表記されています。タブをクリックすると、これらのコマンドを実行するためのボタンが表示されます。リボンの各タブには関連コマンドの複数のグループが含まれています。

コマンドの選択方法を簡単に記述するため、このチュートリアルでは以下の表記法を用います。「**［ホーム］▸［楽器］▸［追加または削除］**を選択」は、**［ホーム］**タブをクリックし、**［楽器］**グループの**［追加または削除］**ボタンをクリックすることを意味します。

リボンについては以下のページで詳しく説明します。今はまだよく分からなくても心配しないでください。

🕮 **2.1 臨時記号**は、**［ファイル］▸［ヘルプ］▸［Sibelius 7 First リファレンスガイド］**を選択して臨時記号のトピック（『Sibelius First リファレンスガイド』）をご参照ください」という意味です。

基本的な用語

以下のコンピューター用語はほとんどがよく知られているものですが、一部にはあまり知られていないものもありますので、念のため説明しています。

- コンピューターのキーによっては、MacとWindowsで名称が異なるものがあります。このチュートリアルでは、以下の表記方法を用います。

Macの記号	Macの名前	Windows同等
⌘	**Command**	**Ctrl**（“Control”）
⇧	**Shift**	**Shift**
⌥	**Option**	**Alt**
⏎	**Return**	**Return**（メインキーボード上）
⌅	**Enter**	**Enter**（テンキー上）

- Sibelius Firstの操作方法は、Windows上でもMac上でもほとんど同じですが、違いがある場合には（主にキーボードショートカット）、Windows上での操作が先に記載されます。MacとWindowsのキーボードショートカットの違いについて詳しくは、リファレンスガイドの 🕮**キーボードショートカット**をご参照ください。すべてのショートカットの一覧が記載されています。キーボードショートカットはメニューにも表示されます。
- 「**Ctrl**＋**A**または**⌘A**」は、「**Ctrl**キー（Windows）または**⌘**キー（Mac）を押さえたまま**A**を押す」ことを意味します。**A**が大文字で書かれていても、特に指示がない限り**Shift**キーは押さないでください。同様に、同じキー上に**/**と**?**がある、**Ctrl**＋**?**または**⌘?**の様な標準のショートカットは、実際には**Shift**を押さずに**Ctrl**＋**/**または**⌘/**をタイプします。
- 同様に、「**Alt**＋クリックまたは⌥-クリック」は**Alt**（Windows）キーまたは⌥キー（Mac）を押さえたままクリックすることを意味します。
- Windowsの場合、クリックとは、マウスポインタを対象に置き、マウスの左ボタンでクリックすることを指します。右クリックとは、マウスポインタを対象に置き、マウスの右ボタンでクリックすることを指します。
- Macの場合、クリックとは、マウスポインタを対象に置き、左ボタンがある場合は左ボタンでクリックするか、旧型の1つボタンのマウスの場合はそのボタンでクリックすることを指します。**Control**＋クリックとは、キーボードの**Control**（**Ctrl**と表記されることもある）キーを押したまま、左クリック（1つボタンではそのボタンをクリック）することを指します。ただし、マウスに右ボタンがある場合は右ボタンをクリックします。
- ドラッグとは、マウスポインタを対象に置き、マウスの左ボタン（Macの1つボタンではそのボタン）でクリックし、ボタンを押したままマウスを動かすことを指します。目的の位置まで動かしたら、マウスボタンを放します。
- ダイアログとは、各種選択ボタンを含むウィンドウです。ダイアログによっては、複数のページから構成され、ダイアログのページを切り換えるためのポップアップコンボボックス（Mac）、上部のタブ、リストボックスなどがあるものもあります。
- テンキーとは、コンピューターキーボードの右端にあるキーブロックで、数字や記号が割り当てられています。（ノートブック（ラップトップ）コンピューターは、通常は独立したテンキーを持っていません。詳しくは『リファレンスガイド』の 🕮**キーボードショートカット**参照。）
- **Return**キーは、文字キーの右の大きなキーです。キーボードによっては**Enter**や特別な矢印が表記されているものがありますが、本書では常に**Return**と呼びます。
- **Enter**キーは、テンキーの右下の大きなキーです。キーボードによってはキーに表記がないこともありますが、その場合も**Enter**キーを意味します。

リファレンスガイドの最後の**用語集**では、あまり一般的でない用語について説明しています。

アメリカ英語とイギリス英語

Sibelius First とチュートリアルはアメリカ英語を用います。しかし、その他各国のユーザーのために、アメリカ英語以外の表現を（ ）内に示すこともあります。

アメリカ英語とイギリス英語の表現の違いは、日本語の翻訳には反映されません。また、アメリカ英語とイギリス英語のつづりの違いも、日本語の翻訳には反映されません。

ご意見

弊社は、常にチュートリアルと『リファレンスガイド』の改善に努めています。弊社の説明書に対するご感想、ご指摘、ご意見がございましたら、**docs@sibelius.com** まで電子メールをお送りください。

Sibelius First プログラムへのご意見もお待ちしております。Sibelius ウェブサイトのチャットページへご掲示いただくか、テクニカルヘルプまでご連絡ください。

プロジェクトについて

このセクションには3つのプロジェクトがあり、約6時間で一通り理解することができます。ぜひこれらのプロジェクトに取り組んでください。これらのプロジェクトでは、Sibelius First で毎日使うことになる主な機能のすべてを説明しているからです。

プロジェクト1（2時間）

このプロジェクトでは、スコアを開く方法について説明しています。また、［ナビゲーター］パネルとキーボードショートカットおよびマウスショートカットの組み合わせ、選択、コピー&ペーストを使った操作方法についても説明しています。英国のバラード「Scarborough Fair」のアレンジを使って、マウス、コンピューターキーボード、MIDIキーボードで音符を入力または編集する方法、および、歌詞を入力する方法について説明しています。再生方法、テキストと強弱記号をスコアに記入する方法についても説明しています。

プロジェクト2（2時間）

このプロジェクトでは、PhotoScore Liteを使って4つの楽器パートをスキャンし、これらを新規スコアへコピー&ペーストしてエルガーの「弦楽四重奏曲ホ短調、作品83」の抜粋を作成する方法が学べます。音部記号と調号の変更、連音符などのより高度な音符入力、アーティキュレーション、ライン、タイ、スラー、テキストなどのスコアに記入されるさまざまなオブジェクトについても説明しています。ダイナミックパートとSibelius Firstからのグラフィックのエクスポートについても説明しています。

プロジェクト3（2時間）

このプロジェクトでは、キーボード、ギター、ドラム用の記譜の基本について説明しています。また、コード記号とリピート（1番括弧、2番括弧、D.S. al Codaなど）の作成方法についても説明しています。［ミキサー］パネルを使って再生を調整する方法、Sibelius Firstの［アイデア］パネルを使って楽譜の一部分を保存し再利用する方法についても説明しています。

1 プロジェクト1

1.1 スコアを開く

このプロジェクトの最初のセクションでは、Sibelius First でスコアを開いて操作する方法について説明します。また、これ以降のセクションで作成するアレンジのコピーを印刷する方法についても説明します。

ファイルを開く

Sibelius First には、プログラムのさまざまな機能を示すサンプルスコアが多数含まれています。これらのサンプルスコアのオリジナルファイルは、Sibelius のインストール DVD-ROM にも収録されていますので、自由に変更してかまいません。それではスコアを開いてみましょう。

Sibelius First を起動したときに最初に表示されるのが **[クイックスタート]** ダイアログです。このダイアログには、MIDI ファイルのインポート、印刷楽譜のスキャン、空のスコアの作成、スコアスターターのテンプレートの使用など、新規スコアの作成を素早く開始するための様々なオプションが表示されます。

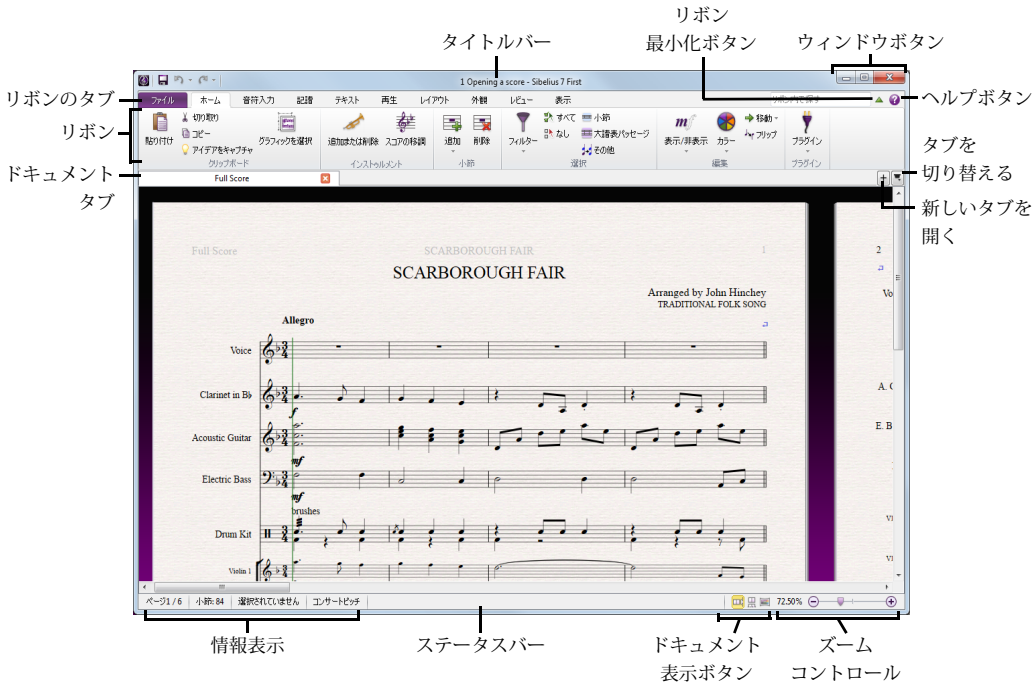
[クイックスタート] ダイアログの **[最近使用]** タブを選択して **[スコア 1 を開く]** をクリックし、**[開く]** をクリックします。

または、以前の様に **[ファイル]** ▸ **[開く]**（ショートカット **Ctrl** ＋ **O** または **⌘O**）を選択してファイルを開きます。**[開く]** ダイアログが表示されます。

Windows の場合、**[スコア]** というフォルダが表示されます。このフォルダ内に **[Sibelius First サンプルスコア]** へのショートカットが含まれています。これをダブルクリックし、**[プロジェクトファイル]** フォルダを開き、**[プロジェクト 1]** というフォルダをダブルクリックし、**[スコア 1 を開く]** というスコアを選択して **[開く]** をクリックします。これは、「スカボロー・フェア（Scaborough Fair）」という伝統的バラッドのアレンジです。

また、Sibelius First が起動していない状態でも、パソコン内にあるスコアファイルを直接ダブルクリックしてファイルを開くことができます（その場合、Sibelius First が自動的に起動します）。Sibelius のスコアファイルのアイコンは、右図のように表示されます。

［Scarborough Fair］スコアを開くと、楽譜が表示され、次のような画面が表示されます。



リボンの導入

リボンはSibelius Firstのウィンドウの一番上に表示されるコマンドボタンの帯で、プログラムのすべての機能がタスク別に分けられています。

リボンは10のタブに分かれています。**［ファイル］**タブは他のタブとは異なり、異なるフォーマットのファイルのインポートとエクスポート、印刷、特別な学習機能へのアクセス、詳しいヘルプの表示が行えます。これらについては『リファレンスガイド』の🕮 **1.［ファイル］タブ**全体を通して説明しています。

他のタブは、スコアを作成するときに一般的にタスクを実行する順に従って並んでおり、プロジェクトの開始から終了へ向かってリボンのタブを左から右へ進むことになります。

後の9のタブには以下の種類のコマンドが含まれており、それぞれのグループに分かれています。

- **ホーム**：楽器（譜表）と小節の追加や削除などの基本的なスコアの設定、およびクリップボード操作とSibelius Firstのパワフルなフィルターを含む主な編集操作（『リファレンスガイド』の🕮 **2.［ホーム］タブ**参照）。
- **音符入力**：アルファベット入力、ステップ入力、フレキシタイム入力に関するコマンド、および声部の切り替え、エクスプロード/リダクションなどの作曲ツール、逆行/反行などの変換等を含む音符の編集操作（『リファレンスガイド』の🕮 **3.［音符入力］タブ**参照）。
- **記譜**：音部記号、調号、拍子記号、特別な小節線、ライン、シンボル、符頭タイプなど音符ではない基本的な記号のすべて。『リファレンスガイド』の🕮 **4.［記譜］タブ**参照。
- **テキスト**：フォントのスタイルとサイズのコントロール、テイストスタイルの選択、および歌詞、コード記号、リハーサルマーク、小節番号とページ番号のオプション（『リファレンスガイド』の🕮 **5.［テキスト］タブ**参照）。

- **再生**：再生設定の選択、トランスポートコントロール、ライブテンポ、ライブプレイバック、再生中にSibelius Firstがスコアの記号をどの様に解釈するかのオプション（『リファレンスガイド』の 🕮 **6.【再生】タブ**参照）。
- **レイアウト**：ページと譜表のサイズ、譜表の間隔、譜表の非表示、🕮 **7.【レイアウト】タブ**マグネティックレイアウトのオプションなどのドキュメント設定オプション、およびフォーマットのコントロール（『リファレンスガイド』の参照）。
- **外観**：音符の間隔と楽器名、およびスコアのオブジェクトのデザイン、位置、その他のプロパティをリセットするコマンドなど、スコアの視覚的外観に作用するオプション（『リファレンスガイド』の 🕮 **8.【外観】タブ**参照）。
- **レビュー**：貼り付くノートコメントの追加とレビュー、スコア内の複数のバージョンの管理（『リファレンスガイド』の 🕮 **10.【レビュー】タブ**参照）。
- **表示**：「非表示」（印刷されないがスコアの設定に関する情報を提供するために役立つ記号）の外観の関する設定の変更、高度な操作のためのパネルの表示と非表示、開いているドキュメントの配置や切り替え（『リファレンスガイド』の 🕮 **11.【表示】タブ**参照）。

リボンについて詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **リボンの操作**をご参照ください。ここではスコア内の移動方法を学びましょう。

スコア内の移動

スコア内を移動する方法にはいくつかありますが、最も簡単な方法は、マウスを使って画面上の用紙をドラッグすることです。用紙の空の部分をクリックしてドラッグします。その際、左下隅にある灰色の四角形内の表示も同時に移動します。この四角形は「ナビゲーター」と呼ばれ、複数のページが縮小されて表示されます。ナビゲーター内の白いボックスの部分には、現在画面に表示されているスコア部分が表示されます。

［ナビゲーター］が表示されていない場合は、**［ウィンドウ］▸［パネル］▸［ナビゲーター］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Alt**＋**N**または**⌥⌘N**）を選択してオンにします（以下の**パネルの表示と非表示**参照）。

ナビゲーターをクリックすると、クリックした部分にスコア表示が移動します。

あるいは、白いボックスをクリックしてドラッグすると、ウィンドウがスムーズにスコア内を移動します。この動作は、まるでビデオカメラを使ってスコアを写しているような感覚を与えます。

数ページにわたる長いスコアの場合、ナビゲーターの白いボックスをナビゲーターの左方向や右方向にドラッグすると、スコア表示が左方向や右方向に移動していきます。速くドラッグすればスコアも速く移動します。こうして、ページを順に移動することができます。

ナビゲーターを使ってスコア内を移動すると、青色いデスクの上に各スコアのページが横並びに置かれているのがわかります。長いスコアでは、ページはスコアを広げた見開きの形になっているので、ページがどこで切り替わるかが分かります。スコアのページのレイアウトを変更し、縦方向または横方向に、および、単一ページまたは見開きに表示させることができます（『リファレンスガイド』の 🕮 **11.【表示】タブ**を参照）。

白いボックスは、ナビゲーターの上端または下端、あるいは、最初のページの左端または最後のページの右端を越えてドラッグすることはできません。しかし、用紙の端をクリックして、画面端を超えてスコアをドラッグすることができます。この操作を行った場合は、ナビゲーターをクリックして、スコアをもう一度表示します。

画面のスコアの動きが遅いときには、フルスコアとパート譜の紙質や模様を無地に変えてみてください。Sibelius Firstの表示の変更に関するヒントについては、『リファレンスガイド』の🕮 **1.20表示設定**をご参照ください。

ホイールボタン付のマウスをお持ちの場合、ホイールを使ってスコアをスクロールすることもできます。

- ホイールを上下にスクロールすると、ページを上下に移動できます。一度に画面全体を左右へ移動するには、**Alt**または⌥キーを押しながら操作します。
- **Shift**キーを押しながらマウスのホイールを上へ動かすとページが左に、下に動かすと右に移動します。また、一度に画面全体を左右へ移動するには**Alt**または⌥を同時に押しながら左右へ動かします。
- 画面を拡大/縮小するには、**Ctrl**または⌘キーを押しながらホイールを操作します。下の**ズーム**を参照してください。

キーボードショートカットを使用してスコア内を移動することもできます。Sibelius Firstにはたくさんのキーボードショットカットが用意されていますので、マウスを使用するよりもキーを押す方が便利です。最も一般的な操作に使用されるショートカットだけでも覚えておくとよいでしょう。これらは『リファレンスガイド』の🕮**キーボードショートカット**に記載されています。

スコア内の移動に使用する次のショートカットを試してみましょう。

- **Page Up**（Macでは⇞）と**Page Down**（Macでは⇟）は、画面全体を上または下に移動します。
- **Home**（Macでは↖）と**End**（Macでは↘）は、画面全体（ページ幅全体が表示されている場合はページ全体）を左または右に移動します。
- **Ctrl**＋**Home**または⌘↖で最初のページに、**Ctrl**＋**End**または⌘↘で最後のページに移動します。（一部のMacキーボードには↘（**End**）キーがありません。この場合、代わりに⇧↖で右に移動し、⇧⌘↖で最後のページに移動できます。）

Sibelius Firstでは、**Ctrl**または⌘キーを別のキーと使用する場合、通常「操作を大きなステップで実行」することを意味しています。つまり、**Ctrl**または⌘を押さないで別のキーを押すと、通常の操作が実行できます。**Ctrl**または⌘キーを押したまま別のキーを押すと、大きなステップで操作が実行できます。Sibelius Firstでは、さまざまな操作（テキストなどのオブジェクトの移動や音符間隔の増減など）を大きなステップで実行する場合に**Ctrl**または⌘キーが使用されます。

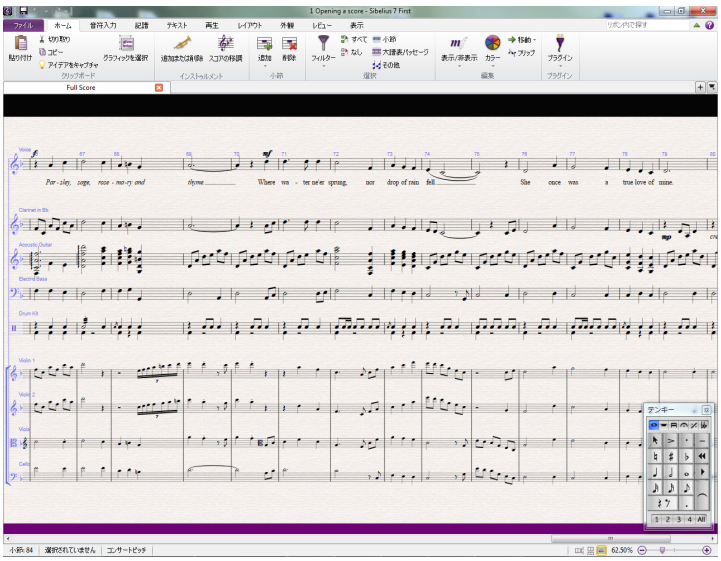
Sibelius Firstで使用されるキーで最も重要となるのは、**Esc**キーです。**Esc**キーを押すと、現在選択されている対象の選択が解除されます。誤って音符（またはスコア内のその他のオブジェクト）をクリックして選択してしまった場合、**Esc**キーを押して選択を解除することができます。Sibelius Firstの操作をキャンセルまたは停止したい場合、**Esc**キーを押します。

パノラマ

Sibelius Firstには、スコアの操作をより簡単にするさまざまなツールが内蔵されています。スコアを使って作業を行う際、より作業しやすい状態で表示するには、パノラマを使用します。

パノラマへ切り替えるには、**[表示]**▸**[ドキュメント表示]**▸**[パノラマ]**（ショートカットは**Shift-P**）を選択するか、ウィンドウの下のステータスバーの**[パノラマ]**ボタンをクリックします。ボタンは右に表示されます。

スコアが無限長の単一の大譜表として表示されます。



パノラマを使用すると、スコアは左から右にのみスクロールするため、Sibelius First 内でページを上下に移動することなく楽譜入力ができます。これまでに説明した操作方法は、標準の表示でもパノラマ表示でも同じように動作します。ただし、ナビゲーターはパノラマでは表示されません（パノラマではスコアがページ単位で表示されないため）。

このような表示方法は、他社のプログラムでは「スクロールビュー」や「ギャラリービュー」と呼ばれることもあります。パノラマを再びオフにするには、**［表示］▸［ドキュメント表示］▸［パノラマ］**を選択するか、ステータスバーのボタンをもう一度クリックします。パノラマ表示の左マージンに重ねて表示される青色のマジックマージンには、各譜表の音部記号、調号、楽器名が常に表示されます。

詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **11.1 ドキュメント表示**をご参照ください。

ズーム

スコアの拡大率を調整する方法はいくつかありますが、最も簡単な方法は、キーボードショートカットを使用することです。**Ctrl** ＋ **+** または **⌘+** キーで拡大し、**Ctrl** ＋ **–** または **⌘–** キーで縮小します。音符やオブジェクトが選択されている場合は、それに対して Sibelius First がズームインします。［Scarborough Fair］スコアのボーカル譜表の最初の音符をクリックし、拡大表示してみましょう。ステータスバーに表示されるズーム率が操作に合わせて変化します。特定のズーム率のプリセットは、**［表示］▸［ズーム］▸［ズーム］**ボタンのメニューまたは**［表示］▸［ズーム］**グループの他のボタンを使って選択できます。

ホイールボタン付のマウスをお持ちの場合、**Ctrl** または **⌘** を押しながらホイールを上下させることで、スムーズに拡大 / 縮小が行えます。

画面に 1 ページ全体が表示されるように縮小してみてください。次に、拡大率を 100% に戻してみましょう。これが Sibelius First の作業で一番使いやすい大きさです。

パネルの表示と非表示

画面が乱雑になってきた場合は、**[表示]**▸**[パネル]**のチェックボックスを使って、すでに説明した［ナビゲーター］などのSibelius Firstのパネルを非表示にできます。

画面の右下のテンキーは、音符、臨時記号、アーティキュレーション、タイ、その他の記号の入力に欠かせないツールで、**[表示]**▸**[パネル]**▸**[テンキー]**をオンまたはオフにすることによって表示と非表示を切り替えられます。

また**[表示]**▸**[パネル]**▸**[すべて非表示]**を選択すると、Sibelius Firstのすべてのパネルを非表示にできます。ボタンをもう一度クリックすると、開いていたウィンドウが表示されます。

バージョン

音楽を作成する際、同一のスコアの異なるバージョンを保存しておくと非常に便利です。特に、実験的な試みを行う場合や、ある作品のアレンジを作成したい場合などに役立ちます。Sibelius Firstでは、同一のファイル内に異なるバージョンすべてを保存することができますので、スコアのバージョンをさかのぼる（または先へと進む）ことができます。

リボンの下のドキュメントタブを参照すると、現在表示されているバージョンを確認（またはファイル内の別のバージョンを表示）できます。これらは、単一のウィンドウ内に同じドキュメントの複数の異なるビューを開くことを可能にします。

ドキュメントタブバーの右側の**[+]**ボタン（右図）を使うと、新しいタブを開くことができます。これは、各バージョンを含む現在のスコアのすべてのビューを示すメニューを開きます。このメニューはドキュメントタブバーの任意の場所を右クリック（Macでは**Ctrl**-クリック）して開くこともできます。

[現在のバージョン]を除くすべてのバージョンは編集不可となっており、スコアに変更を加えることはできませんが、再生、印刷、音符その他のオブジェクトの選択、スコアからの楽譜のコピーは可能です。別のバージョンを見るには、そのバージョンをメニューから選択して新しいドキュメントタブに開きます。

スコアの印刷

このプロジェクトを完了するには、［Scarborough Fair］の完成アレンジのプリントアウトが必要となりますので、1部印刷しましょう。**[ファイル]**▸**[印刷]**（ショートカットは**Ctrl**＋**P**または**⌘P**）を選択して**[印刷]**パネルとプレビューを見ます。すべてのオプションについて心配する必要はありません。単に**[印刷]**をクリックしてスコアを印刷してください。

しばらくすると、高画質の［Scarborough Fair］スコアが印刷されます。このプリントアウトは、以降の音符入力で使用しますので、そのままお手元に置いておいてください。

問題が発生した場合には、『リファレンスガイド』の🕮 **1.9 印刷**をご参照ください。

このプロジェクトの次のセクションでは、**[プロジェクト1]**スコアを編集する必要があります。**[ファイル]**▸**[開く]**をもう一度選択してください。**[プロジェクト1]**フォルダから、**[2 音符の編集と入力]**を選択し、**[開く]**をクリックします。［Scarborough Fair］の不完全なアレンジが表示されます。

1.2 音符の入力と編集

プロジェクトのこのセクションを完了するためには、**[2 音符の入力と編集]** スコアを開いておく必要があります（前項参照）。まだ開いていない場合は、**[ファイル]** ▸ **[開く]** を選択し、**[プロジェクト1]** フォルダにある上記のスコアを選択して **[開く]** をクリックしてください。

Sibelius First で行う操作のほとんどは、音符の入力と編集に関連しています。Sibelius First では、印刷された楽譜をスキャンしたり、MIDI キーボードやギターを演奏したり、マウスを使って音符を配置したり、他のプログラムで作成したファイルを開いたりと、さまざまな方法で記譜することができますが、最も簡単な方法は、コンピューターのキーボードを使ってタイプ入力し、適宜編集していくことです。

Esc キーの使用

スコアに音符を入力し編集する方法を説明する前に、**Esc** キーについてもう一度説明しておきましょう。Sibelius First で楽譜の入力と編集を行うときに最も重要となるのが **Esc** キーです。次のような状況で使用することができます。

- マウスを使って音符を追加した場合、これ以降音符を追加しない場合は Esc キーを押します。
- コンピューターキーボードを使って音符を入力した場合、これ以降音符を追加せず、最後に入力した音符が選択された状態にする場合には **Esc** キーを押します。
- テキストを編集した場合、これ以降テキストを入力または削除せず、オブジェクトが選択された状態にするには **Esc** キーを押します。
- 何かが選択されている場合、その選択を解除するには **Esc** キーを押します。
- Sibelius First がスコアを再生している場合、再生を停止するには **Esc** キーを押します。

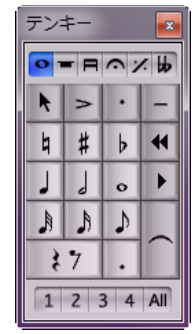
テンキーレイアウトの左上のボタン（マウスポインタの画が描かれたもの）をクリックすることもできます（下の**テンキー**を参照）。

音符間の移動

Sibelius First では、音符をクリックして選択することができます（選択すると青色に変化し、編集や変更が行えるようになります）。音符間を移動する最も簡単なのは、コンピューターキーボードを使用する方法です。← と → キーを使用して、ある音符または休符から別の音符または休符へと前後に移動することができます。ある小節内の最初の音符または休符へ移動するには、**Ctrl** ＋ ← または Ctrl + → を押します。もうお気づきでしょうか。これもまた、「操作を大きなステップで実行」する一例です。

Tab キー（コンピューターキーボードの **Caps Lock** キーの上）を使用して、ある特定の譜表に添付されているオブジェクトを順に移動することもできます。**Tab** キーを押すと、ページの最初のオブジェクトが選択されますので、マウスを使用する必要はありません。[Scarborough Fair] スコアで試してみましょう。（**Esc** キーを押して）何も選択されていないことを確認してから、**Tab** キーを押します。ボーカル譜表の最初の音符が青色に変わります。**Tab** を続けて押すと、音符、休符、強弱記号、歌詞などを順に移動していきます。同じ要領で逆方向に進むには、**Shift** ＋ **Tab** キーを押します。

テンキー



画面右下のテンキーウィンドウでは、作成または編集する音符の音価、 臨時記号、アーティキュレーション、タイ、その他の記号を選択することができます。（アーティキュレーションとは、音符の上または下に付加される、スタッカート、テヌート、アクセントなどの記号をいいます。音価とは、音符の長さのことです。これらの用語を含む専門用語については、『リファレンスガイド』の**用語集**で説明しています。）

コンピューターキーボードの右端にあるテンキーは、テンキーウィンドウに対応しています。これらのキーを使用すれば、マウスクリックと同じ操作が素早く簡単に行えます。ノートブック型（ラップトップ）コンピューターをご使用の場合、下記の**ノートブック（ラップトップ）のショートカット**を参照してください。

「テンキー」と書かれたバーの下に配置された6つの小さなタブでは、6つの異なる音楽記号のレイアウトを選択することができます。レイアウトは、それぞれ第1レイアウト、第2レイアウトなどと呼ばれます。レイアウトを変更するには、マウスでタブをクリックするか、**F7**–**F12**を押すか、▸ボタン（ショートカットは**+**）をクリックしてレイアウトを順に選択します。◂◂ボタン（ショートカットは**F7**（Windows）またはテンキーの-（Mac））をクリックすると第1レイアウトに戻ります。

他のレイアウトがどのようなものか確認してみましょう。見慣れない記号も含まれています。使用頻度が最も高いのは第1レイアウトです。

テンキーの一番下の数字の列は、入力または編集する音符の「声部」を設定します。こうして、1つの譜表に複数のリズムを加えることができます。これについては、後で説明します。

Sibelius Firstではテンキーが特別な機能に対して使用されるため、Sibelius Firstの使用中は他のプログラムの様に**Num Lock**機能をオフにしてテンキーを矢印キーとして使用することはできません。

テンキーの各レイアウトの左上隅のボタン（左図）は、**Esc**キーの代用として使用できます。

ノートブック（ラップトップ）のショートカット

それでは、テンキーが付いていないノートブック型（ラップトップ）コンピューターをご使用の場合、どのように音符を入力するのでしょうか。マウスを使って音符をひとつひとつ入力する必要も、入力中に誰かに**Fn**キーを押してもらう必要もありません。

Sibelius Firstには、代用できるシングルキーショートカットが用意されています。シングルキーショートカットを使用すれば、同じように素早く簡単に音符が入力できます。これらを使用するには、**[ファイル]**▸**[環境設定]**（ショートカットは**Ctrl**＋または⌘）を選択し、**[一般]**ページを選択します。**[メニューとショートカット]**グループの**[現在の機能セット]**ドロップダウンメニューから**[ノートブック（ラップトップ）のショートカット]**を選択し、**[OK]**をクリックしてください。

テンキーの数字を使用する代わりに、テンキーと同じ数字に対応するメインキーボード上の数字キーを使うことができます。この機能セットを使用しているときは、**Shift-1**～**Shift-9**を使って音符の上に音程を入力できます。

別売のテンキーを購入してUSB経由でコンピューターへ接続すればSibelius Firstの標準ショートカットが使用できます。

作業内容の保存

音符の入力と編集の方法について詳しく説明する前に、まずはスコアを保存しましょう。作業内容は、定期的に保存するようにしましょう。また、CD-RやUSBフラッシュメモリスティック（「ペンドライブ」とも呼ばれる）などのリムーバブルメディアにバックアップを保存するよう心がけましょう。

スコアを初めて保存する場合は、**[ファイル]**▸**[保存]**（ショートカットは**Ctrl**＋**S**または**⌘S**）を選択して、適切な保存場所（**[スコア]** フォルダなど）を選択し、スコアに名前を付けて**[保存]**をクリックします。Windowsでは、**[スコア]** フォルダは**[マイドキュメント]** フォルダの中にあります。Macでは、**[スコア]** フォルダはログオンしているユーザーアカウントの**[書類]** フォルダにあります。

しかし、ここではすでに名前の付いた既存のスコアを使って作業をしていますので、**[ファイル]**▸**[名前を付けて保存]**（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**S**または**⇧⌘S**）を選択し、新しい名前を付けてスコアを保存します。**[Scarborough]** などの名前を付けて、デスクトップに保存しましょう。

Sibelius Firstは、数分ごとにスコアのコピーを特殊なフォルダに自動保存します。停電やクラッシュが生じた場合でも、次回のSibelius First起動時に失われた作業内容を復元することができます。

スコアのバージョンはいつでも保存できます。保存したバージョンは、下書き、アレンジの確認、大きな変更を行う前の念のための保存、作業の進行状況を示すログのエクスポートなどに使用できます。**[レビュー]**▸**[バージョン]**▸**[新しいバージョン]**を選択します。

また、**[ファイル]**▸**[保存]** でスコアを保存するたびに番号が振られたバックアップが作成され、**[スコアのバックアップ]** フォルダ（**[スコア]** フォルダ内）に保存されます。たとえば、スコアを誤って削除してしまった場合や、スコアに大幅な変更を行ったがそれが気に入らない場合、**[スコアのバックアップ]** フォルダから最近のバージョンを取り出すことができます。

これらの便利な機能について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **10.3 バージョン**と🕮 **1.1 ファイルの操作**を参照してください。

テンキーを使用した音符の編集

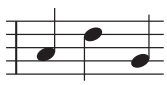
テンキーのすべてのキーでは、現在選択されている音符をすぐさま変更することができます。音符の長さを変更したり、音符に臨時記号を追加するには、音符をクリックして選択してから、対応するテンキーのボタンを選択します。テンキーと矢印キーの使用方法を学べば、マウスでボタンをクリックするよりもずっと素早く簡単に操作することができます。

それでは試してみましょう。

- ［Scarborough Fair］スコアで、小節11のボーカルパートの2番目の音符（Bナチュラルの4分音符）を選択します。
- **3**（テンキー）を押し、これを8分音符に変更しましょう。小節の長さが変更前と同じになるよう、8分音符の後に8分休符がSibelius Firstによって自動追加されます。
- 4分音符の長さに戻し、**9**（テンキー）を押してナチュラル ♮ をフラットに変更しましょう。もう一度**9**を押すと、Sibelius Firstにより余分な臨時記号が削除されますが、音符は♭で再生されます（調号に♭があるため）。確認するには、**Esc**キーを押して音符の選択を解除してから、もう一度音符をクリックして選択します。すると、♭が再生されます。もう一度**7**キーを押し、音符をナチュラルに戻しましょう。

以上の操作が正しく動作しない場合は、テンキーウィンドウのレイアウトが第1レイアウトになっていないことが考えられます。第1レイアウトを選択して（または**F7**キーを押して）から、もう一度試してみてください。

キーボードの矢印キーを使って、選択されている音符の音高を変更することもできます。Bナチュラルが選択されている状態で、↓を押してみましょう。音高がDに変わるまで押し続けます。**Ctrl**＋↑/↓または⌘↑/↓を押すと、選択されている音符の音高がオクターブ単位で移動します。**Ctrl**＋↑または⌘↑を押して、Dを1オクターブ上に移動してみましょう。

最後にはこのようになります。

他の楽譜作成プログラムからSbelius Firstへ移行した方は、**5**が4分音符に相当する、音価に対するテンキーショートカットの配置に慣れているかもしれません。お好みに合わせてSibelius Firstのキーボードのレイアウトをこの配置に変更することもできます。また通常とは逆に音価の前に音高を指定して音符を入力することもできます。その方法については、このプロジェクトの後半で説明します。32ページの**音価の前に音高を指定する**をご参照ください。

元に戻す / 繰り返し

誤って入力した場合や、入力結果に不満がある場合、元に戻ってスコアを手動で修正する必要はありません。たとえば、Dの4分音符を選択し、テンキーの**5**を押して2分音符へと変更します。小節内の次の音符が上書きされます。Windowsではクイックアクセスツールバーの左矢印ボタン（右図）をクリックし、Macでは**［編集］▸［元に戻す］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Z**または⌘**Z**）を選択します。こうして、最後に行った操作を元に戻すことができ、削除した音符を再表示させることができます。Sibelius Firstでは、複数回にわたって元に戻す作業が行えます。**Ctrl**＋**Z**または⌘**Z**を繰り返し押して、編集を始める前の状態にスコアを戻してみましょう。音符が再びBナチュラルになるまで戻します。

Windowsではクイックアクセスツールバーの右矢印ボタンをクリックし、Macでは**［編集］▸［繰り返し］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Y**または⌘**Y**）を選択します。

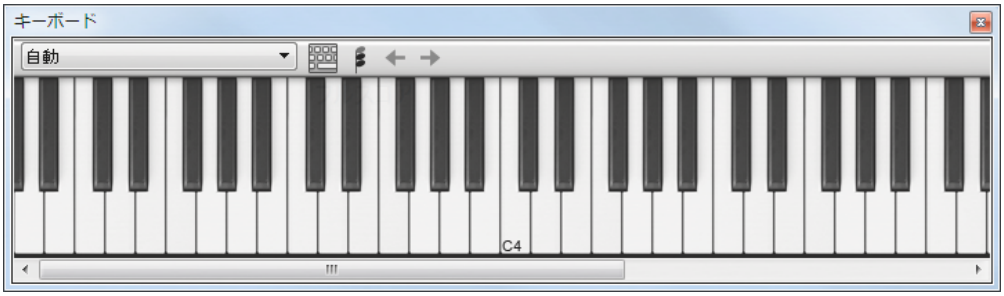
Sibelius Firstには、最近行った操作を一覧表示する「元に戻すの履歴」があり、いくつかの前の操作まで一気に戻ることができます。詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮**元に戻す / 繰り返し**を参照してください。

この機能は、Sibelius Firstで実行した操作のみに適用されます。コンピューターキーボードにコーヒーをこぼしてしまった場合には、この機能は役に立ちません。

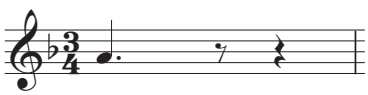
マウス入力とキーボードパネル

Sibelius Firstでのマウスを使った音符の入力は簡単ですが、かなり時間がかかります。先ほど説明したショートカットを使用すると、作業時間を短縮することができます。

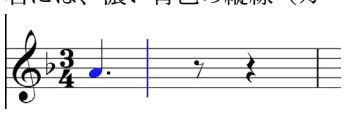
音符の入力を始める前に**［表示］▸［パネル］▸［キーボード］**を選択して［キーボード］パネルを開きます。これは画面上に表示される仮想ピアノキーボードで、7オクターブにわたって3つの異なるサイズで表示されます。再生される音を聞くには、マウスで鍵盤をクリックします。



クラリネット譜表の先頭から、ボーカル旋律を引き立たせる対旋律の部分を入力していきます。まず、テンキーで最初の音を選択します。**Esc**キーを押し（またはテンキーの左上のボタンをクリックし）、スコア内で何も選択されていないことを確認します。**4**（テンキー）を押し、4分音符を選択します。マウスポインタが紺青色に変化し、音符を入力できる状態であることを示します。**[.]**（テンキー）を押し、4分音符に付点を追加します。マウスポインタをスコア上に移動すると音符がグレーの影になり、クリックした場所に付点4分音符が入力されます。五線の上下に移動すると、それに応じて加線が現れるので、高音と低音を正確に入力することができます。

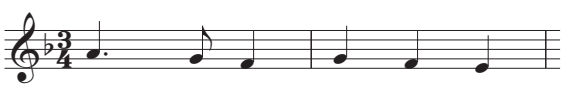
次に、クラリネット譜表の先頭近くでAの位置にマウスポイントを置いてクリックします。

間違った場所をクリックしてしまった場合には、↑または↓キーを使用して、入力後に音高を調整できます。

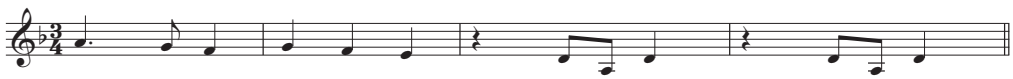
入力した音符は濃い青色で表示され、この音符が選択されていることを示しています。音符の右には、濃い青色の縦線（カーソル）が表示されます。



カーソルは、続けて音符を入力する準備ができていることを意味しています。このカーソルは、ワープロソフトなどで見かけるカーソルと同じものと考えると分かりやすいでしょう。カーソルは、後で説明するアルファベット入力に特に便利です。カーソルについて、詳しくはそこで説明します。

テンキーの**3**を押して8分音符を選択し、第2線をマウスでクリックしてGを追加（8分休符を上書き）してから、**4**を押して4分音符をもう一度選択し、第1間をクリックしてFを追加（4分休符を上書き）します。

テンキーウィンドウでは4分音符が選択された状態になっているので、マウスをクリックすることで、さらに音符を追加できます。4分音符ボタンを再び選択する必要はありません。次の小節に4分音符を3つ追加しましょう。マウスポインタをクリックして、G、F、Eを追加します。

次の小節は4分休符から始まりますので、テンキーの**0**を押し、休符を作成します（4分音符がまだ選択された状態である必要があります）。

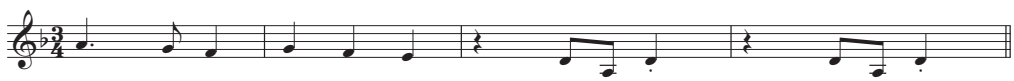
［キーボード］パネルを使って、対旋律の入力を続けましょう。鍵盤とテンキーをクリックして音価を変更します。**3**を押して8分音符を選択し、［キーボード］パネルを使ってその下に旋律を入力します。4分音符を追加する必要がある場合は、［キーボード］パネルの鍵盤をクリックする（またはスコア内をクリックする）前にテンキーの4を押して音符を追加します。最後にはこのようになります。

コンピューターキーボードを使用してキーボードウィンドウを「演奏」することもできます（『リファレンスガイド』の🕮 **3.5 キーボードウィンドウ**を参照）。

テンキーを使用したアーティキュレーションとタイの追加

演奏者のためのアーティキュレーションを追加して対旋律を完成させましょう。Sibelius Firstはスコアを再生するときもこれらのアーティキュレーションに従います。

選択されている音符の長さや臨時記号を変更する方法と同じく、テンキーボタンを使えば、アーティキュレーションやタイを簡単に追加または削除することができます。いずれかの音符をクリックしてからテンキーボタンを選択すると、音符にオブジェクトが追加され、同じキーをもう一度押すと削除されます。

それでは試してみましょう。

- クラリネット譜表の小節3のDの4分音符を選択します。
- テンキーの一番上の列のボタンの［.］（スタッカートの点）に対応するキーを押します。音符にスタッカートが追加されます。
- 次の小節のDの4分音符にもこれを繰り返します。

次の大譜表の先頭へと移動し、タイを追加しましょう。

- クラリネット譜表の小節9のAの2分音符を選択します。
- **Enter**（テンキー）を押し、タイを音符の後に追加します。
- 矢印キーとテンキーを使って、アーティキュレーションとタイをクラリネットの対旋律の残りの部分に追加しましょう。

1.3 楽譜の選択とコピー

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［3楽譜の選択とコピー］**（**［プロジェクト1］**フォルダ内）を開いてください。

既存の音符を編集する方法と、キーボードショートカットを使ってより素早く編集を行う方法にについてはすでに説明しましたが、ここでは、パッセージを選択して音符やその他のオブジェクトをまとめて操作、コピー、削除する方法について説明します。

選択とパッセージ

スコア内のオブジェクトを選択すると、オブジェクトがカラー表示され、マウスとキーボードでそれらのオブジェクトに対して作業ができることを示します。Sibelius First のスコアの変更するための操作のほとんどは、対象を選択して実行します。

選択には次の 3 種類があります。

- 単一選択：1つのオブジェクトだけを選択。
- 複数選択：いくつかの個別のオブジェクトを選択。
- パッセージの選択：連続したフレーズの一部分を選択。選択したパッセージは、青色のボックス（譜表パッセージの場合）または紫色のボックス（大譜表パッセージの場合）で囲まれます。

この 3 種類の選択はすべて、ほぼ同じ操作で行えます。主な違いは、オブジェクトの選択方法です。

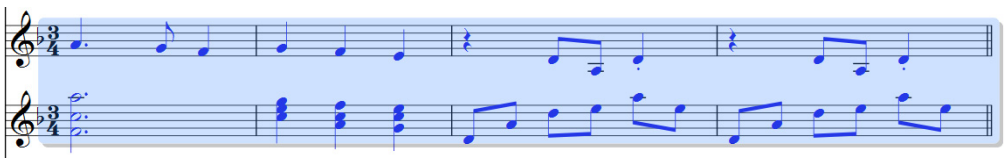
それぞれどのように選択するか、またどのように使用するか、［Scarborough Fair］スコアで見てみましょう。1つのオブジェクトを選択する方法は、音符を選択する方法と同じです。マウスでクリックするか、**Tab** キーを押して選択します。

複数のオブジェクトを選択するには、あるオブジェクトを選択してから、別の1つまたは複数のオブジェクトを**Ctrl**＋クリックまたは⌘- クリック（**Ctrl** または⌘キーを押したままマウスの左ボタンをクリック）し、これらのオブジェクトを選択に追加します。［Scarborough Fair］スコアのクラリネット譜表の最初の音符を選択して試してみましょう。次の音符を**Ctrl**＋クリックまたは⌘＋クリックします。テキストや他のオブジェクトもこの方法で選択できます。タイトルを**Ctrl**＋クリックまたは⌘＋クリックしてみましょう。この方法であるオブジェクトを誤って選択に加えてしまった場合、そのオブジェクトを**Ctrl**＋クリックまたは⌘＋クリックすれば削除できます。タイトルを選択から削除してみましょう。

複数選択では、特定のオブジェクトに編集を加えることができます。↑と↓キーを使って、選択されている音符を上下に移動してみましょう。複数選択は、音符、コード、休符ではない複数のオブジェクト（アーティキュレーションやテキスト）をまとめて選択する場合などに便利です。

パッセージを選択する方法について説明する前に、**Esc** キーを押し（またはテンキーの左上のボタンをクリックし）、現在選択されているオブジェクトの選択を解除しましょう。

パッセージとは、楽譜の連続的なまとまりのことで、数ページにまたがることもあります。1つの譜表または複数の譜表にまたがることもあります。パッセージの選択は、ある楽器のパート譜を別の楽器のパート譜へとコピーする場合にしばしば使用されます。パッセージでは、複数の音符をまとめて編集、コピー、削除することができます。

譜表パッセージを選択するには、まず、クラリネット譜表の最初の小節にある最初の音符をクリックします。アコースティックギター譜表の小節4の空の部分を**Shift**-クリックします。すると、選択されている範囲内を囲む青色いボックスが表示されます。

この譜表に添付されているオブジェクトは、すべてパッセージ範囲内で選択されています。こうすれば、この譜表に添付されているアーティキュレーション、強弱記号、テキスト、その他のオブジェクトすべてもコピーすることができるため、楽譜のコピーに非常に便利です。もう一度、↑と↓キーを使って、選択されている音符を上下に移動してみましょう。ナビゲーターにも、選択範囲が縮小表示されます。

特定の種類の譜表パッセージを素早く選択するには、さまざまな方法があります。

- 小節内の空白の部分をクリックすると、譜表上のその小節が選択されます（小節をコピーする場合など）。
- 小節内の空白の部分をダブルクリックすると、大譜表の長さ分だけその譜表が選択されます。
- 小節内の空白の部分をトリプルクリックすると、スコア全体にわたってその譜表が選択されます。
- クリック、ダブルクリック、トリプルクリックしてから別の譜表を**Shift**＋クリックすると、その間にある譜表がすべて選択に追加されます。また、**Ctrl**＋クリックまたは⌘＋クリックすると、譜表を個別に追加または削除できます。

大譜表パッセージを選択するには、ボーカル譜表の小節1の空白の部分を**Ctrl**＋クリックまたは⌘-クリックします。すべての譜表のこの小節を囲む紫色の二重線ボックスが表示されます。

- **Ctrl**または⌘を押したままクリック、ダブルクリック、トリプルクリックすると、それぞれ1小節分、その大譜表の長さ分、スコア全体にわたって大譜表パッセージを選択することができます。
- 一度にスコア全体を選択するには、**［ホーム］▸［選択］▸［すべて］**を選択します（ショートカットは**Ctrl**＋**A**または⌘**A**）。これは、スコア全体を移調する場合、スコア全体のフォーマットを変更する場合、スコア内である特定の種類のオブジェクトだけを選択する場合などに特に便利です。

選択について、詳しくは『リファレンスガイド』の🕮 **2.1 選択とパッセージ**を参照してください。

音符とその他のオブジェクトの削除

さまざまなオブジェクトを選択してから、**Delete**キーで削除してみましょう。

- テキスト（最初のページの一番上にある編曲者テキストなど）を削除してみましょう。
- 音符を削除してみましょう。拍数が保たれるよう、音符が休符に変化します。

休符を削除することもできます。削除すると休符は非表示となり、リズムが保たれます。休符を削除すると、灰色表示に変化し、休符が非表示であることが示されます。休符の選択を解除すると、全く表示されなくなります。通常、休符を非表示にすることは避けるべきですが、特殊な記譜の場合には非表示にした方が便利なこともあります。同じように、他のオブジェクトも非表示にすることができます。非表示オブジェクトは、**[表示]**▸**[非表示]**▸**[非表示オブジェクト]**（ショートカットは、**Ctrl**＋**Alt**＋**H**または⌥⌘**H**）をオンにすると、グレー表示で見ることができます。

Backspaceを使ってオブジェクトを削除することもできます。

[ホーム]▸**[クリップボード]**▸**[切り取り]**（ショートカットは**Ctrl**＋**X**または⌘**X**）は、**Delete**キーに似ていますが、オブジェクトを切り取ってクリップボードへと保存し、**[ホーム]**▸**[クリップボード]**▸**[貼り付け]**（ショートカットは**Ctrl**＋**V**または⌘**V**）で別の場所に貼り付けることができます。Sibelius Firstではあまり使用されることのない操作ですので、ここで試す必要はありません。

削除してしまったものを復元したい場合は、**[元に戻す]**や**[繰り返し]**が使えることを覚えておきましょう。

小節の削除

スコアから1つまたは複数の小節（空または記譜済み）を削除する方法について説明します。重要な操作ですので覚えておきましょう。Sibelius Firstでは、2種類の方法で小節を削除することができます。

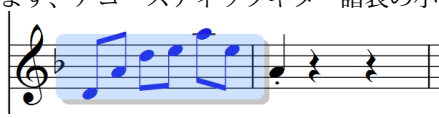
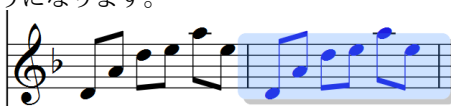
最も簡単な方法は、削除したい小節が含まれるようにパッセージを選択（上の**選択とパッセージ**参照）してから、**[ホーム]**▸**[小節]**▸**[削除]**（ショートカットは**Ctrl**＋**Backspace**または⌘**Backspace**）を選択する方法です。続けるかどうかを確認するメッセージが表示されます。**[はい]**をクリックします。次回以降、確認メッセージを表示させたくない場合は**[次回から表示しない]**チェックボックスをオンにします（いつでも**[元に戻す]**ことができます）。［次回から表示しない］を選択した警告メッセージを再び表示させるには、**[ファイル]**▸**[環境設定]**の**[その他]**ページの**[すべてのメッセージを表示]**をクリックします。

小節を削除するもうひとつの方法は、大譜表パッセージを選択してから**Delete**キーを押す方法です。

［Scarborough Fair］スコアの最後の3小節を削除してから、**[元に戻す]**をクリックするか、**[編集]**▸**[元に戻す]**を選択して小節を復元させてみましょう。

コピー

Sibelius First では、小節、譜表、その他さまざまなファイルを簡単にコピーすることができます。それでは試してみましょう。クラリネット譜表の小節5にあるスタッカートの4分音符をクリックしてから、アコースティックギター譜表の空の小節6を**Alt**＋クリックまたは⌥- クリックします。音符はそのままコピーされますが、コピー先の五線上のどの線または間にマウスポインタを合わせてクリックするかによって、音符の音高は変更されます。スタッカートもコピーされます。音符に追加されているアーティキュレーションはすべてこのようにコピーされます。

この操作は、楽譜の一部分を比較的大きめに選択してまとめてコピーするのに適しています。まず、アコースティックギター譜表の小節5を選択します。

先ほど小節6に置いた音符の前の空白部分を**Alt**＋クリックまたは⌥- クリックすると、次のようになります。

先ほど置いた音符が上書きされます。**Alt**＋クリックまたは⌥- クリックを使えば、単一選択、複数選択、パッセージ選択してスコア内の複数のオブジェクトをコピーすることができます。

Windows では、ご使用のマウスに3つ目（中央）のボタンまたはクリック可能なスクロールホイールがある場合、**Alt**＋クリックの代わりにこのボタンを使ってコピー＆ペーストすることができます。ご使用のマウスに2つしかボタンがない場合でも、右と左のマウスボタンを同時に押す複合クリックで、3つ目の中央ボタンをクリックするのと同じ操作が行えます。

Sibelius First では、**[音符入力]** ▸ **[音符入力]** ▸ **[リピート]**（ショートカットは**R**）を選択し、スコア内の音符またはその他のオブジェクトを複製してオリジナルのすぐ後に追加することができます。**Alt**＋クリックまたは⌥＋クリックを使って先ほど入力した低音の4小節を選択し、**R**を押すと、選択した小節のすぐ後に小節が追加されます。こうして、音符、和音、テキスト、パッセージ、その他のオブジェクトを後に追加していくことができます。

クリップボードを利用してコピー＆ペーストするには、**[ホーム]** ▸ **[クリップボード]** ▸ **[コピー]**（ショートカットは**Ctrl**＋**C**または⌘**C**）を選択してから、**[ホーム]** ▸ **[クリップボード]** ▸ **[貼り付け]**（ショートカットは**Ctrl**＋**V**または⌘**V**）を選択します。この方法は、異なるスコア間でのコピーに使用すると便利です（**Alt**＋クリックまたは⌥＋クリックでは、同じスコア内でしかコピーができません）。

[コピー] と **[貼り付け]** 機能は、どちらもコンテキストメニューで使用できます。コンテキストメニューは、1つまたは複数のオブジェクトが選択されているときに右クリック（Windows）または**Control**- クリック（Mac）すると表示されます。

ここまでで説明したさまざまなコピー方法を使って、先行する小節（1つまたは複数）をアコースティックギター譜表の空の小節へとコピーし、ギターのパート譜の足りない小節を完成させましょう。

1.4 フレキシタイム入力

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［4 フレキシタイム入力］**（**［プロジェクト1］**フォルダ内）を開いてください。

ここまでで、マウスを使って譜表をクリックしたり、キーボードウィンドウを使って行う音符入力について説明しました。他にも、より素早く音符を入力する方法があります。すべてを試してみて、一番自分に合った方法で入力するとよいでしょう。さまざまな入力方法を組み合わせて使用してもかまいません。このセクションでは、Sibelius First独自のリアルタイム音符入力システム「フレキシタイム」について説明します。

「リアルタイム」入力とは、演奏内容をコンピュータープログラムに取り込み、その音高とリズムをプログラムに読み取らせる入力方法です。理論上ではこのように機能します。しかし実際には、どのプログラムを使用しても、演奏したリズムを正確に認識することは非常に難しく、演奏後に音楽を分析したり、さまざまな機能を使用する必要があります。一般的に、メトロノームのクリック音に合わせてできるだけ正確に演奏し、演奏後に「クオンタイズ（タイミング修正）」してリズムを修正することが必要となります。

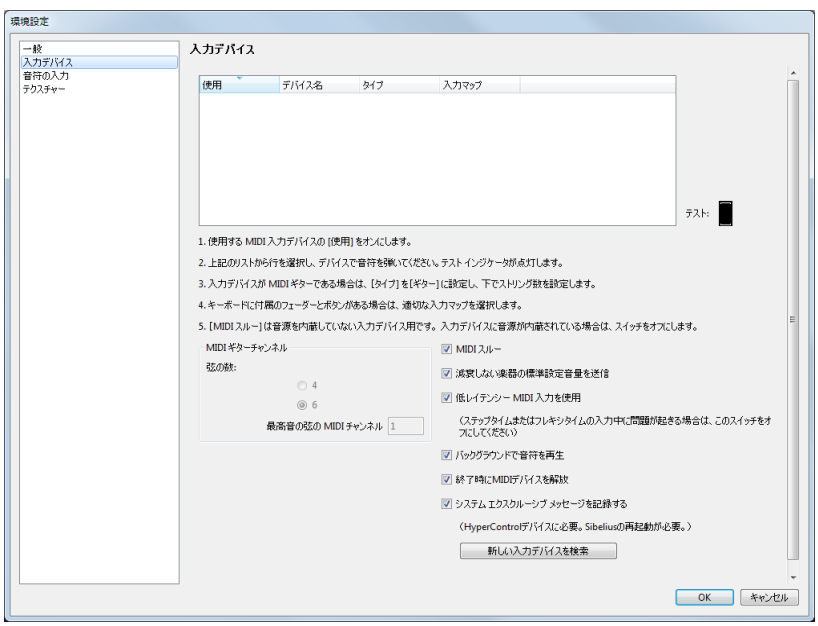
しかし、Sibelius Firstは独自のアプローチを採用しているため、比較的自由に演奏しても、優れた結果が得られます。

MIDIキーボードまたはMIDIギターをお持ちでない場合は、30ページの**1.5 アルファベット入力とステップ入力**に進んでください。

MIDIデバイスの使用

フレキシタイムを使用するには、ご使用のコンピューターに接続されているMIDIキーボードまたはMIDIギターが必要です。

ご使用のMIDIデバイスが正しくインストールされていれば、Sibelius Firstでの入力と再生を設定することができます。これを行うには**［音符入力］**▸**［設定］**▸**［入力デバイス］**を選択します。



ページ最上部の表からご使用のデバイスの名前（**M-Audio Oxygen 8**など）を探し、**[使用]**チェックボックスがオンになっていることを確認します。MIDIギターをご使用の場合、ドロップダウンメニューをクリックして（**[キーボード]**ではなく）**[ギター]**を選択し、**[タイプ]**を変更する必要があります。

このセクションでは、MIDIキーボードを使用します。MIDIデバイスの入力と再生の設定方法について、詳しくは『リファレンスガイド』の🕮 **3.12 入力デバイス**を参照してください。

フレキシタイムのオプション

単音のメロディを弾いてみるのが一番簡単です。まずは試してみましょう。画面には、これまで作業を行ってきた［Scarborough Fair］スコアが表示されているはずです。

クラリネットパートの1番をレコーディングしていきます。最良の結果が得られるよう、**[音符入力]**▸**[フレキシタイム]**のダイアログランチャーボタン（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**O**または⇧⌘**O**）をクリックします。

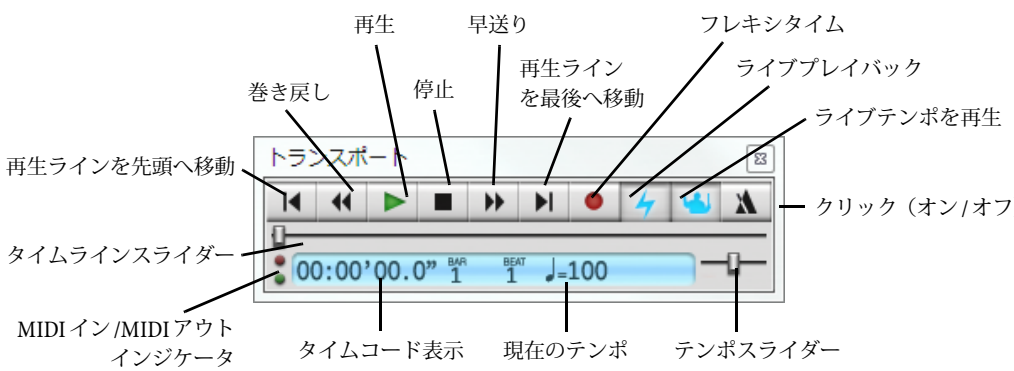
別の楽器に合わせて、1つのメロディラインのみをレコーディングしますので、**[テンポの柔軟性]**ドロップダウンリストから**[なし（ルバートなし）]**を選択し、**[複数の声部に入力]**チェックボックスをオフにします。

[OK]をクリックしてスコアに戻ります。

試してみましょう

このプロジェクトの最初に印刷したスコアのプリントアウトを参照しながら進めていきます。

［トランスポート］パネルでは、Sibelius Firstの再生の表示と操作が行えます。［トランスポート］パネルが表示されていない場合は、**[表示]**▸**[パネル]**▸**[トランスポート]**（ショートカットは**Ctrl**＋**Alt**＋**Y**または⌥⌘Y）を選択してオンにします。



必要に応じて、再生コントロールの多くは**[再生]**▸**[トランスポート]**からも操作できます。

フレキシタイムを使って、小節43から小節61（1番の終わり）までの音符を入力していきます。クラリネット譜表の小節43を選択する（またはこの小節の小節休符を選択する）と、この小節が薄い青色のボックスで囲まれ、レコーディングを開始する小節が設定されます。

用意ができたら、**[音符の入力]**▸**[フレキシタイム]**▸**[フレキシタイム入力]**（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**F**または⇧⌘**F**）を選択するか、［トランスポート］パネルのレコードボタンをクリックします。すると1小節分のカウントが再生されたあと、レコーディングが開始されます。それでは試してみましょう。

- 標準設定では、フレキシタイムのカウントインは1小節です。この場合、カウントインのクリック音が3回聞こえます。（メトロノームのクリック音が聞こえない場合、再生デバイスがオンであることを確認してから、『リファレンスガイド』の🕮 **3.13フレキシタイム**または🕮 **6.1 Working with playback**を参照してください。）
- カウントインの後、クリック音に合わせて、続く2、3小節をスムーズに演奏してみましょう。
- 演奏を続けましょう。演奏から少し遅れて、画面に音符が表示されていきます。演奏中は画面を見ないほうが簡単かもしれません。
- レコーディングを停止するには、再生ウィンドウの四角い停止ボタンを押すか、**スペース**キーを押します。

入力結果を確認しましょう。結果に満足できない場合は、入力した小節を選択してから**Delete**キーを押し、もう一度小節43を選択します。満足できる結果が得られるまでレコーディングを繰り返します。録音中のSibelius Firstのスコア再生スピードを落としたい場合は、下の**レコーディングテンポの調整**を参照してください。

このチュートリアルの**プロジェクト3**では、2つの譜表に同時に入力する方法について説明しています。ルバート（テンポの柔軟性）、メトロノームクリック音のスピードや音色、カウントイン、3連符やその他の連音符の認識方法など、さまざまなオプションを変更することもできます（『リファレンスガイド』の🕮 **3.13フレキシタイム**参照）。

レコーディングテンポの調整

キーボードの操作に慣れていなくても、心配する必要はありません。Sibelius Firstを使えば、名演奏家である必要はありません。まず、フレキシタイムレコーディングをより簡単に行う方法について説明し、その後、入力内容の修正方法について説明します。

［トランスポート］パネルのテンポスライダーでは、スコアの再生スピードを調整することができます。この操作は、フレキシタイム入力のレコーディングにも適用されます。スライダーを右に動かすとクリック音がゆっくりになり、慎重に演奏したい場合に便利です。

テンポスライダーは、スコア全体の再生スピードを変更する場合にのみ使用してください。テンポの変更には、テンポテキストとメトロノーム記号を使用してください（38ページの**1.7 テキストと強弱記号** 参照）。

パフォーマンスの再表記

不要な休符、重複した音符、間違った長さの音符がある場合は、これらを読みやすく修正することができます。パッセージを選択し、**[音符入力]**▸**[フレキシタイム]**▸**[パフォーマンスの再表記]**を選択すると、ダイアログが開きます。レコーディングした楽譜では8分音符より短い音符を使っていないので、**[クォンタイズの単位（最小音価）]**ドロップダウンを**[標準：8分音符]**へ設定して、**[OK]**をクリックします。フレキシタイムの入力内容が再計算され、リズムと表記が単純化されます。

間違いがあれば、これまでに学んできた編集テクニックを使って、音価や音高を修正しましょう。

1.5 アルファベット入力とステップ入力

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア **[5アルファベット入力とステップ入力]**（**[プロジェクト1]** フォルダ内）を開いてください。

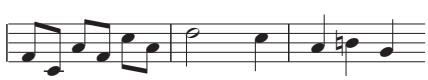
クラリネット譜表への音符入力を完成させましょう。Sibelius Firstで音譜を作成する方法をさらに2つ説明します。このプロジェクトの最初に印刷したスコアのプリントアウトを参照しながら進めていきます。

アルファベット入力

コンピューターキーボードの**A**から**G**の英字を使って音高を、（テンキーではなく）メインキーボードの**1**から**9**の数字を使って和音をSibelius Firstに入力することができます。マウスで音符を選択し、**[音符入力]** ▸ **[音程]** ▸ **[上]** と **[音符入力]** ▸ **[音程]** ▸ **[下]** を選択して和音を作成することもできます。この方法に慣れると、マウスよりもコンピューターのキーボードを使った方が速く音符が入力できます。

クラリネットパートの小節66から小節68に音符を追加してみましょう。

- クラリネット譜表の小節66の小節休符をクリックすると濃い青色に変化します。こうして開始小節を設定します。ここから先は、マウスを使わないで操作してみましょう。
- **N**キー（これは **[音符入力]** ▸ **[音符入力]** ▸ **[音符入力]** のショートカット）を押すとカーソルが表示されます。
- **F7**キーを押してテンキーの第1レイアウトを表示し、テンキーの**3**キーを押して8分音符を選択します。こうして、入力される音符の音価をあらかじめ指定しておきます。
- **F**をタイプします。Sibelius Firstは、前の音との音程が最小限になるように音高を自動的に入力しますが、この場合はFが1オクターブ低すぎるので**Ctrl**＋↑または⌘↑をタイプして音を1オクターブ上に移動します。
- **C A**とタイプし、**Ctrl**＋↑または⌘↑を押してAを1オクターブ上に移動させます。音符が追加されるたびにカーソルが移動し、次の音符が追加される位置が示されます。
- **F C A**とタイプします（**Ctrl**＋↑または⌘↑を押してCを1オクターブ上に移動させます）。
- テンキーの**5**キーを押し、2分音符を選択します。
- **D 4**（4はテンキー）**C A**とタイプ入力します。Dの2分音符、CとAの4分音符が入力されます。
- Bナチュラルを入力するために、テンキーの**7**を押してナチュラルを選択します。
- **B G**とタイプ入力し、BナチュラルとGの4分音符を入力します。
- これ以降はしばらく入力作業は行わないので、**Esc**キーを2回押し、音符入力を停止し、最後に入力した音符の選択を解除します。

最後にはこのようになります。

マウス入力の場合、マウスでスコアをクリックしてはじめて音符が入力されるのと同じように、アルファベット入力の場合、**A**から**G**の文字をタイプ入力してはじめて音符がスコアに入力されます。テンキーで音符を選択しても、**A**から**G**のキーをタイプ入力またはマウスをクリックしなければ音符は入力されません。マウス入力と同じように、文字をタイプする前に臨時記号、

アーティキュレーション、その他のテンキーの記号をタイプする必要があります。（この操作を忘れて入力してしまった場合も、後で音符を編集することができます。）唯一の例外は、（**Enter**キーを使った）タイの入力です。

一方の手でテンキーを使って長さを変更し、もう一方の手で**A**から**G**と**R**を使って音高を入力するこの方法に慣れれば、非常に素早く簡単に音符を作成することができるようになります。

既存の音符のアーティキュレーション、臨時記号、その他の属性は、音符を選択してからテンキーの対応するボタンを選択するだけで編集できることを覚えておきましょう。音符の音高を変更するのは簡単です。音符を選択し、文字**A**から**G**を使って新しい音高をタイプします。音符の長さを変更する方法についてはすでに説明しました。音符を選択し、テンキーで音価を選択します。

アルファベット入力を使って、クラリネットパートから小節69以降のスコアへと足りない部分を入力しましょう。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **3.1 音符入力について**をご参照ください。

アルファベット入力による和音の作成

アルファベット入力で和音を作成する方法には2つあります。通常の入力方法で和音内の音符を1つ入力してから、次のように行います。

- **［音符入力］▸［音程］▸［上］**または**［音符入力］▸［音程］▸［下］**を選択し、メニューから音程を選択します。
- 通常のキーボードでは、（テンキーではなく）メインキーボードの**1**-**9**を押して、入力した音符の上に音符を追加するか、**Shift**-**1**-**9**を押して、入力した音符の下に音符を追加します。たとえば、**1**を押すとユニゾンで、**3**を押すと3度上に、**Shift**-**6**を押すと6度下に音符が追加されます。これらは**［音符入力］▸［音程］▸［上］**と**［音符入力］▸［音程］▸［下］**メニューアイテムのキーボードショートカットです。
- **Shift**-**A**～**G**のキーで元になる音高を指定し、選択されている音符の上に音符を追加します。（入力した音符の下に音符を追加するショートカットはありません。）

このように、音符を和音に追加していきます。

ノートブック型（ラップトップ）コンピューターのキーボード（18ページの**ノートブック（ラップトップ）のショートカット**を参照）では、**Shift**-**1**～**9**を押して、入力した音符上に音符を追加します。たとえば、**Shift**＋**4**を押すと3度上に音符が追加されます。

パッセージを選択してから**1**–**9**または**Shift**＋**1**–**9**を押すと、パッセージに含まれるすべての音符の上または下に一度に音符を追加することができ、便利です。

ステップ入力

MIDIデバイスを演奏することによってSibelius Firstに楽譜を入力する方法については、すでに説明しました。アルファベット入力に似た方法で、MIDIキーボード（またはMIDIギター）を使って音符を入力することもできます。

コンピューターに接続されているMIDIデバイスをお持ちでない場合、先ほど説明したアルファベット入力を使ってこのセクションを進めてください。また、キーボードウィンドウを仮想MIDIキーボードとして使用することもできます。（『リファレンスガイド』の🕮 **3.5 キーボードウィンドウ**参照。）

ステップ入力は、MIDI入力デバイスを使い、実際の音高、音程を入力していくので、作業は少し速くなります。次のように行います。

- 音符の作成を開始する小節内の休符を選択してから**N**を押すと、カーソルが表示されます。
- テンキーで音価を選択します（この手順を忘れないようにしましょう）。
- MIDIキーボードで音符を演奏します。アルファベット入力と同様に、音符を作成する前にアーティキュレーションやその他の記号を選択します。選択されたテンキーのキーは、別のキーが選択されるまで、選択されたままの状態となります。
- 音価を変更するには、音符を作成する前にテンキーで新しい音価を選択します。
- 休符を入力するには、テンキーの**0**を押します。テンキーで選択されている音価の休符が入力されます。

アルファベット入力との違いは次の点です。

- 黒鍵を演奏すると、それが黒鍵であることが認識されるため、臨時記号を入力する必要はありません。黒鍵音符の表記（F♯となるのか、G♭となるのかなど）は、調号と内容に基づいて判断されます。また、音符を作成した後で**［音符入力］**▸**［音符入力］**▸**［異名同音］**選択するか、**Return**キー（メインキーボード上）を押して異名同音に変更することができます。
- 同じように、音符のオクターブも正しく認識されます。
- 和音は、演奏するだけで入力することができます（アルファベット入力のように、1つの音符を入力してから次の音符を入力していく必要はありません）。

これらの違いにより、ステップ入力を行う方が、アルファベット入力を行うよりも少し時間を短縮できます。ステップタイム入力を使って、アコースティックギター譜表の小節69以降に足りない部分を入力していきましょう。

- まず、アコースティックギター譜表のの小節69の小節休符を選択します（濃い青色に変化します）。
- 次に、テンキーで8分音符（クエーヴァー）を選択します。
- 音符を演奏します。テンキーで音符の長さを変更しながら演奏していきます。

間違えた場合や、変更したい場合は、いつでも矢印キーで戻ることができます。アルファベット入力の場合と同じように、音符または和音の音高を修正するには、音符を選択してからMIDIキーボードで演奏します。間違えても、**［元に戻す］**で修正できます。

コードを作成するには、マウスで音符をクリックしたり、コンピューターキーボードを使って入力するよりも、MIDIキーボード（またはMIDIギター）を使うとすばやく簡単に入力できます。詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **3.1 音符入力について**をご参照ください。

楽譜をコピーするには**Alt**-クリックまたは**⌥**-クリック、音符または小節を繰り返すには**R**を使用できることを覚えておきましょう。

音価の前に音高を指定する

音高の前にではなく、音高の後に音符や和音の長さを指定する入力方法に慣れている方は、Sibelius Firstでも同じことができます。**［ファイル］**▸**［環境設定］**を選択し、**［音符の入力］**ページへ切り替えます。ダイアログの一番上の**［音符入力プリセット］**メニューから**［音価の前に音高］**を選択し、**［OK］**をクリックします。

以後は、他の記譜プログラムの音価のショートカットと同じ配列のボタンが［テンキー］の第1レイアウト上に表示され、例えば4分音符は**4**ではなく**5**を押して入力します。入力を開始する場所を選択し**N**を押すと、音符や和音を演奏するに従って、演奏した音がシャドー音符で示されます。ただしSibelius Firstが音符や和音を入力するのは、テンキーの音価をタイプすると同時にMIDIキーボードで音符や和音を押さえたときだけです。

［環境設定］ダイアログの**［音符の入力］**ページのオプションは自由に組み合わせられますので、いろいろな設定を試して最も快適な入力方法を見つけてください。

このチュートリアルではSibelius Firstの標準設定の音符入力方法を使用することを前提として進めますので、**［音価の前に音高］**を使用する場合はテンキーのショートカットが異なることに注意してください。

Sibelius Firstの音符入力について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **3.11 音符の入力オプション**をご参照ください。

スコアの移調

標準設定では、実音（コンサートピッチ）で表示されます。演奏者に分かりやすいよう、移調譜へ切り替えてクラリネット譜表を正確な音高で表示させるには、**［ホーム］▸［楽器］▸［スコアを移調する］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**T**または⇧⌘**T**）を選択します。それでは試してみましょう。クラリネット譜表の音符と調号すべてが、クラリネットのコンサートピッチにすぐさま変更されます。Sibelius Firstでは、移調楽器によって生じる複雑な問題すべてが自動処理されます。

移調スコアを再生すると、Sibelius Firstは移調楽器を正しく読み取り、正しい音高に置き換えて再生します。移調楽器の間でコピーすると、同じ音程になるよう移調されます。（実音スコアからパート譜表示に切り換える場合も、移調楽器が自動移調されます。下を参照してください。）

表示されているスコアが実音か移調された音高かは、ウィンドウの一番下のステータスバーに［コンサートピッチ］または［移調スコア］が表示されるので一目で分かります。

Sibelius Firstの音符入力方法では、**［ホーム］▸［楽器］▸［スコアを移調する］**がオンの場合にもスコアに音符を入力することができます。**A**～**G**の文字を使って音符を入力する場合、対応する記譜音が譜表に表示されます。

- まだの場合は**［ホーム］▸［楽器］▸［スコアを移調する］**を選択して移調スコアへ切り替えます。
- クラリネット譜表の最初の2小節を選択し、**Delete**キーを押して音符をクリアします。
- **N**を押してカーソルを表示させ、テンキーで音価を選択します。
- **A B C D**とタイプ入力し、譜表に音高A、B、C、Dを入力します。
- **［ホーム］▸［楽器］▸［スコアを移調する］**を選択するか、ツールバーボタンをクリックして、実音へと切り替えます。音高がそれぞれG、A、B♭、Cへと移調されます。

しかし、MIDIデバイスを使って実音で音高を演奏する場合は、実音が譜表に表示されます。

- **［ホーム］▸［楽器］▸［スコアを移調する］**を選択して移調スコアへ切り替えます。
- クラリネット譜表の最初の2小節を選択し、**Delete**キーを押して音符をクリアします。
- **N**を押してカーソルを表示させ、テンキーで音価を選択します。
- ご使用のMIDIデバイスで、**A**、**B**、**C**、**D**を演奏します。

音高B、C♯、D、Eが譜表に入力されます。詳しくは、『リファレンスガイド』🕮 **2.3楽器**をご参照ください。

[元に戻す]をクリックするか、**[編集]**▸**[元に戻す]**（Mac）を選択し、変更を取り消してクラリネットの対旋律を復元させましょう。

パート譜での作業

スコア内の楽器の自動移調に加え、Sibelius Firstでは、各楽器のパート譜を作成することができます。パート譜には、その楽器に関連する記譜のみが表示されます。フォーマット、移調、レイアウトは、Sibelius Firstにより自動処理されます。

Sibelius Firstでは画期的なアプローチが導入されており、スコアに変更を加えると変更内容がパート譜に反映され、逆に、パート譜に変更を加えると変更内容がスコアに反映されます。この機能を「ダイナミックパート」（Dynamic Parts™）と呼んでいます。

ダイナミックパートは、スコアを編集するのとまったく同じ方法で編集することができます。音符の移動、追加、削除、スラーや発想記号の追加など、すべて通常どおりに行えます。スコア（またはパート譜）に加えた変更は、パート譜（またはスコア）にすぐさま反映されます。ダイナミックパートを別ファイルに書き出す必要はありません。Sibeliusでは、パート譜はフルスコアと同じファイルに保存されるため、管理も簡単です。

リボンの下のドキュメントタブを使うと、任意のパート（保存したバージョンなどの他のドキュメントビュー）を簡単に表示できます。これによって1つのウィンドウ内に同じスコアの複数のパートを開くことができます。

パート譜は、スコアを開始すると自動的に作成されるため、特別な操作は必要ありません。［Scarborough Fair］スコア内の楽器のパート譜を確認してみましょう。

- ドキュメントタブバーの右側の**[新しいタブを開く]**ボタンをクリックするか、またはドキュメントタブバーの任意の場所を右クリック（Macでは**Ctrl**-クリック）して選択可能なパートを表示します。

- リストから**[クラリネットBb]**を選択します。パート譜のみ表示されるよう画面表示が変更されます。スコアとパート譜の違いがひと目で分かるよう、クリーム色の用紙上にレイアウトされます。

このパート譜は、このまま演奏者に提供することができます。タイトルと音符はスコアと同じです（ただし、正しい記譜音で表示されます）。パート譜には、演奏者がこのパートを演奏するために必要なすべての情報が含まれている一方、必要でない情報はすべて省かれています。

Ctrl＋↑または⌘↑を押して小節を1オクターブ上へ移調してから、フルスコアを表示したドキュメントタブに戻るか、または右の**[タブ切り替え]**ボタンをクリックし、メニューから**[フルスコア]**（ショートカットは**W**）を選択します。

フルスコアの同じパッセージが、1オクターブ上へ移調されます。**Ctrl**＋↓または⌘↓を押し、パッセージを元のオクターブへ戻します。

このチュートリアルでは、ダイナミックパートを使った作業についてもう少し説明していきます。詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **7.9パート譜での作業**を参照してください。

1.6 再生

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［6 再生］**（**［プロジェクト 1］**フォルダ内）を開いてください。

Sibelius First の最もパワフルな機能のひとつに、スコアを再生する機能があります。

再生コントロール

［トランスポート］パネルの**［再生］**ボタンをクリックするか、**スペースキー**を押すと、楽譜の再生が始まります（始まらない場合は下記を参照してください）。この機能は**［再生］▸［トランスポート］▸［再生］**にもあります。

Sibelius First は、テンキーを自動的に非表示にし、楽譜のページ全体を表示します。緑色の縦線（再生ライン）が表示され、再生位置が示されます。スコアは、進行に合わせて移動します。

［Scarborough Fair］のアレンジを通して聴いてみましょう。再生を停止するには、［トランスポート］パネルの**［停止］**ボタンをクリックするか、もう一度**スペース**キーを押します。

スコアを巻き戻したり早送りするには、［トランスポート］パネルのそれぞれのボタンを使うか、キーボードショートカット**[**（巻き戻し）と**]**（早送り）を使います。

再生ボタンをクリックするか、**スペース**キーを押すと、再生を停止した位置から再生が再開されます。再び最初から再生するには、スコアの先頭まで巻き戻す必要があります。スコアの最初または最後まですばやく巻き戻しまたは早送りするには、**Ctrl**＋**[/]**または**⌘[/]**を押します。

特定の位置から再生させるには、再生を開始させたい位置の音符をクリックして選択し、**P**キーをクリックします。スコアを最初から再生するには、**Esc**キーを押してすべての選択を解除してから**P**を押すのが最も簡単です。

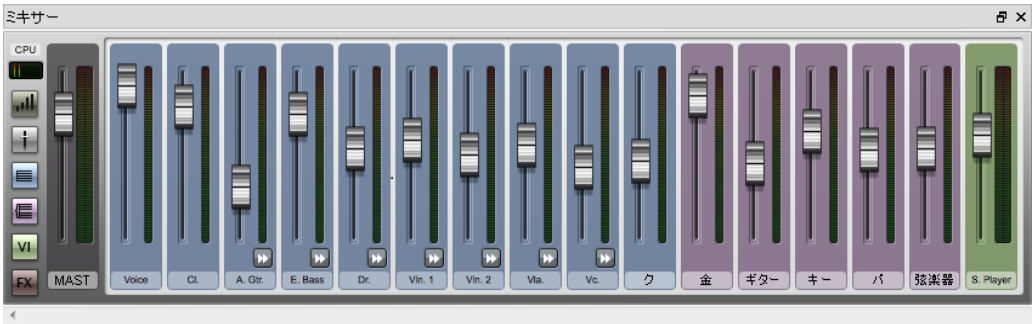
再生に問題がある場合は、下記の**何も聴こえない！**を参照してください。

ミキサーパネル

［Scarborough Fair］を再生すると、楽器が異なるステレオ位置で聴こえます。これは、コンサートステージに並べた様に 3D 空間に楽器を配置する、Sibelius First の SoundStage™ 機能によるものです。

各楽器の位置とボリューム（およびリバーブやその他のエフェクトの適用）は、Sibelius First のパワフルな［ミキサー］パネルをで調整できます。［ミキサー］を表示するには、**［再生］▸［設定］▸［ミキサー］**を選択するか、ショートカット**M**を押します。

ミキサーは、色付けされたストリップに分類されています。スコア内の各譜表は、それぞれ薄い青色の譜表ストリップで表示されます。アコースティックギター譜表ストリップを探して、ボリュームフェーダーを右へドラッグして再生中のギターのサウンドを大きくしてみましょう。ボリュームフェーダーを**118**までドラッグします。



それでは、ドラムのステレオ位置を変更してみましょう。これを行うには［ミキサー］のすべてのコントロールを表示する必要がありますから、サイズ変更ボタン（ ）をクリックしてミキサーを最大にします。

［リバーブ］と**［コーラス］**のスライダーなど、より多くのコントロールが表示されます。ドラムセット譜表ストリップを見つけ、つまみが中央にあることを確認します。**スペース**キーを押し、Sibelius First がスコアを再生しているときに、このつまみをクリック & ドラッグして左一杯へ回してみましょう。ドラムのサウンドが左へ「移動」したように聴こえましたか？

ミキサーを使って、リバーブやコーラスなどのエフェクトをスコア内の楽器へと加える方法を見てみましょう。

- ギター譜表ストリップを見つけます。
- **［Reverb］**と表記されたスライダーをクリックします。
- マウスでスライダーをドラッグし、ギターに適用されるエフェクトの量を調整します。サウンドがどのように変わるか聴いてください。［Scarborough Fair］スコアは、パワフルな内蔵 Sibelius Player と驚くほどリアルなサウンドを生み出す Sibelius 7 First Sounds サウンドライブラリーを使用します。ギターサウンドにリバーブをミックスしていくと、大きなコンサートホールでギターを演奏しているように聞こえてきます。

ミキサーで操作したボリューム、エフェクト、ステレオ位置（パン）の変更は、スコアを保存する際（またはスコアのバージョンを保存する際）に保存され、次にスコアを開いたときに再現されます。

Sibelius Firstの再生とミキサーについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **6.［再生］タブ**をご参照ください。

何も聴こえない！

［再生］ボタンを押しても何も聞こえない場合、次の点を確認してください。

まず、コンピューターのスピーカー、MIDIキーボード、その他の再生機器をチェックし、接続されていること、オンになっていること、ボリュームが正しく設定されていることを確認します。次に、コンピューターのオペレーティングシステムがSibelius Firstのオーディオを再生するよう設定されているかどうか確認します。次のオペレーティングシステム別の手順を参照してください。

Windows XP：

- ［スタート］メニューから**［コントロールパネル］**を選択してから、**［サウンドとオーディオデバイス］**をダブルクリックします。
- 一番上の**［オーディオ］**タブをクリックしてから、**［音量］**ボタンをクリックします。
- メインの**［ボリュームコントロール］**と**［MIDIシンセサイザ］/［SWシンセサイザ］**の音量が正しく設定されており、**［ミュート］**が選択されていないことを確認します。

Windows Vista/Windows 7：

- ［スタート］メニューから**［コントロールパネル］**を選択してから、**［ハードウェアとサウンド］**を選択します。
- **［サウンド］**内の**［システム音量の調整］**を選択します。
- **［アプリケーション］**内の**［Sibelius First］**の音量と、メインの**［デバイス］**の音量が正しく設定されており、［ミュート］が選択されていないことを確認します。

Mac OS X：

- Appleメニューから**［システム環境設定］**を選択します。
- **［サウンド］**を選択してから、**［出力］**タブをクリックします。
- **［主音量］**が正しく設定されており、**［消音］**が選択されていないことを確認します。

これでもまだ再生が聞こえない場合、Sibelius Firstが正しく設定されているかどうかを確認します。

- 右の**［再生］▸［設定］**のダイアログランチャーボタンをクリックし、**［再生デバイス］**ダイアログを開きます。
- **［設定］**ドロップダウンメニューから**［Sibelius 7 First Sounds］**を選択します。
- 右列の**［Sibelius Player］**を選択してから、**［テスト］**ボタンをクリックします。
- 何も聞こえない場合、ダイアログの一番下の**［オーディオエンジンのオプション］**をクリックします。
- 推奨インターフェース（Windowsでは可能であれば**ASIO**、そうでない場合は**［プライマリサウンドドライバ］**）が選択されていることを確認し、**［閉じる］**をクリックします。
- 右列の［Sibelius Player］を選択してから、**［テスト］**ボタンをクリックします。

これでもまだSibelius Firstの再生内容が聞こえない場合、テクニカルヘルプまでご連絡ください。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **6.2 再生デバイス**をご参照ください。

1.7 テキストと強弱記号

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**[7テキストと強弱記号]**（**[プロジェクト1]**フォルダ内）を開いてください。

スコアに記載される音符以外の演奏者への指示は、多くがテキスト形式で記入されています。Sibelius Firstのスコアでは、多くのテキスト（ページ番号、小節番号、楽器名など）が自動的に表示されます。しかし、強弱記号、歌詞、メトロノーム記号、テンポテキストなどのさまざまな記号を自由に追加することができます。テキストによる指示は、そのほとんどが再生に反映されます。Sibelius Firstでスコアを再生すると、作成された強弱記号やテンポ記号などの指示に従って再生されます。

テキストについて

Sibelius Firstで作成されるテキストには、それぞれ独自の「テキストスタイル」があります。テキストスタイルとは、フォント、サイズ、位置、その他の特性を指定するものです。テキストスタイルには、タイトル、歌詞、テンポなど、その内容を示す名前が付けられています。

テキストを編集する際は、次の点に注意しましょう。

- ごく一部のテキストの属性を変更したい場合は、リボン上の**[テキスト]**▸**[フォーマット]**グループのオプションを使用します。
- 別のフォントを使用するためにスコアのすべてのテキストを変更したい場合は（タイトル、楽器名、歌詞、テクニック指示などを1回の操作で別のフォントに変更するなど）、**[テキスト]**▸**[フォーマット]**のダイアログランチャーボタンをクリックし、別の**[主なテキストフォント]**を選択します（または、手書きのスタイルなどの適切なハウススタイルをリストから選択してスコアのすべてのアイテムの外観を変更します）。

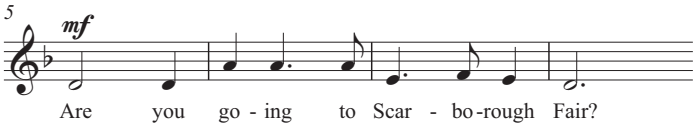
歌詞の追加

［Scarborough Fair］スコアのボーカル譜表には歌詞がありません。

歌詞を追加しましょう。

- ボーカル譜表の小節5をクリックして選択します。
- **[テキスト]**▸**[歌詞]**▸**[歌詞]**（ショートカットは**Ctrl**＋**L**または**⌘L**）を選択します。
- 最初の音符の下に点滅カーソルが表示されます。
- 最初の歌詞ラインをタイプ入力します。

音節の分割位置を指定するには、**–**（ハイフン）をタイプ入力します。音節が分割され、カーソルが次の音符の位置に移動します。1つの音節が2つ以上の音符にまたがる場合、カーソルが次の音節の入力位置に来るまで、ハイフンを繰り返し入力します（1音符につき1つ）。語と語の間を空けるには、**スペース**キーを押します。入力した単語の最後の音節が2つ以上の音符にまたがる場合、カーソルが次の語の入力位置に来るまで、**スペース**キーを繰り返し入力します。メリスマとなる場合、その音節が終了する位置までラインが自動的に追加されます。

次の図のようになります。

残りの歌詞をすべてタイプしてください。

他のプログラム（ワードプロセッサーなど）から歌詞をコピーしたり、複数行の歌詞を作成したり、外観とフォーマットのすべてを操作することもできます（『リファレンスガイド』の 🕮 **5.6 歌詞**）。

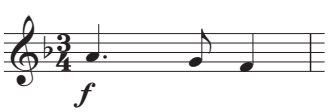
強弱記号

「強弱記号」という用語は、***mp*** の様なテキスト指示とヘアピン（V字形の cresc./dim. ライン）の両方を意味します。Sibelius First は、演奏者と同じ様にこれらを再生します。強弱記号は、「発想記号」と呼ばれるテキストスタイルで書き込まれます。

Sibelius First のテキストスタイルは、**［テキスト］▸［スタイル］▸［スタイル］** ギャラリーにカテゴリー別に表示されます。このギャラリーはリボンに直接組み込まれており、ギャラリーを開かなくても最初のいくつかのアイテムが見られます。この様なリボン内のギャラリーは右側の矢印ボタンを使ってリストを上下にスクロールでき、ドロップダウンメニューとしてギャラリーを開くこともできます。

曲の先頭にテキストの強弱記号を作成してみましょう。

- クラリネット譜表の最初の音符を選択します。
- **［テキスト］▸［スタイル］▸［スタイル］** ギャラリーを開きます。
- **［共通］** カテゴリーから **［発想記号］** を選択します（ショートカットは **Ctrl** ＋ **E** または ⌘**E**）。最初のカテゴリーである **［使用］** には、現在のスコアですでに使われているテキストスタイルが表示されます。最も重要なカテゴリーは **［共通］** で、一番上に表示されます。このカテゴリーには、最もよく使われるテキストスタイルのプリセットが含まれています。
- 最初の音符の下に点滅カーソルが表示されます。
- **Ctrl** または ⌘ を押さえ、**F** をタイプします。**Ctrl** または ⌘ を押さえると、強弱記号に使用される特殊な太字を使って文字が入力されます。右クリック（Windows）または **Control** ＋クリック（Mac）を押して、便利な用語のメニューを表示することもできます。このメニューは「用語メニュー」と呼ばれます。
- **Esc** キーを押し、テキストの作成を終了します。

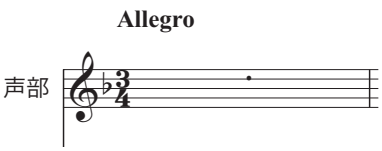
次の図のようになります。

このプロジェクトの最初に印刷した［Scarborough Fair］のプリントアウトを参考に、ボーカル譜表、クラリネット譜表、アコースティックギター譜表に残りのテキストを追加していきましょう。このアレンジの強弱記号はすべて、特殊な太字で表示されるよう **Ctrl** または ⌘ を押したまま文字をタイプ入力するか、用語メニューを使って書き込むことができます。

テンポテキスト

テンポテキストは、スコアの先頭と、音楽のテンポが劇的に変化する位置に記入されます。Sibelius Firstでスコアを再生すると、テンポテキストの指示が再生に反映されます。前のセクションでスコアを再生した際、再生スピードが少し遅いことに気づきましたか。気づかなかった場合は、**スペース**キーを押してもう一度聴いてみましょう。

テンポテキストをいくつか追加し、テンポを変更させましょう。

- **Ctrl**＋**Home**または⌘↖を押してスコアの先頭に戻り、最初の小節を選択してテンポ記号を記入する場所を指定します。
- **［テキスト］**▸**［スタイル］**▸**［スタイル］**ギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［テンポ］**を選択します（ショートカットは**Ctrl**＋**Alt**＋**T**または⌥⌘**T**）。
- 音符の上に点滅カーソルが表示されます。この種類のテキストは譜表の上に自動配置されます。
- 右クリック（Windows）または**Control**＋クリック（Mac）して、テンポ記号の用語メニューを表示します。
- メニューから［**Allegro**］を選択してクリックします。メニューが消え、スコアに［**Allegro**］の文字が表示されます。
- **Esc**キーを押し、テキストの作成を終了します。

次の図のようになります。

スコアを先頭まで巻き戻し、**スペース**キーを押してスコアを再生してみましょう。正しいスピードで再生されるよう、［トランスポート］パネルのテンポスライダーが中央に配置されていることを確認してください。

［**Allegro**］記号を削除してからギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［テンポ］**を選択し、他のテンポを試してみましょう。［**Prestissimo**］や［**Maestoso**］を用語メニューから選択し、サウンドがどのように変化するか聴いてみましょう。

［スイング］または［ストレート］をタイプすることによって、テンポテキストスタイルを使ってスコアや特定のパッセージのリズムのノリを変えることもできます。

テクニックテキスト

テクニックテキストは、楽器のサウンドを変化させるよう、または、特定の演奏テクニックや部品を使用するよう演奏者に指示を出すのに使用します。Sibelius Firstでスコアを再生すると、ミュート、ピッチカート、トレモロ、ディストーション、その他のエフェクトなどが再生に反映されます（反映される程度はご使用の再生機器に依存します）。

テクニックテキストは発想記号テキストに似ていますが、譜表の上に表示され、標準設定では斜体では表示されません。テクニック記号を作成するには、**［テキスト］**▸**［スタイル］**▸**［スタイル］**ギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［テクニック］**を選択します（ショートカットは**Ctrl**＋**T**または⌘**T**）。

発想記号、テンポ、テクニックの各テキスト、およびその他の共通のテキストスタイルについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **5.2 一般的なテキストスタイル**をご参照ください。

既存のテキストの編集

すでにスコア内にあるテキストを編集するには、そのテキストをダブルクリックするか、選択してからメインキーボードの**Return**キーを押します。この方法で楽器名を変更してみましょう。

- 最初の大譜表の先頭にある楽器名**［ドラムセット］**を選択します。
- テキストをダブルクリックして編集します。
- テキストを削除し、**［ドラムキット］**とタイプ入力します。
- **Esc**キーを2回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。

この操作はスコア内のどのテキストにも行えますので、タイトル、歌詞、強弱記号、その他の指示を簡単に変更することができます。

マグネティックレイアウト

編集中、音符の移動に合わせてスコア内のテキストやその他のオブジェクトが移動しているのに気づきましたか。オブジェクトによっては、選択するとオブジェクトの下に影が表示されることもあります。

これは「マグネティックレイアウト」の効果です。マグネティックレイアウトは、Sibeliusの画期的な衝突防止および検出機能です。楽譜の作成と編集に合わせて、スコアを自動的にレイアウトしてくれる楽譜作成ソフトは他にはありません。マグネティックレイアウトは、他のオブジェクトと重ならないよう、また、音符が読みにくくならないよう、譜表に置かれたオブジェクトの位置を調節します。

マグネティックレイアウトがどの様に機能するかは**【プロジェクト2】**で学びます。詳しくは『リファレンスガイド』の🕮 **7.4 マグネティックレイアウト**をご参照ください。

2 プロジェクト2

2.1 新規スコアの作成

このプロジェクトでは、新規のスコアを作成したり、Sibelius First に音楽をスキャンしたり、演奏者に見やすくかつ美しくスコアを表示する方法について説明します。

このプロジェクトの最初のセクションでは、音符入力の準備が整った弦楽四重奏のスコアの作成方法を説明します。楽譜の作成を開始するために必要なすべてが含まれたスコアを、スコアスターターを使ってセットアップする方法を学びましょう。また、「譜面用紙」から新しい空のスコアを作成する方法も説明します。

プリントアウト

弦楽四重奏用スコアの作成を始める前に、作成する音楽の完成版スコアを印刷する必要があります。このプロジェクトでは、印刷したこのスコアを参照しながら進めていきます。**[ファイル]** ▸ **[開く]**（ショートカットは **Ctrl** ＋ **O** または **⌘O**）を選択し、［サンプルスコア］フォルダ内にある **［プロジェクトファイル］** フォルダの **［プロジェクト 2］** と名前のフォルダへ移動します。**[1 新規スコアの作成]** という名前のスコアを開きます。

エドワードエルガーの「弦楽四重奏曲ホ長調、作品 83、第三楽章アレグロモルト」からの抜粋の弦楽四重奏の完成されたアレンジが表示されます。

[ファイル] ▸ **[印刷]**（ショートカットは **Ctrl** ＋ **P** または **⌘P**）を選択し、**[印刷]** ボタンをクリックしてスコアを印刷します。弦楽四重奏曲ホ短調のスコアが印刷されます。印刷されたスコアは、これ以降のアレンジの編集で使用しますので、そのままお手元に置いておいてください。

新規スコアを作成する ...

まったく新しいスコアを作成することは難しくはありません。しかし、スコアの外観などは気にせず、直ちに楽譜を書き始めたい場合は、テンプレートを使用することができます。新規スコアは以下の 2 つの方法で作成できます。

最も簡単なのは、様々なスタイルとジャンルがある、スコアスターターの 40 のテンプレートの 1 つを使用する方法です。「譜面用紙」から空のスコアを作成し、すべての設定を一つ一つ選択して、時間をかけて作成する方法もあります。

...簡単な方法

Sibelius First を起動すると、**[クイックスタート]** が表示され、楽譜の作成を開始するためのオプションが表示されます。このウィンドウの一番上の **[スコアスターター]** タブをクリックします。

ブルースや**カントリー**から**ロック**、**クラシック**、**ラテン**まで 10 種類の音楽ジャンルが表示されます。これらのアイコンの 1 つをクリックすると、そのジャンルの様々なスタイルが表示されます。これらのスタイルは、これから作成する楽譜のテンプレートに対応しています。スタイル名をクリックするとテンプレートの情報（調号、拍子記号、テンポなど）が表示され、**[再生]** をクリックするとそのスタイルの音楽が試聴できます。

このプロジェクトを終了するには、ジャンルの一番下の列の **[クラシック]** を選択し、**[弦楽四重奏]** スタイルのサムネールをクリックします。**[再生]** をクリックすると、本物の弦楽四重奏の短い録音が聴けます。**[選択]**。をクリックすると、このスタイルのテンプレートをもとにしたスコアが開きます。

後は音符を書き加えるだけです。スコアには楽器、調号、拍子記号、そしてタイトルまでが含まれていますので、楽譜の作成だけに集中できます。

スコアスターターのテンプレートの多くには、メロディー、リズム、伴奏、コード進行の一部が含まれていますので、着想に行き詰まったり、制作を始めるにあたって何かスタイリッシュなものを探しているような場合はこれらが役立つでしょう。

長さ、種類、楽器数に関係なく、こうした断片的な情報を総称して「アイデア」と呼んでいます。［アイデア］パネルでは、スコアで使用できるすべてのアイデア（300のアイデアのラブラリーが付属）を参照、検索、再生できます。アイデアは、クリップボードからのペーストと同じくらい簡単に使用できます。Sibelius Firstには、アイデアを正しい調や音域に移調する機能も搭載されています。これらのアイデアには、あらかじめスコアに追加されているものと、［アイデア］パネルから選択できるものがあります。［アイデア］パネルは、アイデアを含むスコアを開くと自動的に表示されます。［アイデア］パネルの表示は**［表示］▸［パネル］▸［アイデア］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Alt**＋**I**または**⌥⌘I**）を選択すると切り替えられます。

アイデアを聴いてみたい場合は、［アイデア］パネルをクリックし、左マウスボタンを押すと試聴できます。Sibelius Firstはアイデアを最大8回まで繰り返し再生します。

…時間のかかる方法

新しい空のスコアの作成を開始するには、**［ファイル］▸［新規］**を選択します（ショートカットは**Ctrl**＋**N**または**⌘N**）。**［クイックスタート］**が表示されます。**［新規スコア］**タブを開くと、5つの簡単なステップでスコアを作成できます。

まず、あらかじめ設定された［譜面用紙］のリストの1つを選択するか、独自の楽器編成を作成します。以下の通り、スコアの様々な外観をカスタマイズできる設定オプションが表示されます。

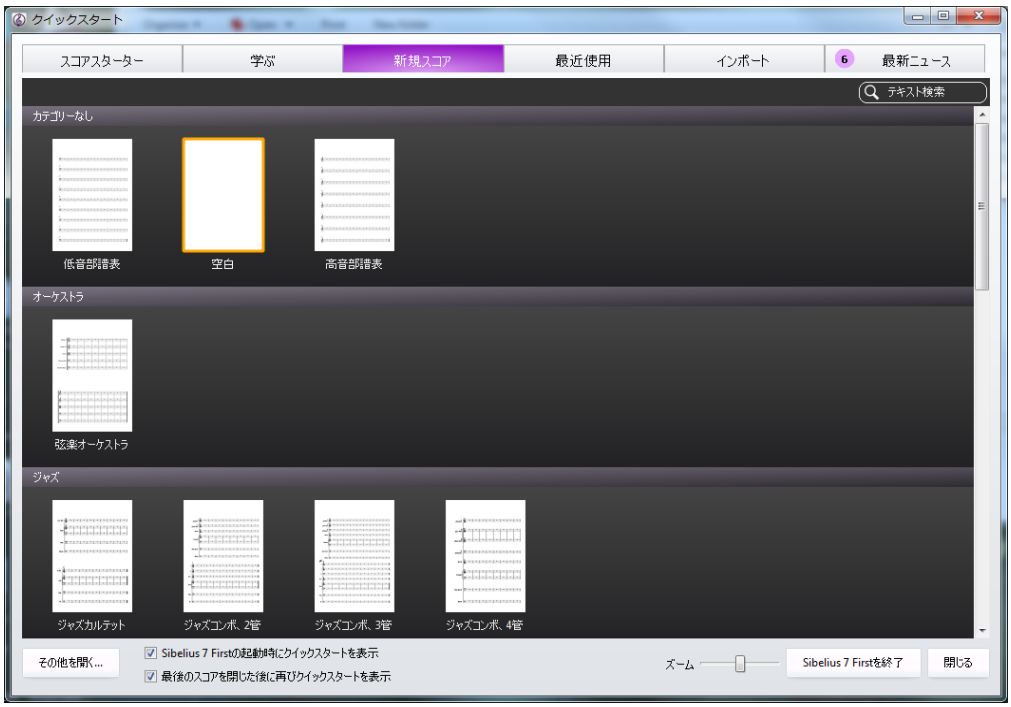
- ページのサイズと向きを選択し、伝統的な楽譜やて手書きの楽譜などのスコアの外観を決めます。
- スコアの先頭の拍子記号とテンポを設定します。
- スコアの先頭の調号を設定します。
- 最後に、スコアのタイトルや作曲者名などを入力し、必要に応じてタイトルページを作成します。

これらの変更がどの様にスコアに作用するかをプレビューが示します。ステップの途中であっても、**［作成］**をクリックすれば設定を終了することができます。この段階ですべてを設定しなくてもかまいません。

ダイアログは非常にシンプルで使いやすくなっています。ここでは、各設定をひとつずつ紹介しながら、特定の種類のスコアを設定していきましょう。

譜面用紙

［クイックスタート］ダイアログの**［新規スコア］**タブには、**［室内楽団］**、**［合唱と歌］**、**［ジャズ］**などのカテゴリーに分けれられた、多くの種類の楽器編成が表示されます。



標準的なアンサンブルを書いている場合、自分でスコアを定義するよりも、Sibelius Firstにあらかじめ用意された譜面用紙のひとつを使った方が良いでしょう。なぜなら特殊な楽器名のフォーマットや最適な譜表サイズなどが、あらかじめ標準設定として用意されているからです。

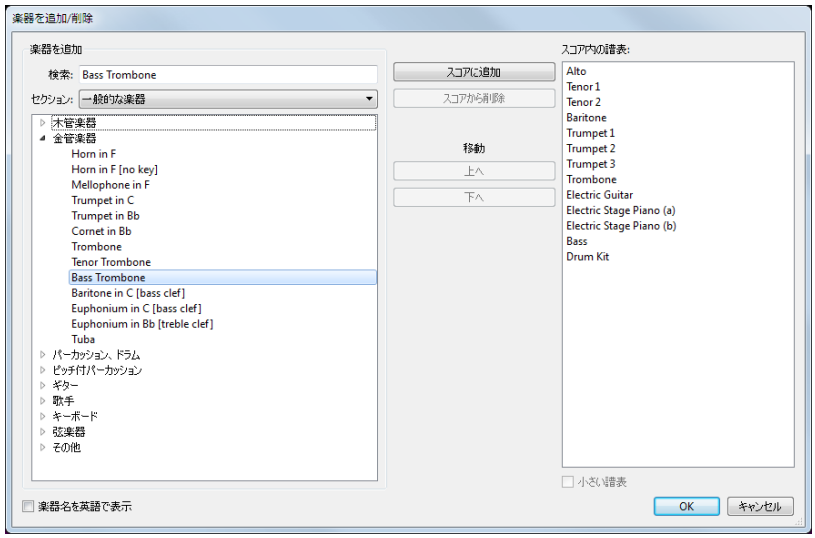
弦楽四重奏用スコアを開始するには**［室内楽団］**カテゴリーの**［弦楽四重奏］**譜面用紙を使うのが最も簡単ですが、ここでは、どのように楽器を追加するかを学ぶために**［カテゴリーなし］**の**［空白］**を選択してみましょう。その名が示すとおり、まったく何もない空白の譜面用紙です。

サムネールをクリックすると、スコアのプレビューとスコアをカスタマイズするための設定オプションが表示されます。

使用する楽器の追加

新しい楽器はいつでも追加できますので、使用したい楽器をすべて最初に決めておく必要はありませんが、最低でも 1 つの楽器を選んでおかなければ楽譜を書くことができません。

右の **[楽器変更]** ボタンをクリックして **[楽器を追加 / 削除]** ダイアログを開きます。



Sibelius First では、約 90 の最も一般的な楽器と 250 のジャズ、ロック、ポップ、ワールドミュージックの楽器の楽譜が作成できます（Sibelius のフルバージョンでは 650 を越える楽器の楽譜が作成できます）。ダイアログの左上にある **[セクション]** リストでは、これらの楽器が用途別に分類されています。

標準設定では、約 90 の**一般的な楽器**が表示されます。ただし、ジャズ、ロック、ポップ、またはワールドミュージックの楽譜を書く場合は、リストから適切なオプションを選択し、これらの音楽で使用される標準の楽器を表示してください。

楽器は標準的な順序でリストされており、スコアにもその順序で表示されますが、好みに応じてこの順序を変更することもできます。

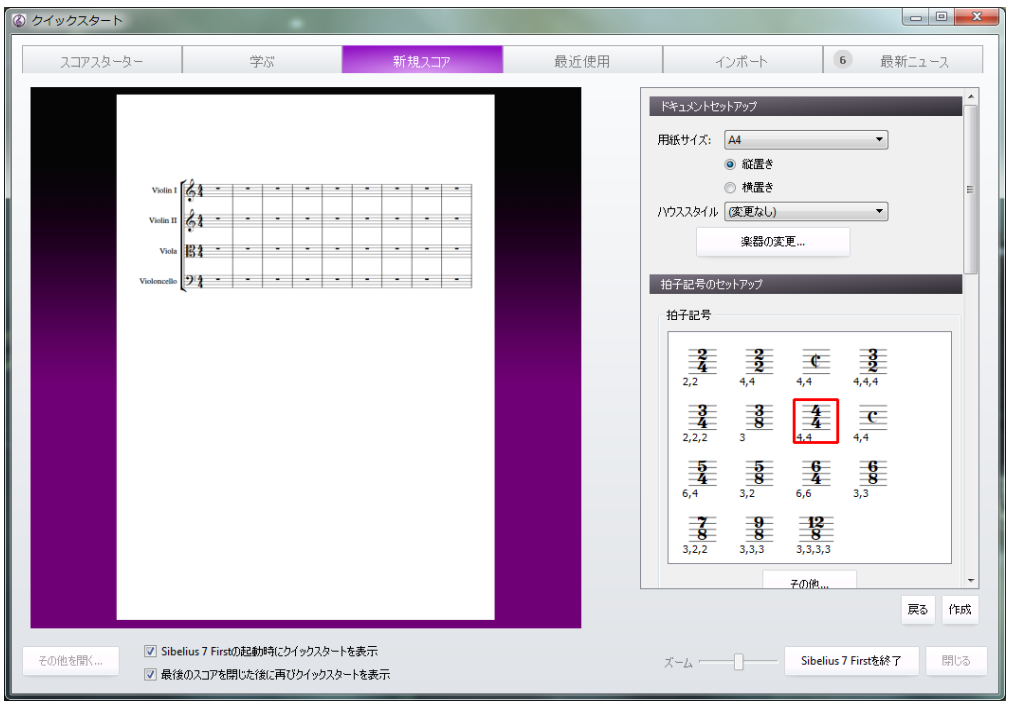
エルガーの弦楽四重奏ホ短調の抜粋を入力していきますので、バイオリンを 2 つ、ビオラとチェロをそれぞれ 1 つずつ追加する必要があります。左の小さな矢印をクリックして楽器ファミリーのリストから **[弦楽器]** グループを拡張し、［楽器］リストから **[バイオリン（ソロ）]** を選択し、**[スコアに追加]** を 2 回クリックして 2 つのソロバイオリン譜表を一番右の **[スコア内の譜表]** リストに追加します。同じように、**[ビオラ（ソロ）]** と **[チェロ（ソロ）]** を追加して、**[OK]** をクリックします。バイオリンの楽器名が正しくありませんが、これは後で修正できます。

（このダイアログは、**[ホーム]** ▸ **[楽器]** ▸ **[追加または削除]** を選択するか、シングルキーショートカットの **I** キーを押していつでも開くことができます。楽器を追加する他にも、スコアから楽器を削除したり、楽器の順番を変更することもできます。）

ドキュメントセットアップ

これでプレビューのページへ戻り、これから作成する楽譜の用紙の形とサイズを選択したり、ハウススタイルを設定したりできます。

ハウススタイルは、スコアの「見た目」や外観と考えるとよいでしょう。ハウススタイルは出版社によって異なります。Sibelius First では、ここにリストされたハウススタイルを使って楽譜の見た目を自由に変えることができます。



ここでは詳細を調整する必要はありませんので、リストで**[(変更なし)]**が選択されている状態のままにしておきます。画面上に表示されている、あらかじめ定義されているハウススタイルを見てみましょう。リストのハウススタイルをクリックすると、スコアのプレビュー表示が更新されます。Opus はこのハウススタイルで使用される音楽フォント（音符とその他の記号のデザイン）を、Times は主に使用されるテキストフォントを表しています。（他のハウススタイルも試してみるとよいでしょう。Reprise と Inkpen2 音楽フォントを使用しているハウススタイルは手書き風で、特にジャズに合います。また、Helsinki 音楽フォントを使用しているハウススタイルは、クラシックな浄書スタイルとなっています。）

拍子記号のセットアップ

設定オプションでは、拍子記号の選択とスコアのテンポの設定が行えます。

リストの**[4/4]**を選択してこの拍子記号を選択し、アウフタクト小節を作成するため**[開始する小節の長さ]**をオンにします。16 分音符分のアウフタクト用の小節が必要なので、メニューから 16 分音符を選択します。もちろん、スコアの作成中には、いつでもどこでも拍子やその他の設定を変更することができます。ここでは、先頭の拍子記号だけを設定します。

テンポ記号を追加する必要がありますので、テンポテキストに**[Allegro molto]**と入力し、**[メトロノーム記号]**をオンにして特定のテンポを追加します。テンポは 1 分あたり 4 分音符で 132 拍ですので、メニューから 4 分音符を選択して**[132]**を入力します。

調号のセットアップ

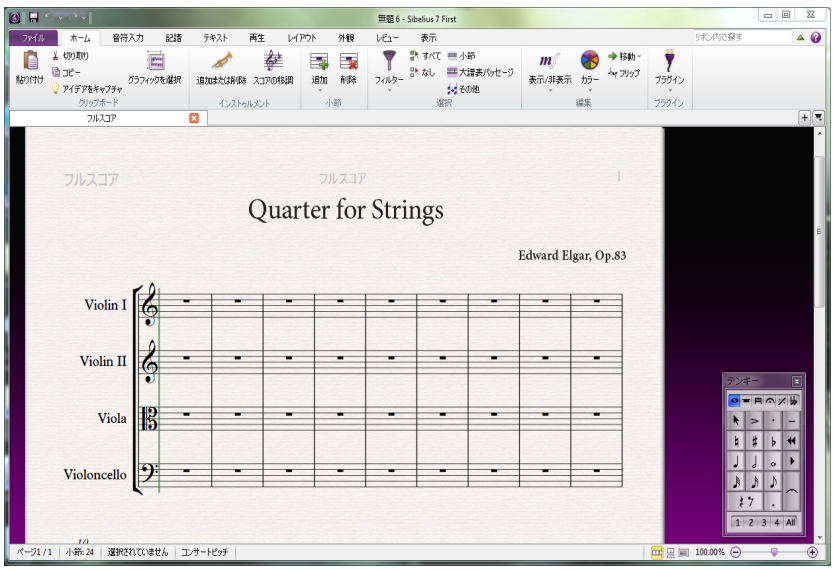
調号も選択できます。ドロップダウンメニューから［マイナーシャープキー］を選択し、リストから［Eマイナー］を選択します。

スコア情報のセットアップ

設定オプションの最後のセクションでは、スコアのタイトル、作曲者/作詞者の名前、著作権に関する情報などのテキストを入力します。これらのテキストは、楽譜の最初のページに追加されます。また、［タイトルページを作成］がオンの場合、別のタイトルページが作成され、タイトルと作曲者名がそこに追加されます。ここでは、このオプションをオフにしておきましょう。タイトルページの追加については後で説明します。

ここでは、［タイトル］に［QUARTET FOR STRINGS］、［作曲者］に［Edward Elgar、作品83］と入力し、［作成］をクリックします。（先に説明したとおり、ステップの途中で［作成］をクリックして、残りのステップを省略することもできます。）

すぐさまスコアが作成され、音符を入力するための準備が整いました。



最後に、1つ目のバイオリン譜表の楽器名［Violin］をダブルクリックして［Violin I］に、2つ目のバイオリン譜表も同じようにダブルクリックして［Violin II］に書き換えます。

スコアの保存

ここでスコアを必ず保存しましょう。次のセクションでは、スキャンした楽譜をこのスコアに入力していきます。［ファイル］▸［保存］（ショートカットはCtrl＋Sまたは⌘S）を選択し、適切な場所（デスクトップの［スコア］フォルダなど）を選択してスコアに［エルガー］などの名前を付けたら［保存］をクリックします。Windowsでは、［スコア］フォルダは［マイドキュメント］フォルダの中にあります。Macでは、［スコア］フォルダはログオンしているユーザーアカウントの［書類］フォルダにあります。

2.2 スキャニング

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア［**2 スキャニング**］（［**プロジェクト 2**］フォルダ内）を開いてください。

Sibelius First には PhotoScore Lite という無償のスキャニングプログラムが付属しています。PhotoScore Lite を使えば、印刷された楽譜をスキャンし、Sibelius に読み込むことができます。印刷された楽譜や PDF ファイルをお持ちの場合、これらをスキャンして Sibelius First に読み込ませ、独自に入力したスコアと同じように編集、移調、再生、パート譜の作成、印刷などを行うことができます。

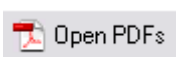
このセクションでは、弦楽四重奏のパート譜を使って、新規スコアから指揮者用のフルスコアを作成する方法について説明します。（このセクションでは PDF ファイルをスキャンしますので、コンピューターに接続されているスキャナをお持ちでない場合も、このセクションを通してお読みいただけます。）

PhotoScore Lite でのスキャニング

先へと進む前に、Sibelius First の DVD-ROM から PhotoScore Lite がインストールされていることを確認してください。

PhotoScore をインストールしたら、Sibelius First で［**ファイル**］▸［**新規**］を選択して［**クイックスタート**］を開きます。［**インポート**］タブへ切り替え、PhotoScore を起動します。

PhotoScore プログラムが起動したら、ツールバーの［**Open PDFs**］ボタンをクリックします。



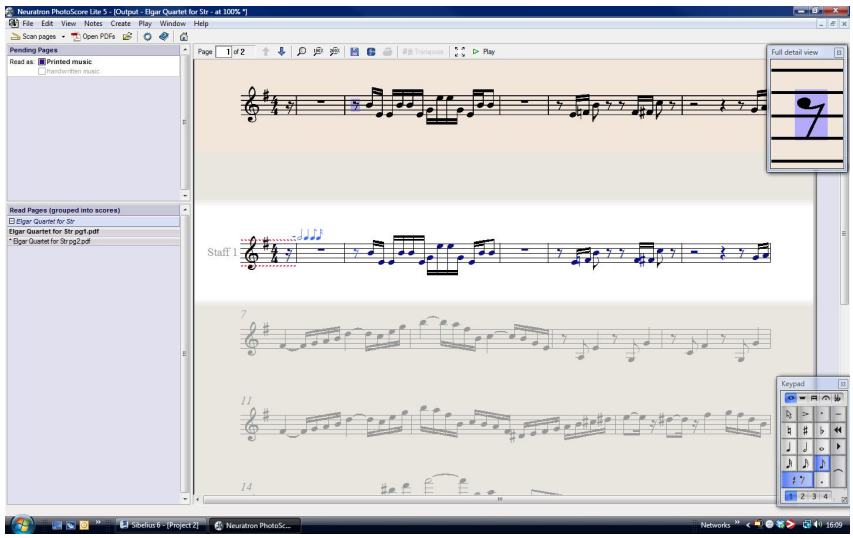
［**開く**］ダイアログが表示されます。［サンプルスコア］フォルダの［**プロジェクトファイル**］という名前のフォルダを探し、［**弦楽四重奏 - バイオリン I.pdf**］ファイルをダブルクリックして選択し、［**開く**］をクリックします。

PhotoScore が PDF ファイルをスキャンし処理する前に、解像度を dpi 単位で選択できます。解像度が高いほど詳細までスキャンすることができますが、処理にはより時間がかかります。解像度のテキストフィールドに［**600**］を入力し、［**OK**］をクリックします。

PhotoScore がファイルの処理を開始します。スキャンされたページは自動的に読み込まれ、音符とその他の記号が解読されます。

スキャンした楽譜の編集

PhotoScoreを使った楽譜の読み込みが完了すると、バイオリンパートの1ページ目の読み込み結果がメインウィンドウに表示されます。PhotoScore Liteによる読み取りに間違いがあれば、ここで修正することができます。



ウィンドウ上部（背景が淡黄色の部分）に、ページのスキャン画像が表示されます。全詳細表示画面の上部右隅にマウスで選択したスキャン画像の一部分を拡大表示します。

ウィンドウ下部の大きな部分（背景がグレーの部分）には、PhotoScore Liteがこのスキャン画像から読み取ったものが表示されます。すなわち、楽譜の最初のページに書いてあるものが表示されます。そのため、この部分にはまだPhotoScore Liteによる読み取り間違いが含まれている可能性があります。PhotoScore Liteの右下隅にはテンキーがあり、Sibelius Firstのテンキーとほぼ同様に機能しますが、PhotoScore Liteに必要でない機能が省かれています。

ウィンドウ上部のスキャン画像と下部の読み取り結果を見比べて、間違いを修正していきましょう。

パート譜の先頭のアウフタクト小節には、譜表の上と下に赤色の点線が付けられています。その後には、小節線の上に青色の音符が並んでおり、足りない拍または多すぎる拍の数を示しています。これは、PhotoScore Liteは拍子記号を4/4として読み込んでおり、この小節が16分音符分の長さしかないため、つじつまが合わないことを示しています。

出力ウィンドウの拍子記号を選択し（選択すると薄い青色に変化します）、**[Create]**▸**[Time Signature]**（ショートカットは**T**）を選択して、別の拍子記号を選択します。**[Other]**をクリックし、ドロップダウンリストから**[1/16]**を選択します。**[Invisible (for pick-up and irregular bars)]**がオンであることを確認します。こうすると、拍子記号がPhotoScoreに表示されません。

残りの小節が赤色に変化し、小節線の上に青色の音符が表示されます。これを修正するには、最初の完全小節の先頭に2つ目の拍子記号を追加します。

- もう一度**T**を押して拍子記号を作成し、**[4/4]**を選択して、**[Invisible (for pick-up and irregular bars)]**がオフになっていることを確認し、**[OK]**をクリックします。
- マウスポインタが青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 最初の完全小節の先頭をクリックして拍子記号を配置すると、赤色の点線が消えます。

音高などはSibelius Firstでも修正できますが、調号と拍子記号の修正はPhotoScore Liteで行う方がはるかに簡単ですので、スコアをSibelius Firstに送信する前にここで修正しておくことをおすすめします。

PhotoScoreの出力の編集について、詳しくは『リファレンスガイド』の🕮 **1.7 PhotoScore Lite**をご参照ください。

Sibelius Firstへの送信

スコアのすべてのページの編集が完了したら、スコアをSibelius Firstに送信します。**[File]** ▸ **[Send to]** ▸ **[Sibelius]**（ショートカットは**Ctrl**＋**D**または**⌘D**）を選択するか、出力ウィンドウ上部の**[Save score]**ボタンの隣にあるSibeliusアイコン（ ）をクリックします。

[PhotoScore/AudioScoreファイルを開く]ダイアログがSibelius Firstに表示されます。ここではオプションを操作しないで、**[OK]**をクリックしてファイルを開きます。バイオリンのパート譜がSibelius Firstの新規スコア内に表示されます。これを、このプロジェクトの先のセクションで準備したスコアに転送します。

- PhotoScore Lite からインポートしたバイオリンのパート譜の最初の小節をトリプルクリックし、この譜表のすべての音楽を選択します。
- **[ホーム]** ▸ **[クリップボード]** ▸ **[コピー]**（ショートカットは**Ctrl**＋**C**または**⌘C**）を選択し、楽譜をクリップボードにコピーします。
- **[表示]** ▸ **[ウィンドウ]** ▸ **[ウィンドウを切り替え]**メニューから以前に用意したスコアを選択します。
- ［Violin I］譜表のアウフタクト小節の16分休符を選択します。
- **[ホーム]** ▸ **[クリップボード]** ▸ **[貼り付け]**（ショートカットは**Ctrl**＋**V**または**⌘V**）を選択し、インポートされたスコアから準備したスコアへ楽譜を貼り付けます。

適切な臨時記号、スラー、タイをすべて含む楽譜がスコアに挿入されます。小節がスコアに自動追加され、コピーした楽譜に埋められます。PhotoScoreにより音符の上のスラーが短縮されていますが、これは後で修正しますので、今は気にしなくてもかまいません。

残りの楽譜の追加

それでは、PhotoScore Liteを使って、残りの弦楽器パートをスキャンして読み込み、Sibelius Firstに送信しましょう。**[弦楽四重奏 - バイオリン II.pdf]**、**[弦楽四重奏 - ビオラ.pdf]**、**[弦楽四重奏 - チェロ.pdf]**です。これらのPDFファイルは、先にスキャンしたパート譜と同じフォルダに保存されています。

［Violin I］譜表での操作と同じように、Sibelius Firstに送信したら、あらかじめ用意しておいたスコア内の適切な譜表にコピー＆ペーストします。

バージョンの保存

ここで**[レビュー]** ▸ **[バージョン]** ▸ **[新規バージョン]**を選択してください。バージョン名を付けるかどうか、また後で見分けやすいようコメントを追加するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。このバージョンに**[バージョン1 - スキャン済み入力]**などの分かりやすい名前を付けたら、**[OK]**をクリックします。

このバージョンは、後でスコアやバージョンをすばやく比較する方法を説明する際に使用します。

2.3 音部記号、調号、連音符

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［3音部記号、調号、連音符］**（**［プロジェクト2］**フォルダ内）を開いてください。

先のセクションで作成したスコアをアレンジしていきましょう。Sibelius Firstで**［クイックスタート］**を使ってスコアを準備する方法はすでに説明しましたが、スコアに音符を入力した後でも同じ情報を追加したり変更したりできます。このセクションでは、音部記号、調号、連音符（ここでは3連符）の変更を既存のスコアに追加する方法について説明します。

音部記号の変更

Sibelius Firstを使ってスコアを作成すると、各大譜表の最初に音部記号が自動的に追加されるため、音部記号を意識する必要はありません。しかし、状況によっては、音部記号の変更を譜表に追加したい場合があります。通常の音部記号で表示される譜表から上下に音符が大きく離れて記譜される場合などは、音部記号の変更を挿入すると、演奏者にとって読みやすくなります。音部記号の変更は、短いパッセージ（1小節程度）に使用する場合や、挿入位置以降ずっとその音符記号を使用する場合もあります。

チェロのパート譜の小節15を見ると、小節の後半部分に非常に高い音符が2つ（A♭とGの8分音符）あります。これらの音符の前に音部記号の変更を加えて、チェロの演奏者にとって読みやすい楽譜になるようにしましょう。

- A♭の8分音符を選択します。
- Gの8分音符のすぐ後を**Shift**＋クリックしてパッセージを選択します。
- **［記譜］**▸**［共通］**▸**［音部記号］**ギャラリー（ショートカットは**Q**）を開きます。
- リストの一番上の列のテノール記号をクリックします。
- 小さなテノール記号が追加されます。また、選択されているパッセージ以降は、元の音部記号に戻ります。音部記号のためのスペースを確保するために、音符が離れて配置されます。

小節26に、テノール記号への変更をもう1つ加えましょう。今度は、マウスを使って操作します。

- **Esc**キーを押し、何も選択されていない状態であることを確認します。
- **［音部記号］**ギャラリーを開きます。
- テノール記号を選択します。
- マウスポインタが紺青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- ［Violoncello］譜表の小節26の先頭の空白部分をクリックします。
- 小さなテノール記号が追加されますが、ここでは前の大譜表の小節25の最後に追加されます。各大譜表の先端にある標準の音部記号は、これ以降テノール記号に変わります。

同じように、小節28の最初の4分音符の後で譜表をバス記号に戻します。フルアレンジの印刷されたスコアを参考に、［Viola］譜表と［Violoncello］譜表の小節43-44に対して残りの音部記号の変更を行います。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **4.1 音部記号**をご参照ください。

調号

この抜粋の最後の方で調がAメジャーへ変わっているのにお気づきでしょう。音符のシャープの臨時記号が増えています。小節53に調号を追加し、転調を表示しましょう。

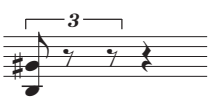
- **Esc**キーを押し、何も選択されていない状態であることを確認します。
- **［記譜］▸［共通］▸［調号］**ギャラリー（ショートカットは**K**）を開きます。
- リストから［Aメジャー］を選択します。
- マウスポインタが紺青色に変化し、オブジェクトを入力できる状態であることが示されます。
- 小節53の先頭をクリックします。
- 複縦線と3つのシャープによる調号が作成されます。新しい調号によって無用となったそれ以降の小節のシャープ臨時記号は自動的に削除されます。

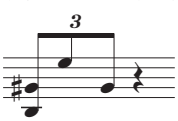
音部記号変更と調号は、選択、コピー、削除、移動することができます。音部記号変更または調号をドラッグすると、ドラッグ前とドラッグ後で同じ音で鳴るよう、移動に合わせて音符が上下にずれ、臨時記号が削除または追加されます。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **4.2 調号**をご参照ください。

3連符とその他の連音符

連音符とは、音符を一定の割合で分割して演奏することで、最も一般的なのは3連符です。スキャンしたパート譜にない3連符を、［Violin II］譜表の小節30に作成しましょう。

- 小節休符を選択し、**3**（テンキー）を押して8分音符を選択します。
- **8 G Shift-6**を入力します（テンキーではなくメインキーボードの**6**を使います）。G♯の8分音符と、その6度下に音符が入力され、二和音が作成されます。（譜表の下にBを入力し、**8**（テンキー）と**G**を入力してシャープを選択し、Bの上にGを追加することもできます。）
- **［音符入力］▸［音符入力］▸［3連符］**ボタン（ショートカットは**Ctrl**＋**3**または**⌘3**）の上部をクリックすると、3連符の括弧と番号が表示されます。

- 残りの2つの音符（第4間のEと別のG♯）を入力して、3連符を完成させます。

括弧が自動的に消え、この場合の標準的な記譜法で表記されます。

Sibelius Firstでは、連音符の括弧は、連音符内の音符が連桁でつながると自動的に非表示となります。また、連音符の括弧は（表示されている場合）「マグネティック」となり、連音符の音高が変わると音符にくっつきます。

この小節の残りの音符を追加しましょう。その他の種類の連音符を作成するには、**［音符入力］▸［音符入力］▸［3連符］**ボタンの下部をクリックしてリストから選択するか、**Ctrl**または**⌘**と任意の数字（5連符なら**5**、6連符なら**6**）をタイプします。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **3.9 3連符とその他の連音符**をご参照ください。

2.4 スコアへの記号の追加

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［4スコアへの記号の追加］**（**［プロジェクト2］**フォルダ内）を開いてください。

ここまでの過程で、空のスコアを作成し、PDFファイルからパート譜をスキャンしスコアへとコピーして、エルガーの「弦楽四重奏曲ホ短調、作品83、第三楽章アレグロモルト」からの抜粋を作成しました。ここに、強弱記号、テクニックテキスト、テンポ記号、スラー、アーティキュレーションなどの記号を追加して、精彩を加えていきましょう。

このセクションでは、さまざまな記号を追加する方法と、それらの記号にSibelius Firstの革新的な衝突防止システム「マグネティックレイアウト」がどのように作用するのかについて説明します。

発想記号テキスト

このチュートリアルの最初のプロジェクトでは、強弱記号、テクニック、テンポ記号の各テキストを追加する方法について説明しました。先に印刷したスコアを使って、強弱記号テキストを追加していきましょう。前回同様、以下のように行います。

- **［テキスト］▸［スタイル］▸［スタイル］**ギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［発想記号］**（ショートカットは**Ctrl**＋**E**または**⌘E**）を選択して強弱記号テキストを追加します。
- **Ctrl**または**⌘**キーを押さえてタイプすると、***f***、***p***、***sf***、***rfz***などの強弱記号の太字テキストが作成されます。**Ctrl**または**⌘**キーを押さえると、Sibelius Firstは強弱記号用の特殊な太字を使用します。
- 右クリック（Windows）または**Control**＋クリック（Mac）すると、使用されることの多い強弱記号の用語メニューが表示されます（espress.、dolce、poco、cresc.、dimなどはここに表示されます）。
- 用語メニューに表示されない用語（risoluto、rubato、brilliante、appassionatoなど）は、Sibelius First上で直接入力すると、標準の斜体テキストで表示されます。

強弱記号テキストをある譜表から別の譜表へとコピーすると、スコアのマークアップ処理が簡単になります。最初のプロジェクトで説明したコピー方法すべてを使用できます。最も簡単な方法は、コピーしたいテキストを選択してから、表示させたい場所を**Alt**＋クリックまたは⌥＋クリックする方法です。マウスポインタが置かれている位置ではなく、その標準設定位置（音符が選択されている状態でテキストオブジェクトを作成すると表示される場所）にテキストオブジェクトをコピーしたい場合は、**Shift**＋**Alt**＋クリックまたは⇧⌥＋クリックを使用します。

オブジェクトの複数コピー

スコア内のすべての譜表に同じ強弱記号がある場合（小節43の先頭のフォルテッシモ、小節53のスフォルツァンドなど）、強弱記号をすべての譜表にわたって複数コピーすることで作業時間を短縮できます。

- ［Violin I］譜表に（上記同様）発想記号テキストを使って強弱記号を作成します。
- 強弱記号を選択し、**［ホーム］▸［クリップボード］▸［コピー］**（ショートカットは**Ctrl**＋**C**または**⌘C**）を選択して強弱記号をクリップボードへコピーします。
- **Esc**を押して選択を解除します。
- 残りの3つの譜表の同じ小節の周辺にパッセージを選択します。
- **［ホーム］▸［クリップボード］▸［貼り付け］**（ショートカットは**Ctrl**＋**V**または**⌘V**）を選択し、パッセージの先頭へ譜表ごとに貼り付けます。

いくつかのオブジェクトを複数コピーし、いくつかの譜表にわたって同時に貼り付けることもできます。こうすることにより、スコアへの記号の追加の作業時間を大幅に短縮できます。

テクニックテキスト

強弱記号テキストをすべて追加できたら、テクニックテキストを追加していきましょう。

- **[テキスト]**▸**[スタイル]**▸**[スタイル]** ギャラリーの **[共通]** カテゴリーから **[テクニック]**（ショートカットは **Ctrl**＋**T** または ⌘**T**）を選択してテクニックの指示を追加します。
- 右クリック（Windows）または **Control**- クリック（Mac）すると、使用されることの多いテクニックテキストの用語メニューが表示されます（senza sord などはここに表示されます）。
- 用語メニューに表示されない用語（colla parte や ten. など）は、Sibelius First 上で直接入力すると、標準の斜体テキストで表示されます。

テンポテキスト

テクニックテキストをスコアにすべて追加できたら、テンポ記号を追加しましょう。その前に、譜表テキストと大譜表テキストの違いを理解しておく必要があります。

発想記号テキストとテクニックテキストのスタイルは、どちらも譜表テキストです。譜表テキストは単一の譜表にのみ適用されます。同様の効果をスコア内の他の楽器にも適用させたい場合、そのテキストを別の譜表にも複製する必要があります。

それに対して、大譜表テキストはスコア内のすべての譜表に適用されます。テンポテキストをスコアに追加すると、大譜表の上に 1 回だけ表記されます（楽器がたくさん含まれているスコアでは、スコア内のずっと下の別の譜表の上に表示されることもあります）が、楽器のパート譜それぞれに適用されます。

それでは、テンポ記号を追加しましょう。まず、［A tempo］を小節 7 に追加します。

- ［Violin I］譜表の小節 7 を選択します。
- **[テキスト]**▸**[スタイル]**▸**[スタイル]** ギャラリーの **[共通]** カテゴリーから **[テンポ]**（ショートカットは **Ctrl**＋**Alt**＋**T** または ⌥⌘**T**）を選択してテンポ記号を追加します。
- 右クリック（Windows）または **Control** ＋クリック（Mac）すると、テンポ記号の用語メニューが表示されます。
- ［**A tempo**］をクリックし、スコアに追加します。
- **Esc** キーを 2 回押し、編集を終了してテキストの選択を解除します。

同様に、［**A tempo**］記号を小節 20、56、60 に追加します。

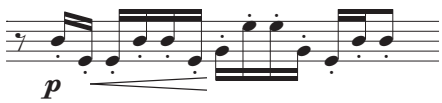
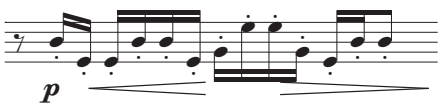
ヘアピンと他のライン

印刷されたスコアにあるもので、まだスコアに追加していない強弱記号とテンポ記号があります。ヘアピン（クレッシェンドとディミヌエンド）、スラー、リタルダンドを示すさまざまなラインです。

ラインを追加するには、スコアの音符または他のオブジェクトを選択してラインの開始位置を指定し、**L** をタイプして **[記譜]**▸**[ライン]**▸**[ライン]** ギャラリーを開きます。

記号の追加を行っている抜粋に、ヘアピンとスラーを作成していきましょう。それぞれショートカットを使用できます。クレッシェンドのヘアピンには **H**、ディミヌエンドのヘアピンには **Shift**＋**H**、スラーには **S** を使用します。

［Violin I］譜表の抜粋の2番目の完全小節にクレッシェンドのヘアピンを追加しましょう。

- ［Violin I］譜表の（アウフタクト小節の後の）2番目の小節の2番目の音符を選択します。
- **H**キーを押して、音符の下にクレッシェンドのヘアピンを追加します。
- **スペース**キーを4回押し、小節の中央のEの16分音符までヘアピンを伸ばします（一度押すごとに1音符分だけヘアピンが伸びます）。伸ばしすぎた場合は、**Shift**＋**スペース**を押すと縮みます。

- ここで、同じ小節の9番目の音符（とEの16分音符）を選択し、小節の最後の音符を**Shift**＋クリックして、選択範囲を小節の最後まで伸ばします。
- **Shift**-**H**をタイプしてディミヌエンドを追加します。ディミヌエンドは選択した範囲と同じ長さで作成されます。こうすることで作業時間を短縮できます。

スコアの残りの部分にもヘアピンを追加していきましょう。強弱記号で行った方法で、ヘアピンを複数の譜表へ複数コピーすることができます。

不足しているテンポラインを追加しましょう。

- ［Violin I］譜表の小節19を、小節の空白部分をクリックして選択します。
- **L**を押して**［ライン］**ギャラリーを開きます。
- **［リタルダンド/アッチェレランド］**カテゴリーから**［poco rit.（テキストのみ）］**を選択します（このラインではテキストの後に長さを示す点線が表示されません）。

同じように［**poco rit.**］を小節59に加えますが、今回は、小節中央あたりの8分音符を選択し、**L**を押します。

最後に［**rit.**］ラインを抜粋の最後の小節に追加します。前回同様、テキストの後に長さを示す点線が表示されないよう**［リタルダンド/アッチェレランド］**カテゴリーの**［rit.（テキストのみ）］**を選択します。

ラインについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **4.5ライン**をご参照ください。

スラー

スラーとフレーズマークは、ヘアピンと同じように特殊な種類のラインです。頻繁に使用されるため、覚えやすいショートカット**S**が用意されています。Sibelius Firstでは、これらを同じ様に扱い、すべて「スラー」と呼びます。フレーズマークは、実際には大きなスラーとして描かれるためです。

弦楽四重奏のパート譜のPDFファイルをスキャンする際、PhotoScore Liteではパート譜のスラーが認識されません（フルバージョンのPhotoScore Ultimateを使用すると認識されます）。そのため、認識されなかったスラーを追加する必要があります。

スラーを配置するには、スラーを開始させたい音符を選択し、**S**を押します。間違った位置にスラーを作成してしまった場合は、スラーを選択して**Delete**キーを押し、スラーを開始させたい音符または休符を選択してから**S**を押します。ヘアピンを伸ばすときと同じように、**スペース**キーを押すとスラーが伸び（一度押すごとに1音符分だけ伸びます）、**Shift**＋**スペース**キーを押すと縮みます。

スラーのどちらかの端にある音符を選択して、上下に移動させてみてください。スラーは「磁石」のように音符の片方の端にくっついてくることに注目してください（これをマグネティックスラーと呼びます）。スラーを選択すると、6つのボックスからなる細い枠がスラーの周りに表示されます。ハンドルと呼ばれるこれらのボックスを使えば、スラーの形状を詳細にコントロールすることができます。ドラッグすると、特定の方向に向かって形状を変化させることができます。

タイとスラーを混同しないよう十分に注意しましょう。タイはスコア内の音符と音符の間に置かれ、テンキーを使って追加します（下を参照）。また、タイの操作はスラーの操作とは大きく異なります。

スラーについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **4.7 スラー**をご参照ください。

アーティキュレーション

このチュートリアルの最初のプロジェクトでは、スタッカート、テヌート、アクセント、タイなどのアーティキュレーションをテンキーを使って音符に追加する方法を説明しました。**F10**を押す（またはテンキーの**［アーティキュレーション］**タブをクリック）すると、テンキーの第4レイアウトのアーティキュレーションが表示されます。ここでは運弓記号、マルカート記号、フェルマータが追加できます。

複数の音符やパッセージにアーティキュレーションを追加することができます。こうすることで、記号を記入する作業時間を大幅に短縮できます。たとえば、［Violin I］と［Violin II］譜表の小節内のすべての音符はスタッカートで演奏されます。

- ［Violin I］譜表の小節3の空白部分をクリックし、［Violin II］譜表の小節3を**Shift**＋クリックしてパッセージを選択します。
- **F7**を押し、テンキーの第1レイアウトが表示されていることを確認します。
- テンキーの一番上の列の**［.］**（スタッカートのドット）に対応するキーを押します。これで、両譜表の小節内のすべての音符にスタッカートが追加されます。

残りのアーティキュレーションを追加していきましょう。追加する必要のあるアーティキュレーションのほとんどはテンキーの第1レイアウトに表示されていますが、以下の記号はテンキーの第4レイアウトを使用する必要があります。

- ［Violin I］譜表の小節8および38のマルカート
- ［Violin II］譜表の小節20、22、29、40のマルカート
- ［Viola］譜表の小節9、10、21、23、40、49-52のマルカート
- ［Violoncello］譜表の小節49-52のマルカート

Sibelius Firstでは、小節48と49にスタッカーティシモ記号を追加することはできません（Sibeliusのフルバージョンには、これらの記号を含む多くのアーティキュレーション記号があります）。

アーティキュレーションについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **4.17 アーティキュレーション**をご参照ください。

2.5 レイアウトとフォーマット

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［5 レイアウトとフォーマット］**（**［プロジェクト2］**フォルダ内）を開いてください。

スコアに音符を入力し、記号を記入できたら、楽譜が問題なく表示されるよう調整します。Sibelius First では、楽譜、楽器、テキスト、その他のオブジェクトが追加されるとスコアが自動調整されるため、スコアがほぼ完成の状態になってから行うとよいでしょう。さもないと、せっかくの調整をやり直すことになります。

Sibelius に搭載されている衝突防止および検出機能「マグネティックレイアウト」の効果については少し説明しました。楽譜の作成と編集中にスコアを自動調整してくれる機能です。Sibelius First は楽譜をフォーマットするための様々なツールと機能を持っています（フォーマットとは、ページに楽譜をレイアウトする処理です）。

このセクションでは、ブレークを作成したり、ページの向き、譜表サイズ、譜表の間隔を変更したり、タイトルページを作成し、美しく洗練されたスコアを作成する方法について説明します。

マグネティックレイアウト

まず、音符の重なりや分かりにくさを解消するために、どのようにマグネティックレイアウトが機能し、譜表上のオブジェクトの位置が再計算されるのかを見てみましょう。どの様に機能するか見てみましょう。

- ［Violoncello］譜表の最初の完全小節の最後にある F♯の16分音符を選択します。
- ↓を使って音高を下げます。
- 音高を下げると、譜表下の強弱記号が下に移動し、音符との衝突が避けられます。

強弱記号全体がまとめて大譜表の下に移動し、水平方向の相対位置が維持されます。衝突を防ぐのに必要であれば、Sibelius First がこれらをまとめて移動します。

これは、すべてのテキストオブジェクト、記号、ライン、その他のオブジェクト（コード記号など）でも同様です。

譜表上のオブジェクトをドラッグすると、オブジェクトが重なり合わないよう、使用可能な空きスペースが利用されます。この場合、重要なオブジェクト（音符、臨時記号、休符、アーティキュレーションなど）は、あまり重要でないオブジェクト（テキスト、ライン、記号など）に優先して配置されます。重要なオブジェクトの位置が維持され、譜表により近い部分に表示されます。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **7.4 マグネティックレイアウト**をご参照ください。

それでは Sibelius First で使用できるフォーマットのコントロールを見てみましょう。

ブレーク

作曲、アレンジ、楽譜の複写など、いずれの作業においても、すでに書き終えた楽譜に小節を付け加えるなど、後から変更を加えたい場合があります。Sibelius First では、このような場合にも、楽譜が即座に再フォーマットされます。

自動再フォーマットの利点は、大譜表やページを新たに追加する必要がないことです。変更に合わせて、自動的に再フォーマットが行われます。

しかし、場合によっては、特定の位置で大譜表やページが終わるよう調整する必要があることもあります。たとえば、エルガーの弦楽四重奏の抜粋の小節7にある［**A tempo**］は、そこに改行が追加されているため、新しい大譜表の先頭に記入されています。

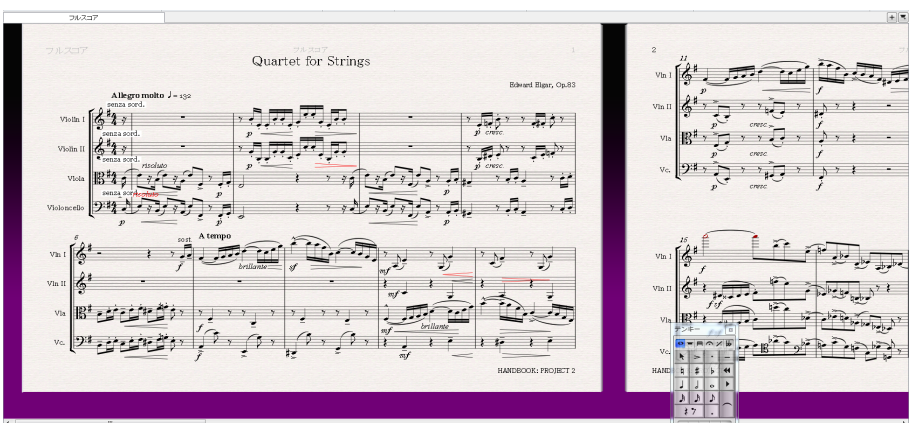
改行を挿入するには、小節線を選択して［**レイアウト**］▸［**ブレーク**］▸［**改行**］を選択するか、ショートカットの**Return**キー（メインキーボード）を押します。ある大譜表が混み合っているように感じられたら、このようにして間隔を空けます。逆に、前の大譜表に比べて間隔が空きすぎているように感じられたら、前の大譜表に改行を挿入して、前の大譜表の小節の1つを次の大譜表に移動させます。スコアに改行を挿入してみてください。

Sibelius Firstでは改ページを挿入することもできます。通常、改ページは、セクションの最後（複数の楽章を含む楽曲など）や、次のセクションの先頭に新しいタイトルがある場合にのみ使用されます。改ページについて、および、パッセージが再フォーマットされないよう「ロック」する方法について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **7.7 レイアウトとフォーマット**をご参照ください。パート譜では、改行や改ページを便利な位置に自動挿入させることもできます（『リファレンスガイド』の🕮 **7.5 自動改行**）。

ドキュメントセットアップ

自動再フォーマットのもうひとつの利点は、すでに入力した楽譜に対して、用紙の変更などの大きな変更を加えることができることです。加えられた変更に合わせて、スコア全体のレイアウトが即時に更新されます。

この種類の再フォーマットでしばしば行われる例として、スコアの用紙の向きを縦置きから横置きに変更してみましょう。［**レイアウト**］▸［**ドキュメントセットアップ**］▸［**向き**］▸［**横置き**］を選択します。スコアの表示はこのようになります。



［**レイアウト**］▸［**ドキュメントセットアップ**］▸［**譜表サイズ**］を［4mm］に変更してみましょう。楽譜がより少ないページ数に収まるようになります。

別のプリセットの用紙サイズと余白はリボン上の［**レイアウト**］▸［**ドキュメントセットアップ**］グループから選択できます。独自の用紙サイズと余白を設定したい場合は、右に表示されている［**レイアウト**］▸［**ドキュメントセットアップ**］のダイアログランチャーボタンをクリックして［**ドキュメントセットアップ**］ダイアログを開きます。

これらの設定について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **7.1 ドキュメントセットアップ**をご参照ください。

譜表の間隔

スコアに音楽を追加していくと、ページが混み合ってきますので、音符やその他のオブジェクトがうまく配置されるよう、譜表の間隔を広げる必要があります。譜表の間隔は、いろいろな方法で広げることができます。それではスコアで試してみましょう。

譜表と大譜表の標準設定の間隔は、**［レイアウト］▸［譜表の間隔］**グループの**［スペース、譜表間］**の設定で操作できます。この設定では、スコアの外観を1回の操作で変更できます。個々の譜表の調整を行う前に、この値を調整してみてください。

場合によっては、大譜表内の譜表の間隔を広げることで、高音と低音の音符の衝突を避けることができます。**［レイアウト］▸［譜表の間隔］▸［最適化］**を選択すると、設定されている間隔に合わせて、譜表と大譜表の間隔が自動的に最適化されます。譜表上のオブジェクトが別の譜表のオブジェクトと衝突しない程度の最小間隔が計算され、譜表が移動されます。それでは、スコアの最初のページで試してみましょう。

- ［Violin I］譜表のアウフタクト小節をクリックして選択します。
- 最初のページの一番下の大譜表にある［Violoncello］譜表を**Shift**＋クリックします。
- **［レイアウト］▸［譜表の間隔］▸［最適化］**を選択します。
- ある譜表のオブジェクトが他の譜表のオブジェクトと衝突しないよう、最良の方法が試みられます。

最終手段として、大譜表内の譜表をドラッグして、大譜表内の衝突を手動で解決しなければならない場合もあります。［Violin II］譜表の空白部分をクリックして小節を選択してから上下にドラッグするか、ショートカット**Alt**＋**↑/↓**または**⌥↑/↓**を使用します（大きなステップで移動させるには**Ctrl**または**⌘**を押したまま操作します）。譜表の動きに合わせて、楽譜が再フォーマットされます。

この方法で、スコア全体、1つの大譜表、選択したその他のパッセージの間隔が変更できます。間違えた場合は、**［レイアウト］▸［譜表の間隔］▸［譜表上部スペースをリセット］/［譜表下部スペースをリセット］**オプションを使えば標準設定の間隔にリセットできます。

これらについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **7.3 譜表の間隔**をご参照ください。

タイトルページの作成

［クイックスタート］の**［新規スコア］**タブの設定オプションの**［タイトルページを作成］**をオンにすると、スコアを作成する際（このプロジェクトの最初の章で行ったように）にタイトルページを作成できます。

タイトルページはいつでも作成できます。それでは作成してみましょう。**［レイアウト］▸［ドキュメントセットアップ］▸［タイトルページ］**を選択すると、スコアの情報を示すダイアログが表示されます。（新規スコア設定オプションにタイトルと作曲者名を追加しているため、これらは自動的に入力され、そのままタイトルページに追加できます。）

［パート名を含める］オプションをオンにしてページの先頭に［フルスコア］と表示されるようにしてから**［OK］**をクリックすると、タイトル名と作曲者名が追加されたタイトルページが作成されます。

タイトルページの削除

［レイアウト］▸［ドキュメントセットアップ］▸［タイトルページ］を選択するか、新規スコア設定オプションの1つを追加してタイトルページを作成すると、スコアの先頭に特殊なレイアウト記号（左図）が表示されます。

作成したタイトルページを削除するには、このレイアウト記号をクリックして選択し、**Delete**キーを押します。

Sibelius Firstの他の編集機能と同じく、タイトルページに対して行なった変更はすべて元に戻すことができます。**［元に戻す］**をクリックするか、**［編集］▸［元に戻す］**（Mac）を選択すると、たった今削除したタイトルページが復元されます。

2.6 エクスポート

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア **[6エクスポート]**（**[プロジェクト2]** フォルダ内）を開いてください。

スコアのファイル、ページ、ページの一部はPDFファイルとしてエクスポートできます。これらのファイルとSibeliusのファイルの両方をEメールに添付してSibelius First内から直接送信することもできます。

Sibelius Firstでは、スコアの再生のビデオファイルとオーディオファイルが作成でき、これらはYouTube、Facebook、SoundCloudへ直接公開できます。『リファレンスガイド』の 🕮 **1.11 ビデオファイルのエクスポート**、**1.10 オーディオファイルのエクスポート**、**1.3 ウェブでの共有**をご参照ください。

スコアをMusicXMLファイルとして共有し、他の楽譜作成プログラムで開くこともできます。Sibelius Firstからグラフィックを直接コピー＆ペーストすることもできます。さらに、他の人が無償のScorchプラグインを使って楽譜を閲覧、再生、移調、楽器変更、印刷できるようインターネットで楽譜を公開することもできます。

iPadをお持ちの場合は、Avid Scorchを使うとスコアのコレクションを持ち歩いたり新しいスコアを見つけたりできます(『リファレンスガイド』の 🕮 **1.16 Avid Scorchへのエクスポート**)。

このセクションでは、Sibelius Firstから別のプログラム（Microsoft Wordなど）へのグラフィックのコピー方法、スコアのビデオのエクスポート方法、誰にでも表示と再生ができるScoreExchange.comへの楽譜の公開方法を説明します。

他のプログラムへのグラフィックのコピー

それでは、単純なコピー＆ペーストを使って楽譜の一部をグラフィックとしてエクスポートする方法を学びましょう。

- 楽譜の最初の大譜表全体が含まれるようパッセージを選択します。
- **[ホーム]**▸**[クリップボード]**▸**[グラフィックを選択]**（ショートカットは **Alt** ＋ **G** または **⌘G**）を選択します。楽譜の周りに、ハンドルの付いた点線の枠が表示されます。
- 必要に応じて、枠端のハンドルをドラッグして選択範囲を調節します。
- **[ホーム]**▸**[クリップボード]**▸**[コピー]**（ショートカットは **Ctrl** ＋ **C** または **⌘C**）を選択し、枠内の内容をクリップボードにコピーします。
- **Esc** キーを押して選択を解除します。
- ペースト先のアプリケーションソフト（Microsoft Wordなど）を開きます。
- **[ホーム]**▸**[クリップボード]**▸**[貼り付け]**（ショートカットは **Ctrl** ＋ **V** または **⌘V**）を選択します。

これで完了です。詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **1.12 グラフィックのエクスポート**をご参照ください。

スコアのビデオをエクスポートする

Sibelius First を持っていない人に楽譜の表示、再生、さらにはリハーサルを行って欲しい場合は、スコアのビデオを送るよりも良い方法があるでしょうか？これらのビデオは Sibelius First から Facebook または YouTube へ直接公開できます（『リファレンスガイド』の 🕮 **1.3 ウェブでの共有**参照）。

スコアが完成したら、保存されていることを確認します。それではビデオをエクスポートしてみましょう。

- **［ファイル］**タブをクリックし、**［エクスポート］**を選択し、**［ビデオ］**を選択してください。
- **［設定］**リストで**［Sibelius 7 First Sounds］**再生設定が選択されていることを確認します。
- ドロップダウンリストから解像度を選択します（通常は**［標準（480p）］**を推奨しますが、必要に応じて HD ビデオをエクスポートすることもできます）。
- ファイルに名前を付け、コンピューターのどこに保存するか（デスクトップなど）を選択します。
- **［エクスポート］**ボタンをクリックしてビデオファイルを保存します。

スコアの長さと選択した解像度によって、保存には数分かかる場合があります。ファイルをエクスポートしたら、デスクトップ上のファイルをダブルクリックしてお気に入りのビデオプレーヤーでご覧ください。詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **1.11 ビデオファイルのエクスポート**をご参照ください。

オンラインでビデオを公開したい場合は、**［ファイル］▸［共有］▸［YouTube へ公開］**または**［ファイル］▸［共有］▸［Facebook へ公開］**を選択してビデオを作成するためのオプションのページを表示し、ご使用のアカウントへ直接アップロードします。

ScoreExchange.com へ楽譜を公開する

楽譜をオンラインで公開してみましょう。

- **［ファイル］▸［共有］▸［Score Exchange へ公開］**を選択します。
- Score Exchange のアカウントの詳細を入力し、**［サインイン］**をクリックするか、またはアカウントを作成します（下記参照）。
- **［公開］**ボタンをクリックします。
- ブラウザにウェブページが表示され、作品についての追加情報の入力と、価格を設定するか無償で公開するかの選択ができます。
- 24 時間以内に ScoreExchange.com のサイト上でスコアが全世界に対して公開されます。

Score Exchange 上にアカウントをまだ作成していない場合は、**［登録］**ボタンをクリックして新しいアカウントを作成してください。

ScoreExchange.com では、ご自身の楽譜の販売、新しい楽譜の検索、楽譜のアップロード、ライブレコーディングの試聴が行えます。詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **1.3 ウェブでの共有**をご参照ください。

3 プロジェクト3

3.1 キーボードの楽譜

このプロジェクトでは、ジャズや商業音楽の作曲に便利な、いくつかの重要な機能について説明します。複雑なキーボードの楽譜の入力、ギター用の記譜、［アイデア］パネルを使った楽譜の断片の保存と再利用、テキストとMIDI入力を使ったコード記号の作成、リピート構造の使用、オーディオレコーディングやビデオのサウンドをよりリアルにする方法などについて説明します。

このプロジェクトの最初のセクションは、このチュートリアルのプロジェクト1で説明した音符の入力方法をもとに、Sibelius Firstのフレキシタイム入力とMIDIキーボードを使って複雑なキーボードの楽譜を入力する方法を説明します。

印刷されたスコア

はじめに、**［ファイル］▸［開く］**（ショートカットは**Ctrl**＋**O**または**⌘O**）を選択し、［サンプルスコア］フォルダ内にある**［プロジェクトファイル］**フォルダの**［プロジェクト3］**という名前のフォルダを開きます。**［完成したアレンジ］**という名前のスコアを開きます。「Urbane Filigree」と名前の付いたファンクチューンの完全なアレンジが表示されます。

このプロジェクトを通してこのアレンジのプリントアウトが必要となりますので、**［ファイル］▸［印刷］**（ショートカットは**Ctrl**＋**P**または**⌘P**）を選択し、**［印刷］**ボタンをクリックしてスコアを印刷します。

「Urbane Filigree」が印刷されます。印刷されたスコアは、これ以降のアレンジの編集で使用しますので、そのままお手元に置いておいてください。

次に、このプロジェクトを続けるために、**［ファイル］▸［開く］**を選択し、**［1 キーボードの楽譜］**プロジェクトを選択し、**［開く］**をクリックしてください。［Electric Stage Piano］と［Electric Guitar］のパートに何も入力されていないアレンジが表示されます。

MIDIキーボードを使う

フレキシタイムを使用するには、ご使用のコンピューターに接続されているMIDIデバイスが必要です。Sibelius Firstでの入力と再生を設定するには、**［ファイル］▸［環境設定］**を選択し、**［入力デバイス］**ページを開きます。

このセクションでは、MIDIキーボードを使用します。MIDIデバイスの入力と再生の設定方法について、詳しくは『リファレンスガイド』の🕮 **3.12 入力デバイス**をご参照ください。

フレキシタイムのオプション

ここでは、フレキシタイム入力を使用して、MIDIキーボードを演奏しながら複雑な楽譜をSibelius Firstに入力する方法を説明します。Sibelius Firstにリアルタイムで音楽を録音したくない場合は、このチュートリアルのプロジェクト1で説明したでステップタイム入力を使用して未入力の楽譜を入力することもできます。MIDIキーボードをお持ちでない場合、**3.2 ギターの楽譜**の71ページに進んでください。

［Electric Stage Piano］パート譜の欠けている部分をレコーディングしていきましょう。最良の結果が得られるよう、右に表示されている**［音符入力］▸［フレキシタイム］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**O**または⇧**⌘O**）のダイアログランチャーボタンクリックして**［フレキシタイムのオプション］**を開きます。

［テンポの柔軟性］ドロップダウンリストから**［なし（ルバートなし）］**を選択し、**［複数の声部に入力］**チェックボックスをオフにします。**［OK］**をクリックしてスコアに戻ります。レコーディングしやすいようテンポを落としたい場合は、［トランスポート］パネルのテンポスライダーを左端へドラッグします。

両手によるフレキシタイム入力

［Electric Stage Piano］譜表の楽譜がはっきりと読める位置にプリントアウトを置きます（プリントアウトの譜表の上のコード記号の後に続けて独自のパートを即興で演奏してもかまいません）。その後、スコア内の隣り合う2つの［Electric Stage Piano］譜表の最初の小節を選択します。上の譜表をクリックしてから、下の譜表を**Shift**＋クリックして両方の譜表を選択します。こうして、どこからどの楽器をレコーディングするのかを指定します。次のように行います。

- ［トランスポート］パネルの赤い**［録音］**ボタンをクリックするか、**［音符入力］**▸**［フレキシタイム］**▸**［レコード］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**F**または⇧⌘**F**）を選択します。
- フレキシタイムでは、標準設定では少なくとも1小節分のカウントインが挿入されます。ですので、この場合は1小節と3拍分のカウントインがアウフタクト小節の前に挿入されます。
- カウントが終わったら、クリックのスピードに合わせて次の2、3小節分をスムーズに弾いてみましょう。演奏するに従い、画面に音符が表示されていきます。
- 上の譜表の小節9に到達したら、右手の演奏を止めます。
- 小節17で、［Electric Stage Piano］パート譜の右手の演奏を再開します。
- 録音を停止するには、［トランスポート］パネルの四角い**［停止］**ボタンをクリックするか、**スペース**キーまたは**Esc**キーを押します。

フレキシタイム入力のレコーディングについて詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **3.13 フレキシタイム**をご参照ください。

パフォーマンスの再表記

フレキシタイムの記譜が複雑すぎる場合は、**［音符入力］**▸**［フレキシタイム］**▸**［パフォーマンスの再記譜］**を選択すると不要な休符、重複した音符、間違った音価を整理できます。**プロジェクト1**で行ったように、両方の譜表でパッセージを選択してプラグインを実行することにより、フレキシタイム採譜を再計算し、リズムと見た目においてより簡単なバージョンを作成することができます。

間違いがあったら、これまでに学んできた編集テクニックを使って、音価や音高を修正しましょう。

3.2 ギターの楽譜

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［2ギターの楽譜］**（**［プロジェクト3］**フォルダ内）を開いてください。

Sibelius First には、ギターの記譜が簡単に行えるようデザインされた数多くのツールと機能が搭載されています。そのひとつが、ギターのタブ譜を使用した記譜機能です。Sibelius First は楽譜を譜表譜またはタブ譜として記譜します。音符からタブ譜を変換（またはその逆）するためには、特に何もする必要はありません。Sibelius First はタブ譜を、1つの譜表の異なる表示方法として扱っているだけなのです。

Sibelius First には、タブ譜を使った記譜が可能な種類の弦楽器すべての情報が含まれており、一般的なギター、4/5/6弦のベースギター、リュート、バスバラライカなど、楽器の種類に関わらず、記譜する楽器の正確な弦の数と適切なチューニングが表示されます。したがって、譜表譜でできるほとんどのことはタブ譜でも同様に行えます。たとえばタブ譜を再生したり、移調したり、（タブ譜または譜表譜に）コピーしたりする、といったことが可能です。

このセクションでは、標準的な記譜譜表として楽譜を Sibelius First に記録してギタータブ譜へと変更したり、ギタータブを入力する方法について説明します。

（MIDI ギターをお持ちの場合、Sibelius First への音符の入力に MIDI ギターを使用して、このセクションを進めてください。その他の場合、MIDI キーボードか、**プロジェクト1**で学んだアルファベット入力方法を使用することができます。）

MIDI ギターを使用する

このセクションで使用するコンピューターに接続されている MIDI ギター（またはディバイデッド・ピックアップとギターMIDI インターフェイス搭載のギター）をお持ちの場合、Sibelius First での入力と再生を設定する必要があります。これを行うには、**［ファイル］**▸**［環境設定］**を選択し、**［入力デバイス］**ページに進みます。

ページ最上部の表からご使用のデバイスの名前を探し、**［使用］**チェックボックスがオンになっていることを確認します。ドロップダウンリストメニューをクリックして**［タイプ］**値を変更し、（**［キーボード］**ではなく）**［ギター］**を選択してから、弦の数を選択する必要があります。

MID I ギターの入力と再生を設定する方法について詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **3.12 入力デバイス**をご参照ください。

ギターパートの入力

印刷したスコアを参照しながら、楽譜を入力していきます。

ご使用のコンピューターに接続されている MIDI デバイスをお持ちの場合、フレキシタイム入力を使って小節20までのギターパートを録音します。譜表の最初の小節を選択し、**［音符入力］**▸**［フレキシタイム］**▸**［レコード］**を選択するか、［トランスポート］パネルの赤色の**［録音］**ボタンをクリックします。

その他の場合、任意の音符入力の方法（マウス入力、アルファベット入力、ステップタイム入力、［キーボード］パネル、［フレットボード］パネル）を使用して、小節20までの楽譜を入力します。これらは、オンとオフを切り換える必要のある記譜モードではありません。入力方法はいつでも変更することができます。

ギターのパートが入力できたら、ミュートされている符頭（クロス符頭）を使用するために音符と和音を変更する必要があります。これを行うには、音符または和音（和音をダブルクリックするとその和音に含まれるすべての音符が選択できます）を選択し、**[記譜]**▸**[符頭]**▸**[タイプ]** ボタンの上部をクリックして符頭をクロス符頭に変更します。符頭の変更については、このプロジェクトでさらに説明しています。また、『リファレンスガイド』の🕮 **4.9 符頭**をご参照ください。

タブ譜への変換

音符譜表をギタータブ譜表の上にコピーすると、Sibelius First はこれを自動的にタブ譜に変換します。

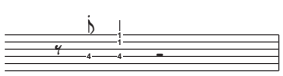
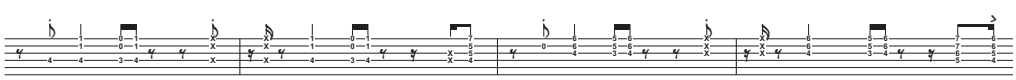
- **[ホーム]**▸**[楽器]**▸**[追加または削除]**（ショートカットは **I**）を選択します。
- **[エレキギター、スタンダードチューニング [タブ]]** を選択し、**[スコアに追加]** をクリックし、**[OK]** をクリックします。
- 入力したエレクトリックギターの音符譜表をトリプルクリックして譜表全体を選択します。
- 次に楽譜の1番目の大譜表の開始位置（最初の小節線の左）でエレクトリックギター譜表を **Alt**＋クリックまたは⌥- クリックして楽譜をコピーします。

すべての音符がタブ譜に変換されます。**Alt**＋クリックまたは⌥＋クリックしてタブ譜から楽譜をコピーすることもできます。Sibelius First は、譜表タイプに合わせてコピーされた楽譜を変換します。

タブ譜の記譜

Sibelius First で通常の音符譜表をタブ譜表に変換する方法について説明しました。ここでは、一から楽譜を入力してみましょう。

- ギター譜表の小節21の小節休符を選択します。
- **N** を押して音符の入力を開始します。テンキーの第1レイアウトが表示されていることを確認します（**F7** を押して確認します）。
- **[3 0]** を（テンキーで）タイプ入力し、8分休符を入力します。
- ↑を1回押し、第4弦へと移動して **[4]** を（今度はメインキーボードで）タイプ入力します。
- テンキーからスタッカートのアーティキュレーションを追加します。
- →をタイプ入力して次の位置へと進んでから、**[4]** を（テンキーで）タイプ入力して4分音符へ変更します。
- ↑を2回押し、第2弦へと移動して **[1]** を（今度はメインキーボードで）タイプ入力します。
- 第1弦へと移動し、**[1]** をもう一度タイプ入力します。

次のように表示されます。

ここで、最後の4小節の覚え書きをタブ譜として入力します。次のように表示されます。

3.3 アイデアとドラムの楽譜

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［3 ドラムの楽譜］**（**［プロジェクト 3］**フォルダ内）を開いてください。

このセクションでは、Sibelius First の最も強力なクリエイティブツールである［アイデア］パネルについて説明します。このパネルでは、「アイデア」と呼ばれる任意の長さの音楽の断片を保存し、後で検索して再使用できます。

Sibelius First では、独自のクリエイティビティを簡単にキャプチャすることができるだけなく、さまざまな楽器と音楽ジャンルを網羅した 300 の内蔵のアイデアを活用することができます。インスピレーションや創造力を刺激する斬新な楽想を求めたりするときにぴったりのアイデアがすぐに見つかることでしょう。

ここまでにキーボードとギター用の記譜を説明しましたが、このセクションでは、ドラム用の記譜方法について説明します。パーカッションの記譜を簡単にする［アイデア］パネルを使用すれば、作業時間を大幅に短縮することができます。

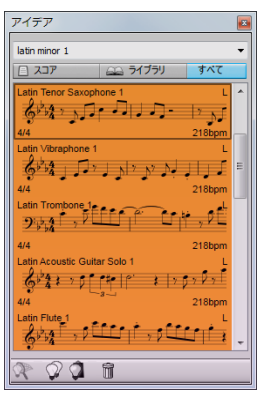
ドラム譜表のスコアへの追加

これまで作業してきたスコアにはドラム譜表がありません。それではドラム譜表を加えていきましょう。

- **［ホーム］**▸**［楽器］**▸**［追加または削除］**を選択するか、ショートカット **I** を押します。
- **［ドラムセット（ロック）］**を選択し、**［スコアに追加］**をクリックします。
- **［スコア内の譜表］**リストに**［ドラムセット（ロック）］**が表示されます。これをクリックして選択します。
- **［下へ］**ボタンを使用して、**［ドラムセット（ロック）］**が**［5 弦ベースギター］**と**［タンバリン］**の間になるよう、順序を変更します。
- **［OK］**をクリックしてスコアに戻ります。

スコアに追加されたパーカッション譜表が表示され、ドラムパートを記譜することができます。

ドラムのアイデアの試聴

［表示］▸**［パネル］**▸**［アイデア］**（ショートカットは **Ctrl** ＋ **Alt** ＋ **I** または ⌥⌘**I**）を選択して、［アイデア］ウィンドウを表示します。［アイデア］パネルはこの様に表示されます。

[ライブラリ]、**[スコア]**、および **[すべて]** の間で切り替えてみてください。**[ライブラリ]** ボタンをオンにすると内蔵のアイデアにアクセスできます。リストを上下にスクロールしてみてください。

それぞれのアイデアには、楽譜やその他のオブジェクトの小さなプレビューが表示されます。通常、1つの譜表の2、3小節分が表示されます（しかし、アイデアに含まれる小節や楽器の数には制限はありません）。左上にはアイデアの名前、右上には**「L」**の文字（アイデアが現在のスコアにではなくライブラリにある場合）、左下にはアイデアの拍子記号、右下にはアイデアのテンポがそれぞれ表示されます。

アイデアがどのように聴こえるかを試聴する場合は、アイデアをクリックしたままにします。アイデアはマウスを放すまで繰り返し再生されます。

ウィンドウ上部にさまざまなタグをタイプ入力して、特定のスタイルやジャンルのアイデアを検索することができます。こうすれば、アイデアのリストから適切なアイデアをすばやく絞り込むことができます。

タグをいくつかタイプしてみてください。**モータウン**、**ファンク**、**ハッピー**、**メロディー**、**スロー**など、様々なスタイルとジャンルのアイデアがSibelius Firstに付属していることがお分かりいただけるでしょう。

アイデアの貼り付け

これらのアイデアのいくつかを実際に試してみましょう。まず、[アイデア]パネルの**[Reggae Drum Kit 1]**を選択してください。このアイデアが枠で囲まれ、選択されていることを示します。**Ctrl**＋**C**または**⌘C**を押すか、ウィンドウの下部の**［コピー］**ボタンを押し、これをクリップボードにコピーします。

アイデアをスコアに貼り付ける作業は、他の種類の貼り付け作業と同じ方法で行います。アイデアを表示したい場所をスコア内で選択してから**［ホーム］▸［クリップボード］▸［貼り付け］**（ショートカットは**Ctrl**＋**V**または**⌘V**）を選択するか、何も選択されていないことを確認してから［**ホーム**］▸［**クリップボード**］▸［**貼り付け**］を選択し、アイデアを貼り付けたいスコア内の位置をクリックします。また、［アイデア］パネルの一番下にある**［貼り付け］**ボタンをクリックすることもできます。スコアの［Drum Set］譜表の最初の完全小節を選択し、**Ctrl**＋**V**または**⌘V**を押して貼り付けます。

貼り付けたアイデアは、印刷されたスコアのドラム譜表の（アウフタクト小節に続く）最初の4小節に一致しています。

同じ方法で**[Hip-Hop Drum Kit 5]**アイデアを貼り付けて、音楽の特徴を変えることもできます。

ドラム記譜の入力

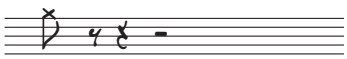
これからこの曲全体に対して独自のドラムパートを作成しますので、スコアにペーストしたアイデアはすべて削除してください。

パーカッション譜表へ入力する際は、これまでに学んだどの音符入力方法を使ってもかまいませんが、ドラムの記譜（異なる種類の符頭を使用します）には、ステップタイム入力やフレキシタイム入力を使うと、より入力が簡単になります。

ご使用のコンピューターに接続されているMIDIキーボードをお持ちの場合、（高音部譜表の）譜表上のラインまたはスペースに対応している音符を再生すると、自動的に正しい符頭が選択されます。（接続されているMIDIキーボードをお持ちでない場合、アルファベット入力を使用して音符を入力し、下の**符頭の変更**を参照して手動で変更します。）

2番目の小節にドラムパターンを入力しましょう。

- 小節6の小節休符を選択し、**N**を押して音符入力を開始します。
- テンキーの**3**を押し、8分音符を選択します。
- MIDIキーボードで、譜表上の**G**を再生します。この音高は、クローズドハイハットに対応しています。
- 符頭がクロス符頭に変わります。



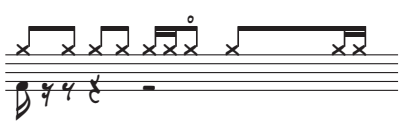
- 他3つの8分音符のハイハットを入力します。
- テンキーの**2**を押し、16分音符を選択します。
- MIDIキーボードで**G**を2回再生し、16分音符のハイハットを2つ入力します。

この方法で、小節内に残りのハイハットを入力していきます。オープンハイハットを示す○記号を追加するには、**F10**を押してテンキーの第4レイアウトを選択してから、（テンキーの）**[.]**を押します。このキーは、**[ハーモニック / オープン]**ボタンに対応しています。**[.]**キーをもう一度押すと、○記号が削除されます。音符の入力を続ける前には、**F7**を押してテンキーの第1レイアウトに戻すことを忘れないようにしましょう。

Sibelius Firstでは、4つの個別の声部、つまり4パート分の音符または和音をひとつの譜表に書き込むことができます。声部1（これまで使用してきたもの）は濃い青、声部2は緑、声部3はオレンジ、声部4はピンクです。2つ以上の声部を同時に使用する必要はほとんどありません。

バスドラムとスネアの符尾は常に下向きに、ハイハットは上向きになるよう、バスドラムとスネアのパターンを加えるために、声部2を使用します。

- まず、**Esc**キーを押し、何も選択されていない状態であることを確認します。
- 次に**[音符入力]**▸**[声部]**▸**[声部]**▸**[2]**（ショートカットは**Alt**＋**2**または**⌥2**）を選択して声部を切り替えるか、テンキーの一番下のボタンの列の**[2]**をクリックします。
- テンキーの**[2]**をクリックして16分音符を選択します。
- マウスのポインターが緑色に変わり、声部2へ入力されるオブジェクトを「持っている」ことを示します。
- 次に、小節6の先頭のFの位置（譜表上の一番下のスペース）にマウスポインタを置いてクリックします。



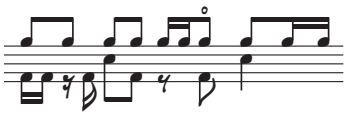
前回と同じようにMIDIキーボードを使用して、小節2にバスドラムとスネアドラムのパターンを追加します。

声部について、詳しくは『リファレンスガイド』の🕮 **3.14 声部**をご参照ください。

符頭の変更

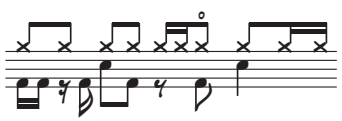
アルファベット入力を使用してパーカッション譜表に音符を入力する場合、Sibelius First では符頭が自動的に変更されます。それでは、今度はコンピューターのキーボードを使用して同じパターンを小節7に入力してみましょう。

- 小節3の小節休符を選択し、**N** を押して音符入力を開始します。
- テンキーの **3** を押し、8分音符を選択します。
- コンピューターのキーボードで **G** を入力します。譜表の上になるよう確認しましょう。
- **R** を押して、他3つの8分音符を入力します。
- テンキーの **2** を押し、16分音符を選択します。
- コンピューターのキーボードで **G** を2回押し、16分音符を2つ入力します。

残りのハイハットを追加し、バスドラムとスネアのパターンを声部2に入力します。

Sibelius First では、選択対象をフィルターすることができます。「フィルター」とは、特定の属性を持つオブジェクトだけを選び出す機能です。それでは試してみましょう。

- 小節全体が青色の枠で囲まれるよう小節3を選択します。
- **[ホーム]** ▸ **[選択]** ▸ **[フィルター]** を選択し、**[声部]** カテゴリーの **[声部1]** を選択します（ショートカットは **Ctrl** ＋ **Shift** ＋ **Alt** ＋ **1** または ⌃⌥⌘**1**）。
- 声部1の音符だけ（ハイハットなど）が複数選択されます。

これで、声部1内の選択されている音符にのみ編集が適用されるようになります。それでは、符頭を変更しましょう。

- **[記譜]** ▸ **[符頭]** ▸ **[タイプ]** ボタンの上部をクリックして（ショートカットは **Shift** ＋ **Alt** ＋ **1** または ⌃⌥**1**）、符頭を変更します。
- すべての音符がクロス符頭に変更されて表示されます。

別のタイプの符頭を使いたい場合は、**[符頭]** ▸ **[符頭]** ▸ **[タイプ]** ボタンの下部をクリックして **[符頭]** ギャラリーを開いてください。

符頭について詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **4.9 符頭**をご参照ください。

アイデアのキャプチャ

それではここで、新しいアイデアを作成してみましょう。［アイデア］パネル内にアイデアを置く操作を、アイデアの「キャプチャ」と呼びます。

- 小節3を選択します。小節が青色の枠で囲まれます。
- **[ホーム]** ▸ **[クリップボード]** ▸ **[アイデアをキャプチャ]**（ショートカットは **Shift-I**）を選択するか、［アイデア］パネル下部の **[アイデアをキャプチャ]** ボタン（ ）をクリックします。

選択した楽譜が直ちに［アイデア］パネルの **[スコア]** カテゴリーのリストの一番上に表示されます。これはいつでも再利用できますので、この様なドラムパターンの場合は特に便利です。

リピート小節

ドラムや他のパーカッションのパートは、1小節か2小節の長さで繰り返されるパターンによって構成されていることがよくあります。このような場合、編曲者は、小節を繰り返しコピーするのではなく、リピート小節記号を記入することが多いのです。こう表記することで、演奏者は、前の小節とまったく同じパターンを演奏するということを理解することができます。Sibelius First では、演奏者が演奏するようにリピート小節が再生されます。

これがどの様に機能するか、タンバリンのパート（小節9から）にリピート小節を加えてみましょう。

リピート小節記号を追加するには、タンバリン譜表の小節10を選択し、**F11** を押してテンキーの第5レイアウトを表示します。ここで（テンキーの）**1** を押して、リピート小節を1つ追加します。小節16に到達するまで、**1** を何度か押します。

テンキーの第5レイアウトからは、2小節および4小節のリピート小節も追加することができます。Sibelius First では、さまざまな種類のリピートを再生することができます。

リピート小節について詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **4.20 リピート小節**をご参照ください。

パーカッションのパートの完了

印刷されたスコアを参考に、楽譜の［Drum Set］と［Tambourine］のパートに覚え書きを入力します。［アイデア］パネル、リピート小節、複数の声部を使用して、パーカッションのパートの入力を完了します。

3.4 コード記号

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**[4コード記号]**（**[プロジェクト3]**フォルダ内）を開いてください。

Sibelius Firstでは、コード記号は、楽譜のその位置における和音を示す、コードテキストとコードダイアグラムの2部分から構成されています。コードダイアグラムは、演奏者がどの指でギターのどのフレットのどの弦を押さえるべきなのかを示しており、ときにコードボックス、フレットボードグリッド、ギターフレームなどとも呼ばれます。

コード記号は、2つの方法で入力することができます。スコアに直接入力するか、MIDIデバイスで和音の音符を演奏します。その後、コード記号の2部分の一方または両方を表示するかどうかを選択できます。

このセクションでは、コード記号をタイプ入力で入力・編集したり、MIDIコード記号入力を再生・修正したり、コード記号プラグインを使用する方法について説明します。コード記号について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **5.7コード記号**をご参照ください。

タイプしてコード記号を作成する

Sibelius Firstでは、タイプ入力するだけでコード記号をスコアに追加することができます。

- コード記号を置きたい音符または和音の上をクリックします。この例では、［Electric Stage Piano］譜表の最初の完全小節を選択します。
- **[テキスト]**‣**[コード記号]**‣**[コード記号]**（ショートカットは**Ctrl**＋**K**または**⌘K**）を選択します。
- 選択した音符の上に、点滅カーソルが表示されます。
- 表示させたい和音を英語でタイプ入力します。Sibelius Firstでは、コード記号が首尾一貫し読みやすいものになるよう、必要に応じて特殊な記号が自動作成されます。Ab13（#11）を入力してみましょう。
- **スペース**キーを押して次の音符または拍へと進むか、**Tab**キーを押して次の小節の先頭へと移動します。

特殊なシャープとフラット記号および特殊文字を使って適切なコード記号が作成されます。この例では、A♭13(♯11)と表示されます。

コード記号を入力する一番簡単な方法は、MIDIデバイスで和音を再生してSibelius Firstに読み取らせる方法です。

演奏してコード記号を作成する

Sibelius Firstでは、コードに含まれる音符から750以上のコードタイプを認識することができるため、MIDIキーボード（またはギター）を使用して、コード記号をスコアにすばやく入力することができます。

（和音を演奏してSibelius Firstに入力するには、ご使用のコンピューターに接続されているMIDIデバイスが必要です。接続されているMIDIデバイスをお持ちでない場合、上記の方法でコード記号をスコアへタイプ入力します。）

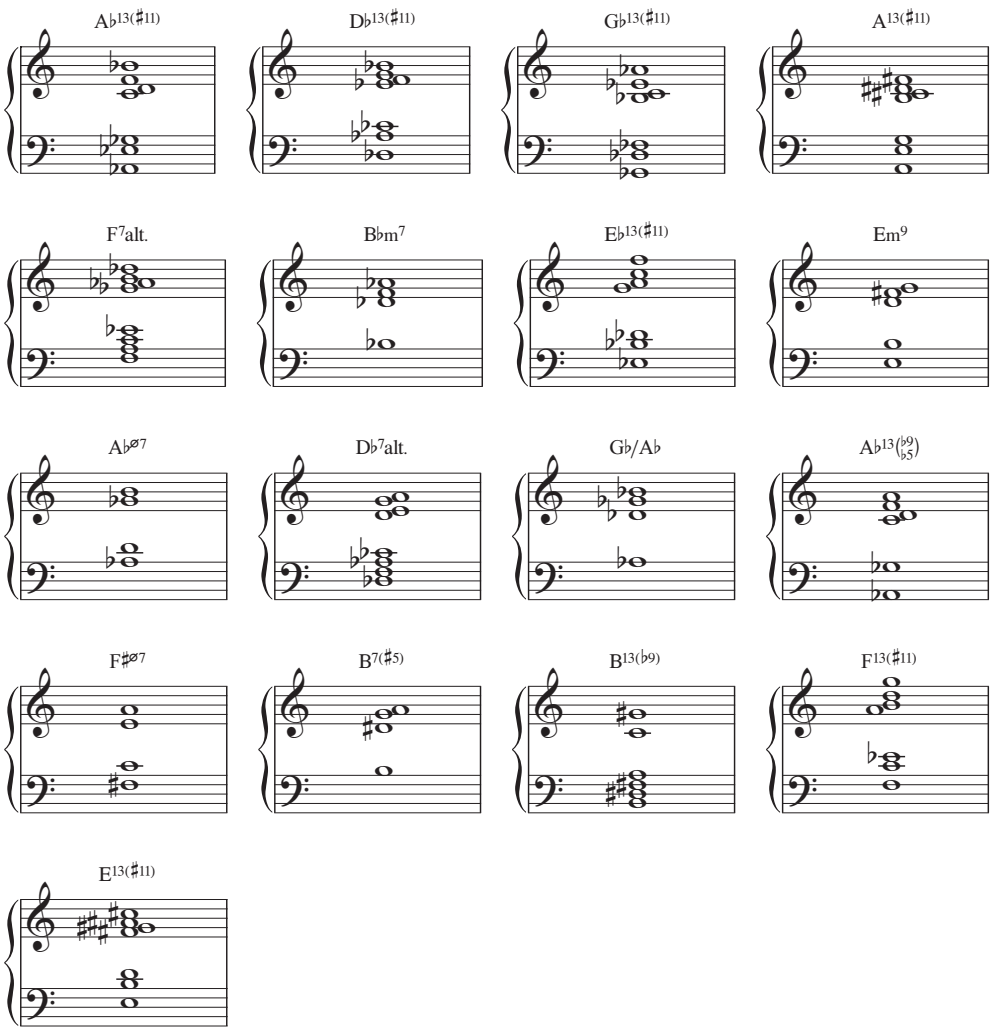
それでは試してみましょう。

- ［Electric Stage Piano］譜表の3番目の完全小節を選択します。
- **[テキスト]**‣**[コード記号]**‣**[コード記号]**を選択します。
- 最初の音符の上に点滅カーソルが表示されます。

- MIDIキーボードでCメジャーを演奏します。
- Cのコード記号が入力され、次の拍へと移動します。

シンプルな三和音から非常に複雑な拡張和音まで、さまざまな和音を演奏することができます。演奏した和音に対して最も適切なコード記号が、Sibelius Firstにより記譜されます。さまざまな組み合わせの音符をMIDIキーボードで演奏し、どのように記譜されるのか確認してみましょう。

標準設定では、コードのボイシングにより、コードの種類だけではなくコードの記譜の方法も決まります。たとえば、このコードを転回形で演奏すると、別のベース音を使用するコード記号（D/F♯など）が作成されます。Sibelius Firstの和音認識のカスタマイズについて詳しくは、『リファレンスガイド』の 🕮 **5.7 コード記号**をご参照ください。

先ほど作成したコード記号を**Ctrl**または⌘を押したまま選択して削除するか、**[元に戻す]**を使ってスコアから削除します。それでは、「Urbane Filigree」で使用されている和音のコード記号を入力していきましょう。これらの和音は非常に複雑です。対応するコード記号を書き込むために再生する必要のある音符は次のとおりです。

印刷されたスコアを参考に、コード記号のスコアへの追加を完了させます。MIDIキーボードで和音を再生するか、和音名をタイプ入力するか、好みの方法で追加します。

既存の音高からコード記号を作成する

同様に、Sibelius First は既存の音符を分析することによって和音を認識できます。音符を含む範囲を選択すると、ウィンドウの一番下のステータスバーに選択された音符（一定の範囲の楽譜を選択した場合は最初の音符または和音）の音高が表示されます。また、選択範囲の最初のすべての音符（必要に応じて複数の譜表にわたる）から成る和音がコード記号として表示されます。

それでは試してみましょう。

- 5 弦ベースギター譜表の 9 の最初の音符を選択します。
- **Shift** を押さえ、エレキギターのパートの小節の最初の和音を選択します（エレクトリックステージピアノ譜表のすべても選択されます）。
- ウィンドウの一番下のステータスバーの **［和音］** 情報に［B♭m7］が表示されます。

この同じ分析結果を使ってスコアにコード記号を追加することもできます。パッセージを選択して **［テキスト］** ▸ **［コード記号］** ▸ **［音符から追加］** を選択すると、選択された音符から計算されたコード記号の頻度と場所に対する様々なオプションが選択できるダイアログが表示されます。

同等のコードテキスト

Sibelius First では、音高の組み合わせに対して最適なコード記号が自動的に選択されますが、別のコードタイプを表示させたい場合があるかもしれません。同じ音程のパターンで他にどのような和音があるのかどうかを確認するには、変更したいコード記号（1 つまたは複数）を選択してから **［テキスト］** ▸ **［コード記号］** ▸ **［同等のコードテキスト］**（ショートカットは **Ctrl** ＋ **Shift** ＋ **K** または ⇧⌘**K**）を選択するか、右クリック（Windows）または **Control** ＋クリック（Mac）し、**［コード記号］** サブメニューから **［同等のコードテキスト］** を選択します。

たとえば G♯7 を A♭7 へ変更する方法については、下の **コード記号の異名同音** を参照してください。

以下を試してみましょう。

- ［Electric Stage Piano］譜表の最初の小節の和音 A♭13(♯11) を選択します。
- **Ctrl** ＋ **Shift** ＋ **K** または ⇧⌘**K** を入力して、次の同等のコードテキストへと変更します。
- コードタイプが D7(♭9)/G♯ へと変更されます。
- **Ctrl** ＋ **Shift** ＋ **K** または ⇧⌘**K** を入力して、次のコード記号へと変更します。
- コードタイプが A♭7(♯11add13) へと変更されます。
- この方法で、A♭13(♯11) へと再び戻るまでコードテキストを変更していきます。

このように、Sibelius First により好みのコードテキストが選択されなかった場合や、再生したボイシングにより別の種類の和音が推奨された場合にも、コード記号のコードテキストを簡単に変更することができます。

ここで、入力した和音がすべて正確に記譜されているかどうかを確認する必要があります。必要に応じて、**Ctrl** ＋ **Shift** ＋ **K** または ⇧⌘**K** を入力して変更します。既存のコード記号を編集するには、コード記号をダブルクリックするか、変更したいコード記号を選択してから（メインキーボードの）**Return** キーを押します。その後、MIDI デバイスで和音を再生するか、正しいテキストを英語で入力します。

コード記号の異名同音

Sibelius First では、直前の調号に従って和音が自動的に「表記」されますが、ときに、あるコード記号の異名同音のコードタイプを変更しないでコード記号のルートを変更したい場合があります。どの様にするか見てみましょう。

- 異名同音に書き換えたいコード記号を選択します。
- **［テキスト］‣［コード記号］‣［コード記号の異名同音］**を選択します。
- コード記号のルート（および、スラッシュを付けて表記される和音の場合、いずれかの交互ベース音）が、異名同音で書き換えられます。

コード記号のコピー

ここまで、コード記号をキーボード譜表に表示する方法を見てきましたが、Sibelius First では、コード記号を他の楽器にコピーすると、コードダイアグラムを表示するかどうかが判別され、移調するスコアに正確な移調が表示されるよう、コードダイアグラムが自動更新されます。

先ほど入力したコード記号をコピーしてみましょう。

- ［Electric Stage Piano］の一番上の譜表をトリプルクリックし、スコア全体を通してこの譜表を選択します。
- **［ホーム］‣［選択］‣［フィルター］**を選択し、**［テキスト］**カテゴリーの**［コード記号］**を選択してコード記号だけを選択します。
- ［Electric Guitar］譜表の最初の完全小節の先頭を**Alt**＋クリックまたは⌥＋クリックし、コード記号をギター譜表へとコピーします。
- ［4-string Bass Guitar］譜表の最初の完全小節の先頭を**Alt**＋クリックまたは⌥＋クリックし、コード記号をベースギター譜表へとコピーします。

コード記号は、複数の譜表にわたって複数コピーすることができます。**Ctrl**＋**C**または**⌘C**を押し、複製したいコード記号をクリップボードへコピーしてからコピー先の譜表を選択し、**Ctrl**＋**V**または**⌘V**を押します。

コードダイアグラムのリボイス

Sibelius First では、ギター譜表に表示されているコード記号のすべてにコードダイアグラムが自動的に割り当てられます。6弦ギターのスタンダードチューニングに対してあらかじめ用意されているコードダイアグラムから演奏しやすいものが選択されるか、和音に含まれる音符に合わせて自動計算されます。つまり、特殊なギターチューニングを使用する場合でも、Sibelius First では特定のコードタイプに対する演奏可能なダイアグラムを幅広く選択できます。

標準設定で選択されるコードダイアグラムは、任意に変更できます。MIDI デバイスを演奏する際に選択されるコード記号も、同じように変更できます。これを行うには、コードダイアグラムを変更したい1つまたは複数のコード記号を選択し、**［テキスト］‣［コード記号］‣［コードダイアグラムをリボイス］**（ショートカットは**Ctrl**＋**Shift**＋**Alt**＋**K**または⇧⌥⌘**K**）を選択するか、右クリック（Windows）または**Control**- クリック（Mac）して、**［コード記号］**サブメニューから**［コードダイアグラムをリボイス］**を選択します。

以下を試してみましょう。

- ［Electric Guitar］譜表の最初の小節の和音 A$^{\flat 13(\sharp 11)}$を選択します。
- **Ctrl**＋**Shift**＋**Alt**＋**K**または⇧⌥⌘**K**を押し、表示されているコードダイアグラムのボイシングを変更します。何度か繰り返し試してみて、どのようなボイシングが選択できるか確認してみましょう。

コード記号プラグイン

Sibelius First には、コード記号を操作するのに非常に便利なプラグインがいくつか搭載されています。これらは、リボンの **[ホーム]** タブの最後の **[プラグイン]** ギャラリーの **[コード記号]** カテゴリーにあります。

既存のコード記号から簡単な伴奏を追加するには、**[ホーム]** ▸ **[プラグイン]** ▸ **[コード記号]** ▸ **[コード記号の音符化]** を動作させます。このプラグインは、スコア内のコード記号を使用して、さまざまなスタイルのピアノまたはギター伴奏を作成します。

ギターの楽譜を作成している場合は、**[ホーム]** ▸ **[プラグイン]** ▸ **[コード記号]** ▸ **[カポコード記号を追加]** を使うと便利です。ギタリストが、特定のフレットにカポを取り付けて演奏する際のコードに対応したコード記号を、既存のコード記号の上に追加します。

3.5 リピートとコーダ

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア**［5 リピートとコーダ］**（**［プロジェクト 3］**フォルダ内）を開いてください。

このセクションでは、リピート小節線、1 番括弧、2 番括弧、コーダを使用して楽譜の表記を変更する方法について説明します。Sibelius First は、スコアを再生すると、これらの一般的なリピート指示すべてが演奏者が演奏するとおりに再生されます。

リピート小節線

リピート小節線を使って、この楽曲の最初の 4 小節をリピートさせてみましょう。まずは、リピートされる部分の最後にリピート小節線を追加します。

- 小節 4 の最後の小節線をクリックします。紫色に変化し、選択されていることが示されます。
- **［記譜］▸［共通］▸［小節線］**ギャラリーを開きます。
- リストから**［リピート終了］**を選択します。
- 小節線がリピート小節線に変化し、リピートされる部分の終了位置を示します。

この場合、演奏者はここからスコアの先頭へと戻り、繰り返して演奏します。リピートには、アウフタクト小節も含まれます。リピートされる部分の開始位置を作成するには、別のリピート小節線を作成する必要があります。

- **［記譜］▸［共通］▸［小節線］**ギャラリーから**［リピート開始］**を選択します。
- マウスのポインターが紺青色に変わり、オブジェクトを「持っている」ことを示します。
- 最初の小節の先頭の小節線をクリックし、リピート開始小節線を配置します。
- **Esc** キーを押してすべての選択を解除してから **P** を押し、スコアを先頭から再生します。

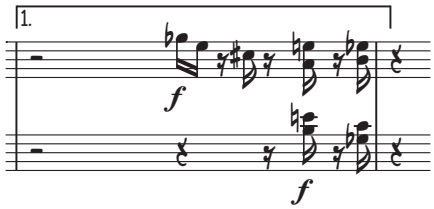
これで、小節 4 まで再生されると、小節 1 へと戻って再生されるようになります。

1 番括弧と 2 番括弧

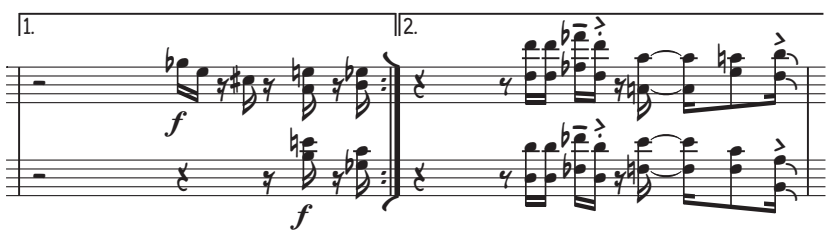
作曲者や編曲者は、より複雑なリピートには 1 番括弧と 2 番括弧を使用します。1 番括弧は 1 回目のリピート時のみ、2 番括弧は 2 回目のリピート時にのみ演奏されます。Sibelius First では、1 番括弧と 2 番括弧のラインは大譜表ラインとなり、**プロジェクト 2** で使用したテンポラインと同じように動作します。

1 番括弧と 2 番括弧を使ったリピートを作成してみましょう。1 回目のリピートの終止として使用するために、小節を 1 つ挿入する必要があります。

- 先ほど追加したリピート終了小節線を選択し、**Delete** キーを押して削除します。
- いずれかの譜表の小節 4 を **Ctrl** ＋クリックまたは **⌘** ＋クリックして大譜表を選択します。すべての譜表を囲む紫色の二重の枠が表示されます。
- **Ctrl** ＋ **C** または **⌘C** をタイプして、その小節のすべての楽器の楽譜をコピーします。
- ［Trumpets in B♭］譜表の小節 8 を選択します。この小節を、2 回目のリピートの終止として使用します。
- **Ctrl** ＋ **V** または **⌘V** をタイプして、コピーした小節をスコアに貼り付けます。新しい小節が既存の小節の間に挿入され、小節 8 になります。
- この小節が選択されている状態で **L** を押し、**［記譜］▸［ライン］▸［ライン］**ギャラリーを開きます。

- **［共通］**カテゴリーの**［1番括弧］**ラインを選択して小節8へラインを追加します。

ラインはスコアの一番上に追加されましたが、それぞれのパートの小節8の上に表示されます。それでは、リピート終了小節線と2番括弧追加して、リピートを完成させましょう。

- 小節8の最後の小節線をクリックします。紫色に変化し、選択されていることが示されます。
- **［記譜］▸［共通］▸［小節線］**ギャラリーから**［リピート終了］**を選択します。
- 小節線がリピート小節線へと変化します。
- ［Trumpets in B♭］小節9を選択します。
- **L**を押して**［記譜］▸［ライン］▸［ライン］**ギャラリーを開きます。
- **［共通］**カテゴリーの**［2番括弧］**ラインを選択して小節8へラインを追加します。

ライン同士が重なり合わないよう縮めるには、マウスを使ってラインの端をドラッグするか、←または→キーを使用します（より大きなステップでドラッグするには、**Ctrl**キーまたは⌘キーを押しながら操作します）。

コーダとダルセーニョ（D.S.）のリピート

コーダとダルセーニョ（D.S.）を使ったリピートを作成してみましょう。小節22-25をコーダ部分に変化させます。

- 小節22の先頭の小節線を選択します。
- **［記譜］▸［共通］▸［小節線］**ギャラリーの**［複縦線］**を選択して複縦線を追加します。複縦線は、ある部分の終了位置を示します。
- **［レイアウト］▸［ブレーク］▸［大譜表の分割］**を選択し、複縦線の後に間隔を空けます。Sibelius Firstにより、音部記号、調号、括弧が自動的に再記述されます。
- ［Trumpets in B♭］譜表の小節22の先頭の休符を選択します。
- **［テキスト］▸［スタイル］▸［スタイル］**ギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［テンポ］**を選択します。
- 右クリック（Windows）または**Control**＋クリック（Mac）して、用語メニューを表示します。
- 推奨される用語と記号のリストから、2つのセーニョ記号のうち最初の記号（𝄋）を選択します。
- **Coda**とタイプ入力し、**Esc**キーを押します。

それでは、ダルセーニョを追加しましょう。こうして、小節21の末尾に到達したら小節1へと戻ることを演奏者に指示します。

- 小節21の末尾の複縦線を選択します。
- **［テキスト］▸［タイル］▸［スタイル］**ギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［リピート（D.C./D.S./To Coda）］**を選択します。
- 右クリック（Windows）または**Control**＋クリック（Mac）して、用語メニューを表示します。
- 推奨される用語と記号のリストから、［**D.S. al Coda**］を選択します。
- **Esc**を押して選択を解除します。
- いずれかの譜表の小節14を**Ctrl**＋クリックまたは⌘-クリックして大譜表を選択します。すべての譜表を囲む紫色の二重の枠が表示されます。
- **Z**を押して**［記譜］▸［シンボル］▸［シンボル］**ギャラリーを開きます。
- **［共通］**カテゴリーから**セーニョ**（𝄋）を選択してスコアにシンボルを作成します。
- 譜表の上のシンボルを、小節の末尾の適切な位置へとドラッグします。（シンボルと他のオブジェクトの違いは、シンボルではSibelius Firstの配置ルールを無視してその位置を自由に変更することができる点です。）

最後に「To Coda」指示を追加しましょう。こうして、小節4の末尾に到達したら小節1へと戻ることを演奏者に指示します。

- 小節4の最後の小節線を選択します。
- **［テキスト］▸［スタイル］▸［スタイル］**ギャラリーの**［共通］**カテゴリーから**［リピート（D.C./D.S./To Coda）］**を選択します。
- 右クリック（Windows）または**Control**＋クリック（Mac）して、用語メニューを表示します。
- 推奨される用語と記号のリストから、［**To Coda**］を選択します。
- **Esc**を押して選択を解除します。

スコアを再生すると、Sibelius Firstは追加したリピートに従います。リピートの使い方について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **6.8 リピート**をご参照ください。

3.6 サウンドと再生

このセクションから開始する場合は、サンプルスコア **[6 サウンドと再生]**（**[プロジェクト 3]** フォルダ内）を開いてください。

スコアの再生に使用されるサウンドを変更したり、エフェクトを追加したり、スコアからオーディオファイルを作成する方法について説明します。

スコアのミキシング

プロジェクト 1 で説明したとおり、［ミキサー］ウィンドウは、スコアの再生をコントロールする非常にパワフルなツールです。スコア内の各楽器の再生に使用されるサウンドを変更したり、リバーブやコーラスなどのエフェクトを追加したり、特定のパラメータを編集して各楽器のサウンドやスコア全体のミックスを調整することができます。

はじめに、［ミキサー］を使って特定の譜表をミュートします。

- **M** を押して［ミキサー］パネルを開きます。
- **[Synthesizer (a)]** と **[Synthesizer (b)]** 譜表ストリップを見つけます。
- 各ストリップの中程にある **[ミュート]** ボタン（M）をクリックすると、その譜表がミュートされます（**[ミュート]** ボタンが表示されていない場合は、［ミキサー］パネルがフルサイズで表示されているか確かめてください）。
- もう一度クリックすると完全にミュートされます。

スコアを再生してみましょう。シンセサイザーのサウンドは聴こえないはずです。

弦楽器セクション全体のボリュームを変更したい場合は、［ミキサー］パネルの右側のグループストリップを使います。スコア内の楽器の各ファミリーに対してグループストリップがあります。これらを調整すると、その楽器ファミリー全体の相対的なボリュームとパンを変更することができます。

グループストリップが表示されていない場合は、［ミキサー］パネルの左側の **[グループ表示 / 非表示]** ボタン（）をクリックしてオンにしてください。

楽器のサウンドの変更

Sibelius First でそれぞれの楽器を再生するのに、ご使用のコンピューターで使用可能なサウンドのうち、どのサウンドを使用するかを選択することができます。サウンドをいくつか変更してみましょう。

- ［ミキサー］パネルがフルサイズで表示されていることを確かめます。
- **［Bass］**譜表ストリップを見つけます。
- ストリップ上部の 3 つのディスプレイの中央に Sibelius Player 再生デバイス **［(S. Play)］**が表示されていることを確かめます。
- ピックベースギターに対する現在の表示 **［(P.B)］**の隣の矢印をクリックします。
- メニューが表示され、Sibelius First が使用できる再生デバイスが表示されます。ここでは、Sibelius 7 First Sounds を使用します。
- **［Sibelius 7 First Sounds］▸［Guitar］▸［Bass］▸［Upright Acoustic］**を選択し、アップライトベースのサウンドへ変更します。

スコアを再生して違いを聴いてみましょう。新しいサウンドに合うよう、バランスを調整するとよいでしょう。

エフェクトのパラメーター

それぞれの楽器のサウンドには、最大6つのパラメーターがあります。パラメーターは、譜表ストリップを拡大表示すると表示されるフェーダーでコントロールします。楽器にその他のパラメーターがある場合は、譜表ストリップの一番下に矢印ボタン（⏩）が表示されます。このボタンをクリックすると、エフェクトのその他のパラメーターが表示されます。

いずれかの矢印ボタンを**Shift**-クリックすると、［ミキサー］パネルのすべての譜表ストリップが拡大表示されます。

つまみを調整してエフェクトを変更し、Sibelius Firstの再生がどのように変化するのか聴いてみましょう。標準設定に戻すには、フェーダーをダブルクリックします。（これはパンつまみ、ボリュームフェーダー、リバーブとコーラスのスライダーに対しても行うことができて便利です。）

ミキサーを使ってSibelius Firstの再生を変更する方法について詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **6.3 ミキサー**をご参照ください。

オーディオファイルのエクスポート

Sibelius 7 First SoundsなどのVST/AUバーチャルインストゥルメントを使えば、クリック1つでスコアをオーディオファイルとしてエクスポートできます。オーディオファイルは、CDへ書き込んだり、SoundCloudへ直接アップロードしたり（**［ファイル］▸［共有］▸［SoundCloudへ公開］**）、MP3などの他のフォーマットに変換することができます。これらを利用すれば、楽曲の雰囲気を伝えたり、練習時の伴奏として使用するために指揮者や演奏者に録音物を提供することができます。

「Urbane Filigree」のオーディオファイルをエクスポートしてみましょう。

- **［ファイル］▸［エクスポート］▸［オーディオ］**を選択します。
- **［オーディオのエクスポート］**パネルの**［再生ライン］**オプションの下の**［先頭からエクスポート］**が選択されていることを確かめます。
- オーディオファイルの名前を入力し、ファイルを保存するコンピューター上のフォルダを選択します（標準設定ではSibelius Firstはスコアと同じフォルダを選択します）。
- **［エクスポート］**ボタンをクリックします。
- スコアがオーディオファイルとして録音され、スコアと同じフォルダ内に保存されます。

詳しくは、『リファレンスガイド』の🕮 **1.10 オーディオファイルのエクスポート**をご参照ください。

索引

この索引にはチュートリアルに含まれる項目のみが掲載されています。Sibeliusの機能についてより詳細な情報は『Sibeliusリファレンスガイド』に掲載されていますので、この索引で見つけることができない項目については、リファレンスガイドをご参照ください。

1番括弧と2番括弧 83
3連符 55

A

ASIO 37

D

D.S. 84
DirectSound 37

H

Helsinkiフォント 49

I

Inkpen2フォント 49

M

MIDIギター 71
MIDI入力 27, 31
　コード記号 78

O

Opusフォント 49

P

PDFファイル
　PhotoScoreを使って開く 51
PhotoScore Lite 51

R

Repriseフォント 49

S

Sibelius Player 36
Sibeliusリファレンス 5

あ

アーティキュレーション 22, 59
アイデアをキャプチャする 76
アウフタクト小節 49
アッチェレランド 58
アルファベット入力 30
アンサンブル 47

い

移調する
　オクターブ単位で 30
　楽器 33
　スコア 33
移調ピッチ 33
印刷する 16

う

ウィンドウ 46, 73

え

エクスポートする 64
　オーディオトラック 88
　グラフィック 64
エフェクト 88
演奏テクニック 40

お

オーディオエンジンのオプション 37
オーディオトラック 88
オブジェクト
　削除する 25
音高
　記譜音（移調された） 33
　実音（コンサート） 33
音節 38
音符
　アーティキュレーション 59
　移調する 20, 30
　大きくする 61
　コピーする 26
　削除する 25
　タブ譜への変換 72
　小さくする 61
　入力する 30
　符頭タイプを変更する 76
　編集する 19
　連音符 55
音部記号 54

か

カーソル 21
カーソル ..... 再生、入力、テキスト参照
改行 60
　大譜表 61
改善点 7
歌詞 38
　エクステンダー 38
　ハイフン 38
　ライン 38
楽器
　移調する 33
　音部記号 54
　作成する 48
楽器のパート 34
楽器編成 47
楽器名 41
間隔
　譜表の 62
環境設定 18

き

キーボードウィンドウ 20
キーボードショートカット 6, 18
ギター 71
ギターフレーム ..... コード記号参照
記譜音 33
休符
　削除する 25
強弱記号 39, 56
　ヘアピン 39

く

クォンタイズ ..... 再表記、フレキシタイム参照
グラフィック
　エクスポートする 64
繰り返し 20
クリック 29
クレッシェンド 39, 58

こ

コーダ 83
コード記号 78
　異名同音 81
　演奏して作成する 78
　コードダイアグラムをリボイス 81
　コピーする 81
　タイプして作成する 78
　同等のコードテキスト 80
コードボックス ..... コード記号参照
ご意見 7
コピーする 26
　アイデア 74
　歌詞 39
　グラフィックをWordへ 64
　コード記号 81
　テキスト 56
　複数のオブジェクトを同時に 56
　マウスを使って 26
コンサートピッチ 33
コンテクストメニュー 56

さ

サイズ
　譜表の 61
　ページの 61
再生 35
　開始する 35
　楽器のサウンドを変更する 87
　停止する 35
　トラブルシューティング 37
　早送り 35
　ボリューム 35
　巻き戻し 35
　ライン 35
再表記 29
削除する 25
　小節 25
　タイトルページ 63
作成する
　楽器 48

し

次回から表示しない 25
実音 33
弱起小節 49
小節
　アウフタクト 49
　コピーする 26
　削除する 25
　リピート 77
小節線
　リピート 83
衝突防止 41
上拍 49

す

ズーム 15
スキャニング 51
スコア
　あちこち移動する 13
　作成する 11, 45
　バックアップ 19
　開く 11
　複数のバージョン 16
スコア情報 50
スコアスターター 11
ステップ入力 31
ステレオ位置 36
ストリップ ..... ミキサーウィンドウ参照
スラー 57, 58

せ

声部 76
選択
　グラフィック 64
　大譜表のパッセージ 24
　パッセージ 24
　複数 23

た

ダイアログ
　定義された 6
タイトルページ 50, 62
　削除する 63
ダイナミックパート 34
大譜表
　改行 61
　パッセージの選択 24
　分割する 84
大譜表の分割 84
縦置き 61
タブラチュア 71
ダルセーニョ 84

ち

調号 50, 55

つ

ツールウィンドウ 16

て

ディミヌエンド 39, 58
テキスト 38
　編集する 41
　整列する 60
　楽器名 41
　強弱記号 56
　コピーする 56
　削除する 25
　テクニックテキスト 40, 57
　テンポ 40
　テンポテキスト 57
　発想記号テキスト 56
テクニックテキスト 40, 57
テンキーウィンドウ 18
テンポ 49, 57
　テキストを使って設定する 40
　フレキシタイムの調整 29

と

トラブルシューティング
　印刷する 16
　再生 37
ドラムセット 73
トランスポートウィンドウ 28, 35

な

ナビゲーター 13

に

入力する
　2つの譜表に 70
　MIDIを使ってリアルタイムで 27
　ギターのタブ譜 72
　コード記号 78
　ステップで 31
　ドラムセットの記譜 74
　和音 31

の

ノートブック 18

は

パーカッション 73
バージョン 16
パート 34
バックアップ 19
パッセージの選択 24
発想記号テキスト 56
パノラマ 14
早送り 35
バランス 35
貼り付ける ..... コピーする参照
パン位置 36

ひ

ピアノ
　キーボード 20
拍子記号 49
表示する
　パート 34

ふ

ファイル ..... スコア参照
ファイルメニュー
　クイックスタート 11
フィルター 76
フォーマット 60
複数コピー 56
複数選択 23
符頭 76
譜表
　大きくする 61
　間隔を変更する 62
　再生サウンドを変更する 87
　作成 48
　ミュートする 86
譜表サイズ 61
譜面用紙 47
プライマリサウンドドライバ 37
フレーズマーク ..... スラー参照
フレキシタイム 27
　2つの譜表に 70
フレットボードのグリッド ..... コード記号参照

へ

ページ
　表示する 13
ヘアピン 39, 57
ヘルプ ..... トラブルシューティング参照
編集する
　テキスト 41
変則リズム 55

ほ

ボリューム 35
　強弱記号も参照
　ミュートする 86

ま

マウスホイール 14
巻き戻し 35
マグネティックレイアウト 41, 60

み

ミキサーウィンドウ 86
　楽器のサウンドを変更する 87
緑色のライン 35
ミュート 86

め

メトロノームのクリック音 29

も

元に戻す 20, 25, 34, 63

よ

用語 6
用語メニュー 56, 85
用紙サイズ 61
横置き 61
より大きな譜表 61

ら

ライン
　1番括弧と2番括弧 83
　rit./accel. 58
　歌詞の後 38
　再生 35
　大譜表 58
　ヘアピン 57
　緑色 35
ラップトップ 18
ラレンタンド 58

り

リタルダンド 58
リバーブ 36
リピート 83
　括弧 83
リピート小節 77
リファレンス 5

れ

レイアウト 60
　譜表の間隔 62
連音符 55